



\* 0007521000 \*

0007521-000

317.34-H434k

昭和八年改正恩給法解説

樋貝詮三・著

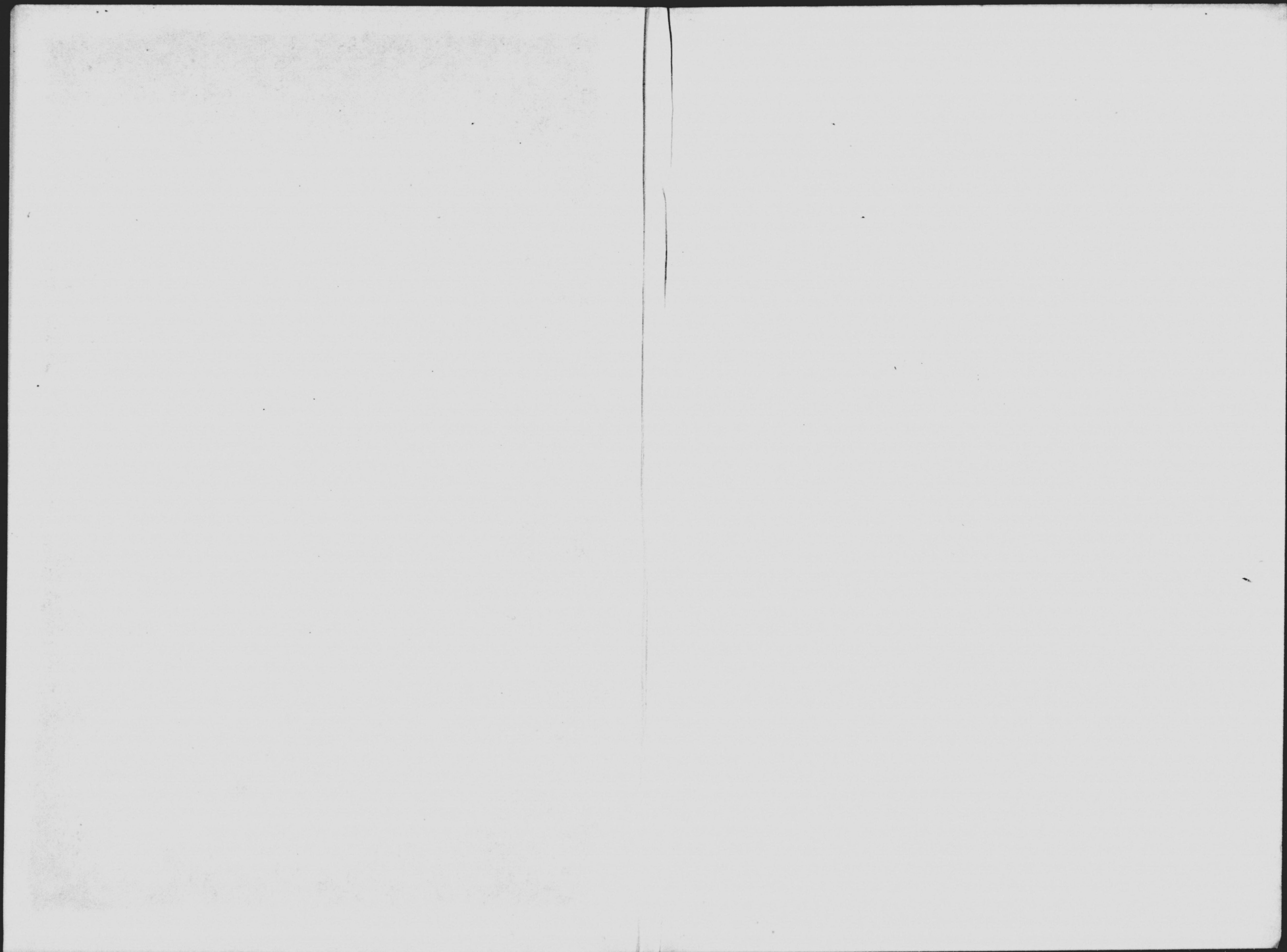
良書普及会

改訂版

1933 5版

ABH







昭和八年  
改正恩給法解説



内閣恩給局長  
樋貝詮三著

十月改訂

良書普及會版



317.34

H434R



696466

## 序

現行恩給法制定直後ヨリノ懸案デアツタ財政上ノ負擔輕減ヲ目的トスル恩給法改正モ、恩給ノ激増防止ヲ目標ニ規定中ノ不合理ヲ匡正スルコトヲ兼ヌルコトトシテ第六十四議會ニ於テ其ノ改正案ガ通過スルコトト爲ツタ。改正法ハ見様ニ依ツテハ不徹底デアリ微温的デアツテ、改正ノ衝ニ當ツタ私トシテモ此ノ意味ノ非難ハ甘ンジテ受ケル心算デアル。之ガ徹底的デアリ、抜本的デアレバ現職公務員ヤ受給者ニ及ボス影響ハ甚大デアリ、平常ニ於ケル改正トシテ其レガ推賞スベキモノデアルガ否カハ考慮ノ餘地ガアラウト思フ。今回ノ改正ガ十分ニ效果ヲ示シテ來ルノハ約十年ノ後デアアルマイカ、其レデ良イト思フ。

法律ハ結局方便デアル。改正法律ハ出來上ツタガ本體ノ運用ハ是レカラデア。法文ノ解釋ハ時々ノ國家意思ノ探究デアラウカラ、改正法律ノ解釋モ之ヲ適用スル時々ノ當局ノ見解ニ依ツテ幾分ノ變化ヲ來スコトハ又止ムヲ得ナ

序

一



イ所デアル。併シ乍ラ改正法ノ制定ニ當ツテ之ニ從事シタ者ガ「ドンナ心算」デ法案ヲ起案シ説明シ通過セシメタカトイフコトヲ記録シ置クコトハ後ノ解釋ニモ一ノ有力ナル資料ヲ提供スルコトトナリ改正法ノ趣旨ヲモ誤ラレヌコトト爲ラウト思フカラ未ダ記憶ノ抜ケ切ラヌ内ニ要領丈ヲ記シ置クコトトシタノデアル。

右ノ様ノ次第デ此ノ書ハ今日ノ國家意思ガカウデアルトイフコトヲ當局トシテ示サウ爲ノモノデハ全然ナイ。殊ニ改正法律ニ基ク幾多ノ委任勅令モ其ノ他ノ施行命令モ制定サレテ居ラナイ今爾ウイフモノノ示シ様ガナイ。何レ關係勅令ガ制定サレテ内容モ確定スルコトト爲ラウカラ其ノ時ハモツト確乎トシタモノ又ハ有權的ノモノガ述べ得ラレヤウカト思フ。併シ其ノ時期迄待テナイノハ前ニモ述べタ通り記憶ノ散漫セヌ内ニトイフ願ノアルコトト「走り」ヲ以テ任ズル怪シ氣ナ解説書ナドガ出テ關係者ヲ誤ツテハ困ルトイフ警戒ノ意味トカラデアル。關係勅令ナドガ制定サレタ後ニ若シ暇ガアツタラ追補訂正ヲシタイト思フ。

終リニ今回ノ改正法律ハ昨年ノ法律第十三號(恩給ノ減額補給及停止ニ關スル法律)ヲ變更又ハ廢止シタモノデナク之ト相竝ンデ適用サレルモノデアアルコトヲ附言シテ置キ度イ。此ノ事ハ基礎俸給ニ關スル説明ヲ爲ス部分ニモ述べテ置イタ所デアアルガ誤解アリトモ傳ヘ聞イテオルカラ特ニ此處デ明ニシテ置クコトトスル。

昭和八年五月十日



### 増補修正に當りて

恩給法の改正も本年九月十一日に公布せられた恩給法施行令中改正の勅令、恩給給與規則中改正の勅令、同給與細則中改正の閣令を以て一段落を告げたものと觀じて宜しい。

それで此の書に於ても今日までに出來た命令を以て法律の未決に残した點を補充し法律第五十號を全部に互つて説明し得た譯である。法律命令の細目に互る解釋に至つては故らに書き残したものが非常に多い、それは本書が改正の綱要丈を述べようといふ趣旨に出發して居る爲である。

尙今回改正せられた附屬命令中には法律改正に縁のなき事項も二三含まれてゐるのであるが本書の説明ではこれに觸れておらない。その部分は附録として添附した各命令の改正の部分(太字として表示)を參照



せられたい。

終りに本書はどこまでも一個人としての私の見解を述べたものであつて國家機關としての私の有權的解釋を示したものでないことをここに明にして置きたい。

昭和八年十月二日

著者

## 凡例

- 一 目次ノ中太字ヲ以テ表ハシタ條文ハ今回改正ノ施サレタ法文デアツテ、其ノ括弧内ノ文字ハ該條文ノ内容ヲ便宜要約シタモノデアアル。目次ハ全ク恩給法又ハ恩給法中改正法律ノ一部ヲ成スモノデハナイ。本解説ニ當ツテ索引的便宜ノ爲ニ置イタモノニ過ギナイ。
- 一 掲出三段ノ法文中上段ハ現行恩給法、中段ハ昭和八年法律第五十號(恩給法中改正法律)、下段ハ現行恩給法が改正法律ニ依ツテ改正セラレタ結果ノ條文デアリ、其ノ太字ハ現行法文ト相違スルニ至ツタ部分ヲ示スモノデアアル。
- 一 別表ノ改正ハ現行法文、改正法律文、改正後ノ法文ノ三段區分ヲ爲サズ、改正後ノ表ノミヲ掲出スルコトトシタ。其レハ別表ノ中全然改正サレヌモノハ第二號表(増加恩給表)デアリ、其ノ他ノ表ハ新規ノモノ又ハ全部改正ノモノデアツテ三段ニ掲出スル煩ニ堪ヘナイカラデアアル。



昭和八年 改正恩給法解説 目次

恩給法中改正法律

恩給法……………四

第一章 總則

第一條……………四

第二條……………(恩給ノ種類)……………四

第三條—第四條—第五條……………五

第六條……………(請求消滅時效)……………五

第七條—第八條……………六

第九條……………(年金恩給權ノ一般失權原因)……………七

第九條ノ二……………(受給權ノ調査)……………一一

第十條—第十一條—第十二條……………一五

目次



第十三條……(行政救済及範圍)……………一六

第十四條—第十五條……………一七

第十六條……(恩給負擔)……………一七

第十七條……(分擔請求)……………一九

第十八條……(團體納金及交付金)……………二三

第二章 公務員

第一節 通則

第十九條—第二十條—第二十一條……………二五

第二十二條……(教育職員、準教育職員ノ意義)……………二七

第二十三條……………二八

第二十四條……(待遇職員ノ意義)……………二八

第二十五條……………二九

第二十六條……(退職ノ意義)……………三〇

第二十七條……………三三

第二十八條……(在職年計算原則)……………三三

第二十九條……………三五

第三十條……(軍人、警察監獄職員在職年計算法則)……………三五

第三十一條……削除……………三六

第三十二條—第三十三條—第三十四條—第三十五條—第三十六條—  
第三十七條—第三十八條……………三七

第三十九條……(航海加算及艦隊加算)……………三九

第四十條……………四〇

第四十條ノ二……(現實ニ職務ヲ執ルヲ要セザル在職年ノ計算)……………四〇

第四十一條……(除算年)……………四一

第四十二條……(通算年)……………四三

第四十三條……(準公務員ノ在職年)……………四五

第四十四條—第四十五條……………四六

第四十六條……(增加恩給ノ要件)……………四六

第四十六條ノ二……(傷病年金ノ要件及併給)……………四八



第四十七條……(準公務員ノ増加恩給及傷病年金)……………五三

第四十八條……………五三

第四十九條……(公務傷病ノ原因、程度及準公務員ノ階等)……………五四

第五十條……(有期裁定)……………五五

第五十一條……(失格)……………五六

第五十二條—第五十三條—第五十四條—第五十五條……………五七

第五十五條ノ二……(傷病年金改定)……………六〇

第五十六條—第五十七條……(再任改定特例)……………六二

第五十八條……(恩給停止)……………六三

第五十九條……(個人納金)……………六八

第二節 恩給金額

第五十九條ノ二……(基礎俸給)……………八〇

第六十條……(文官及準文官ノ普通恩給)……………九〇

第六十一條—第六十一條ノ二……(軍人及準軍人ノ普通恩給)……………九三

第六十二條……(教育職員及準教育職員ノ普通恩給)……………九九

第六十三條……(警察監獄職員ノ普通恩給)……………一〇一

第六十四條……(待遇職員ノ普通恩給)……………一〇四

第六十四條ノ二……(一時恩給受給者ノ再任)……………一〇五

第六十五條……………一一

第六十五條ノ二……(傷病年金)……………一一

第六十六條……(傷病賜金)……………一二

第六十七條……(文官、教育職員及待遇職員ノ一時恩給)……………一三

第六十八條……(軍人ノ一時恩給)……………一四

第六十九條……削除……………一五

第七十條……(警察監獄職員ノ一時恩給)……………一六

第七十一條……削除……………一六

第三章 遺族

第七十二條—第七十三條—第七十四條……………一七

第七十五條……(扶助料年額)……………一九

第七十六條……………二二



第七十七條……(扶助料停止)……………一三三

第七十八條—第七十九條……………一三三

第八十條……(扶助料權消滅)……………一三三

第八十一條……………一三六

第八十二條……(一時扶助料)……………一三六

附則

第八十三條—第八十四條—第八十五條—第八十六條—第八十七條—  
第八十八條—第八十九條—第九十條……………一三八

第九十一條……(殖民地加算年)……………一三五

第九十二條—第九十三條—第九十四條—第九十五條—第九十六條—  
第九十七條—第九十八條……………一三六

第九十九條……刪除……………一三九

第一百條—第一百一條—第一百二條—第一百三條—第一百四條……………一四七

別表

第一號表……(軍人假定俸給年額)……………一五二

第二號表……………一五四

第三號表……(傷病年金)……………一五五

第四號表……(傷病賜金)……………一五七

改正法律附則(昭和八年法律第五十號)

第一條……(施行期日)……………一六一

第二條……(適用例)……………一六一

第三條……(公務傷病程度出訴權ノ存續)……………一六一

第四條……(團體納金ノ經過規定)……………一六二

第五條……(従前ノ在職年計算)……………一六三

第六條……(休職等ノ在職年計算ノ特例)……………一六三

第七條……(傷病年金ノ原因事實)……………一六四

第八條……(若年者恩給停止ノ始期)……………一六五

第九條……(個人納金増額ノ始期)……………一六六

第十條……(基礎俸給年額ノ特例)……………一六七



第十一條……(年限延長ノ特例(一))……………一六

第十二條……(年限延長ノ特例(二))……………一七〇

第十三條……(従前ノ一時恩給受給者ノ再任)……………一七一

第十四條……(特殊扶助料ノ特例)……………一七二

第十五條……(巡查警部在職年ノ通算)……………一七三

第十六條……(加算年整備)……………一七七

第十七條—第十八條—第十九條……(第九十九條廢止後ノ處理)……………一七七一—一七八

附 録

昭和八年恩給法中改正法律(昭和八年法律第五十號)解説

大正十二年恩給法ノ制定アリテヨリ幾何モナク財政上ノ見地ヨリシテ恩給法改正ノ議ガ起リ、大正十五年若槻内閣ニ於テハ其ノ設置シタ行政調査會ニ於テ特別委員ヲシテ其ノ改正ニ付審議セシメタケレドモ遂ニ決定案ヲ見ルニ至ラズシテ内閣ガ倒レ、次デ昭和三年ニハ時ノ田中内閣ハ行政制度審議會ヲシテ之ヲ調査審議セシメ、審議會ハ長キ審議ノ結果答申案ヲ作成シテ政府ニ提出シ、政府ハ之ニ基キテ改正法律ノ立案ニ著手シタケレドモ議會ニ提出スル前之ヲ中止セザルヲ得ナイ事情ニ立至ツタ。更ニ昭和六年ニハ濱口内閣ハ臨時行政財政審議會ヲ設置シ、恩給法整理ヲ一重要項目トシテ之ガ調査審議ヲ爲サシメ、國務大臣ヲ首班トスル特別委員會之ガ任ニ當リ決定案ヲ作成スルニ至ツタケレドモ實狀ニ適セザルモノモアリ、法律案ノ作成ニ一頓挫ヲ來シテ居ル中ニ、濱口首相兇手ニ殞レテ内閣ハ瓦解シ、恩給法改正モ自然消滅ト爲ツタ。犬養内閣ハ餘リニモ短命デ、遂ニ之ニ著手スル暇ガ無カツタ。



昭和七年五月齋藤内閣ノ成立スルヤ實現可能ノ改正案ヲ得ルコトノ方針ノ下ニ、審議會ノ如キ特別機關ヲ設置セズ、柴田書記官長、堀切法制局長官ガ中心ト爲ツテ既存ノ機關ノミニ依リテ改正案ヲ作成スルコトト爲リ恩給局ガ原案ノ作成ニ當ツタ。其ノ後改正案ヲ得ルニ從ツテ時々其ノ内容ヲ新聞紙ヲ通ジテ國民ノ輿論ニ問ヒ、必要ナル修正ヲ加ヘツツ進ンデ、遂ニ昭和八年二月十八日第六十四帝國議會ニ恩給法中改正法律案トシテ提出シ、同案ハ三月二十三日兩院ヲ通過シ、四月十日公布セラレ、本年十月一日ヨリ施行セラルルコトト爲ツタノデアル。

改正法ノ目的ハ一面之ニ依リ、年々急角度ヲ以テスル恩給總額ノ累増ヲ緩和シテ財政上ノ負擔ヲ減ズルト共ニ、他面恩給法中ニ存スル諸種ノ不合理、不備ヲ整理シテ以テ恩給制度ノ確立ヲ企圖スルトイフコトニ在ツタ。今改正法律ノ規定シタル主ナル事項ヲ舉示スレバ次ノ如クデアル。

- (一) 普通恩給年限ノ延長(六〇―六四、附則一―二、三)
- (二) 基礎俸給ノ變更(五九ノ二、附則一〇)
- (三) 傷病年金ノ創定(四六ノ二、附則七)
- (四) 特殊扶助料ノ増額(七四、附則一四)
- (五) 一時恩給及一時扶助料ニ付最短年限ノ設定(六七、八二)

- (六) 一時恩給受給者ノ再任ノ場合ニ於ケル控除(六四ノ二、附則一三)
  - (七) 若年受給者ノ恩給一部停止(五八・三、附則八)
  - (八) 多額所得者ノ恩給一部停止(五八・四)
  - (九) 失權失格原因ノ整理(九、四一、八〇)
  - (十) 個人及團體ノ納金ノ増額(一八・一、五九、附則四、九)
  - (十一) 加算規定ノ整備(三九、九一、附則五、一六)
  - (十二) 受給權調査(九ノ二)
  - (十三) 逡巡警部在職年ノ通算(附則一五)
  - (十四) 教育職員在職年ト他種公務員ノ在職年トノ相互通算(附則一七、以下)
  - (十五) 諸規定整理(主ナルモノ一三、附則三、四〇ノ二、附則五、六)
- 以下ニ各條文ニ付簡單ニ解説スルコトトスル。



### 恩給法 (改正前)

#### (昭和八年法律第五十號)

### 恩給法 (改正後)

#### 第一章 總則

第一條 公務員及之ニ準スヘキ者並其ノ遺族ハ本法ノ定ムル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 本法ニ於テ恩給トハ普通恩給、增加恩給、一時恩給、傷病賜金、扶助料及一時扶助料ヲ謂フ

普通恩給、增加恩給及扶助料ハ年金トシ一時恩給、傷病賜金及一時扶助料ハ一時金トス

第二條中「增加恩給」ノ下ニ、「傷病年金」ヲ加フ

#### 第一章 總則

第一條 公務員及之ニ準スヘキ者並其ノ遺族ハ本法ノ定ムル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 本法ニ於テ恩給トハ普通恩給、增加恩給、傷病年金、一時恩給、傷病賜金、扶助料及一時扶助料ヲ謂フ

普通恩給、增加恩給、傷病年金及扶助料ハ年金トシ一時恩給、傷病賜金及一時扶助料ハ一時金トス

本條ノ改正ハ、今回ノ改正法律ニ於テ新ニ傷病年金ヲ創設シ(四六ノ二)、不具癱疾ノ程度ニ達セザル公務傷病者ニ之ヲ給與スルコトト爲シタ結果、恩給ノ種類中ニ「傷病年金」ナル一項目ヲ加ヘル爲デア

第三條 年金タル恩給ノ給與ハ之ヲ給

スヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ始メ權利消滅ノ月ヲ以テ終ル

第四條 恩給年額並一時恩給及一時扶助料ノ額ノ圓位未滿ハ之ヲ圓位ニ滿タシム

第五條 恩給ヲ受クルノ權利ハ之ヲ給スヘキ事由ノ生シタル日ヨリ七年間請求セサルトキハ時効ニ因リテ消滅ス

第六條 普通恩給又ハ增加恩給ヲ受クルノ權利ヲ有スル者退職後一年內ニ再就職スルトキハ前條ノ期間ハ再就職ニ係ル官職ノ退職ノ日ヨリ進行ス

前項ノ規定ハ普通恩給又ハ增加恩給ヲ受クルノ權利ヲ有スル者退職後一年內ニ第四十二條第一項第一號ニ規定スル宮内職員トシテ就職シタル場合ニ付之ヲ準用ス

第六條中「又ハ增加恩給」ヲ「增加恩給又ハ傷病年金」ニ改ム

第三條 年金タル恩給ノ給與ハ之ヲ給

スヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ始メ權利消滅ノ月ヲ以テ終ル

第四條 恩給年額並一時恩給及一時扶助料ノ額ノ圓位未滿ハ之ヲ圓位ニ滿タシム

第五條 恩給ヲ受クルノ權利ハ之ヲ給スヘキ事由ノ生シタル日ヨリ七年間請求セサルトキハ時効ニ因リテ消滅ス

第六條 普通恩給、增加恩給又ハ傷病年金ヲ受クルノ權利ヲ有スル者退職後一年內ニ再就職スルトキハ前條ノ期間ハ再就職ニ係ル官職ノ退職ノ日ヨリ進行ス

前項ノ規定ハ普通恩給、增加恩給又ハ傷病年金ヲ受クルノ權利ヲ有スル者退職後一年內ニ第四十二條第一項第一號ニ規定スル宮内職員トシテ就職シタル場合ニ付之ヲ準用ス



本條ハ普通恩給又ハ増加恩給ヲ受クル者即チ年金タル恩給ヲ受クル權利アル公務員自身ガ、其ノ恩給ヲ未請求ノ儘再就職シタル場合ニ、恩給ヲ請求スル權利ノ消滅時効ノ期間ハ再度ノ在職ヲ止メタル時ヨリ進行スルコトノ規定デアアルガ、改正法ハ新ニ年金タル恩給ノ一種トシテ「傷病年金」ヲ認メタカラ、其ノ請求時効ニ付テモ同様ニ規定スル必要ガアツテ本條ニ「傷病年金」ナル文字ヲ加フルコトトシタノデアアル。

第七條 時効期間滿了前二十日內ニ於テ天災其ノ他避クヘカラサル事變ノ爲請求ヲ爲スコト能ハサルトキハ其ノ妨碍ノ止ミタル日ヨリ二十日內ハ時効完成セス

時効期間滿了前六月內ニ於テ前權利者生死若ハ所在不明ノ爲又ハ未成年者若ハ禁治產者法定代理人ヲ有セサル爲請求ヲ爲スコト能ハサルトキハ請求ヲ爲スコトヲ得ルニ至リタル日ヨリ六月內ハ時効完成セス  
時効期間滿了前ニ適法ニ請求書ヲ發

第七條 時効期間滿了前二十日內ニ於テ天災其ノ他避クヘカラサル事變ノ爲請求ヲ爲スコト能ハサルトキハ其ノ妨碍ノ止ミタル日ヨリ二十日內ハ時効完成セス

時効期間滿了前六月內ニ於テ前權利者生死若ハ所在不明ノ爲又ハ未成年者若ハ禁治產者法定代理人ヲ有セサル爲請求ヲ爲スコト能ハサルトキハ請求ヲ爲スコトヲ得ルニ至リタル日ヨリ六月內ハ時効完成セス  
時効期間滿了前ニ適法ニ請求書ヲ發

シタルコトノ通信官署ノ公證アルトキハ時効期間內ニ權限アル官公署ニ到達セサルモ之ヲ時効期間內ニ到達シタルモノト看做ス

第八條 公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族互ニ通算セラレ得ヘキ在職年又ハ同一ノ傷病ヲ理由トシテ二以上ノ恩給ヲ併給セララルヘキ場合ニ於テハ其ノ者ノ選擇ニ依リ其ノ一ヲ給ス但シ特ニ併給スヘキコトヲ定メタル場合ハ此ノ限ニ在ラス  
公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族互ニ通算セラレ得ヘキ在職年又ハ同一ノ傷病ヲ理由トシテ本法ニ依ル恩給ト宮内官ノ恩給規程ニ依ル恩給トヲ給セララルヘキ場合ニ於テ宮内官ノ恩給規程ニ依ル恩給ヲ給セラレタルトキハ本法ニ依ル恩給ハ之ヲ給セス

第九條 年金タル恩給ヲ受クルノ權利

恩給法 第一章 總則 第八條、第九條

第九條第二號中「六年以上」ヲ「二

シタルコトノ通信官署ノ公證アルトキハ時効期間內ニ權限アル官公署ニ到達セサルモ之ヲ時効期間內ニ到達シタルモノト看做ス

第八條 公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族互ニ通算セラレ得ヘキ在職年又ハ同一ノ傷病ヲ理由トシテ二以上ノ恩給ヲ併給セララルヘキ場合ニ於テハ其ノ者ノ選擇ニ依リ其ノ一ヲ給ス但シ特ニ併給スヘキコトヲ定メタル場合ハ此ノ限ニ在ラス  
公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族互ニ通算セラレ得ヘキ在職年又ハ同一ノ傷病ヲ理由トシテ本法ニ依ル恩給ト宮内官ノ恩給規程ニ依ル恩給トヲ給セララルヘキ場合ニ於テ宮内官ノ恩給規程ニ依ル恩給ヲ給セラレタルトキハ本法ニ依ル恩給ハ之ヲ給セス

第九條 年金タル恩給ヲ受クルノ權利

七



ヲ有スル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ權利消滅ス

- 一 死亡シタルトキ
- 二 死刑又ハ無期若ハ六年以上ノ懲役若ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 三 國籍ヲ失ヒタルトキ

年ヲ超ユルニ改ム

同條ニ左ノ一項ヲ加フ

在職中ノ職務ニ關スル犯罪(過失犯ヲ除ク)ニ因リ禁錮以上ノ刑(陸軍刑法又ハ海軍刑法ニ依ル一年未滿ノ禁錮ノ刑ヲ含マス)ニ處セラレタルトキハ其ノ權利消滅ス但シ其ノ在職カ普通恩給ヲ受ケタル後ニ爲サレタルモノナルトキハ其ノ再在職ニ因リテ生シタル權利ノミ消滅ス

ヲ有スル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ權利消滅ス

- 一 死亡シタルトキ
- 二 死刑又ハ無期若ハ二年ヲ超ユル懲役若ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 三 國籍ヲ失ヒタルトキ

在職中ノ職務ニ關スル犯罪(過失犯ヲ除ク)ニ因リ禁錮以上ノ刑(陸軍刑法又ハ海軍刑法ニ依ル一年未滿ノ禁錮ノ刑ヲ含マス)ニ處セラレタルトキハ其ノ權利消滅ス但シ其ノ在職カ普通恩給ヲ受ケタル後ニ爲サレタルモノナルトキハ其ノ再在職ニ因リテ生シタル權利ノミ消滅ス

本條ニテハ年金タル恩給ヲ受クル權利ノ消滅原因ノ中ノ一般ノモノヲ規定シタルノデアアルガ(扶助料ノナル消滅原因ニ付テハ尙第八十條)其ノ中現行規定ガ其ノ權利ハ六年以上ノ懲役又ハ禁錮ノ言渡刑ニ依ツテ失權スルトシテオトルヲ改正法ハ二年ヲ超ユル懲役又ハ禁錮ノ言渡刑ニ依ツテ失權スルコトニ改メタ。之ガ本條ノ

改正ノ第一點デアアル。現行法ガ六年ヲ標準ニシタルハ舊刑法ノ重罪ノ刑ヲ取ツテ來テオトルノデアアルガ、刑法ニ於テモ重罪輕罪ノ區別ヲ廢止シタシ、又恩給權ノ如キ公權ニ付テハ六年以上ノ言渡刑ヲ失權ストスルガ如キハ標準ガ高キニ失スルカラ、執行猶豫ノ言渡ノ附シ得ルカ否カノ限界デアアル二年ヲ標準トスルコトニ改正シタルデアアル。二年ヲ超ユルトイフノハ二年ヲ含マヌ意味デアツテ、二年ノ言渡刑デアアルナラバ失權シナイ。執行猶豫ノ言渡ノ附セラレタ場合デモ附セラレナイ場合デモ同ジデアアル。何年以上何年以内トイフ形式デ言渡サレタル刑罰ハ其ノ最長限ニ於テ二年ヲ超ユルカ否カヲ見ルベキデアアル。

本條ニ第二項ヲ新ニ置イタルハ第五十一條第一項第二號ノ規定トノ權衡カラト官規維持ノ必要カラトデアアル。在職中罪ヲ犯シ且在職中ニ判決ガ確定シタルトキハ當然失格スルノニ判決確定前ニ辭職シテ了ヘバ失格ヲ來サズニ恩給權ヲ生ズルコトト爲ル。之レハ不當デアアルカラ、同様ノ事情ガ退職後ニ生ジテモ失權スルコトトシタルデアアル。併シ之レハ溯及的效力ヲ生ズル失格原因トシタルデアハナクテ將來ニ向ツテ效力ヲ生ズル失權原因トシタルデアアル。其ノ結果ハ失權事由即チ判決ノ確定シタル月ノ翌月分カラ給與ヲ爲サナイコトニ爲ルノデアアル(三)。退職ノ時ニ迄溯ツテ恩給資格ヲ失ハシムルモノトシナカツタノハ給與關係ヲ複雜ニシ過ギルカラデアアル。又在職中ニ起ツタトスレバ失格ノ原因ト爲ルモ



ノデアツテ而モ退職後ニモ起リ得ルモノニ教員免許狀ノ褫奪ノ處分ガアルガ之レハ今回ノ改正法ニ於テ失權原因トシナカツタ。性質上懲戒ト同様ニ取扱ツテ置クノヲ穩當トシタカラデアル。

在職中ノ「職務ニ關スル犯罪」トイフノハ職務ニ在ルコトガ犯罪ノ成立要件タル場合ノミナラズ、犯罪ガ在職又ハ職務執行ヲ利用シテ爲サルル等苟モ在職ト犯罪トノ間ニ相當因果ノ關係ガ認めラルル限リハ職務ニ關スル犯罪デアル。故ニ瀆職罪、自己ノ保管スル官印ノ濫用、出納官吏ノ保管金横領等皆職務ニ關スル犯罪デアル。併シ職務トノ關係ノ考ヘラレヌモノ例ヘバ私怨ノ爲ノ殺傷、賭博等ハ職務ニ關スル犯罪デハナイ。又職務ニ關スル犯罪ノ中デモ過失犯ハ之ヲ除イテオル、例ヘバ業務上ノ過失ニ因リ汽車、電車又ハ艦船ノ顛覆、破壊、覆没ヲ生ゼシメ禁錮ノ刑ニ處セラレタル場合ノ如キ之レデア。之レハ本人ニ過酷ダカラデアル。

一度普通恩給ヲ受ケテ後再ビ在職シ再在職中ニ犯罪ヲ爲シテ退職後、在職中ノ職務ニ關スル犯罪ニ因リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタ者ハ再在職ニ因リテ生ジタル權利ノミヲ失フノデアツテ、既得ノ恩給權ニ迄ハ及バヌノデア。前ニ増加恩給又ハ傷病年金ヲ受ケタル者ガ再就職シテ右様ノ事情ニ在ツタ場合ニ其ノ増加恩給又ハ傷病年金ノ權利ヲ失ハヌノモ勿論デアルト謂ハネバナラヌ。傷病年金ニハ必然ニ普通恩給ヲ伴ハヌケレドモ法意ハ爾ウ解スベキモノデア。是レハ此等ノ恩給ガ在職年ヲ理由ト

シテ給與スルモノデナイ所ヨリシテモ其ノ趣旨ガ窺ハレル。再在職ニ因ル權利トイフノハ再任改定ニ依ル權利ヲ謂フノデア。刑罰ガ若シ二年ヲ超ユル懲役又ハ禁錮ナル場合ニハ凡テノ權利ヲ失フモノデア。之レハ本條ノ第一項第二號ガ支配スル所デアツテ言フヲ俟タナイ。

第九條ノ二 裁定官廳ハ勅令ノ定ムル

所ニ依リ年金タル恩給ヲ受クルノ權

利ヲ有スル者ニ付其ノ權利ノ存否ヲ

調査スヘシ

第九條ノ二 裁定官廳ハ勅令ノ定ムル

所ニ依リ年金タル恩給ヲ受クルノ權

利ヲ有スル者ニ付其ノ權利ノ存否ヲ

調査スヘシ

年金タル恩給ヲ受クルノ權利ヲ有スル者ノ受給權ガ事實上初ヨリ存在セザルカ又ハ爾後ニ權利ガ消滅シタルニモ拘ラズ、偶々恩給證書ガ手中ニ存スルガ爲ニ恰モ權利者ナルガ如クニ恩給ノ受給ヲ續クル者ガ少クナイ。例ヘバ受給者ガ死亡シタルニ拘ラズ其ノ家族等ガ支給應ニ届出ヲ爲サズニ本人デア。ルガ如クニシテ受給ヲ續ケ、又本人ガ處刑ニ依リ失權シテ居ルノニ尙受給シ、遺族ガ去籍シ成年ニ達シ若ハ婚姻シ居ルニ拘ラズ依然支給ヲ受ケ居ルガ如キ、受給者ノ故意、過失又ハ支給應ノ過失等ニ依ツテ支給ヲ續ケタ場合ニハ後ヨリ其ノ理由ナクシテ給與シタル分ヲ過誤拂トシテ追徴シ得ルコトハ現今解釋ノ一致シテオル所デア。受給者ガ善意ナリシ場合ニ數年分ヲ一時ニ追徴サルルコトハ其ノ甚シイ苦痛トスル所デア。又逆ニ之ヲ追徴シ得ザルトキハ支給主體ノ損失ニ歸スル所デア。改正



法ニ於テハ勅令ノ定ムル所ニヨリ甚シキニ至ラヌ前ニ之ヲ調査スベキモノトシタノデアアル。其レヲ受ケテ恩給法施行令ハ其ノ第一條乃至第一條ノ三ニ於テ之ヲ規定シテ居ル。其レニ依レバ、

(イ) 調査ハ一般的ノモノニ付テハ受給者ノ身分關係、即チ婚姻トカ、分家トカ、成年トカノ關係ニ付テ變動ガアツタカ否カニ關シテ之ヲ爲スモノトシ、

(ロ) 特殊ノ恩給ヲ受クル者、即チ夫タル遺族又ハ成年ノ子タル遺族デアツテ不具癱疾、生活資料ヲ得ルノ途ナク且其ノ者ヲ扶養スル者ノナキコトヲ條件トシテ扶助料ヲ給セラルル者ニ付テハ(イ)ニ述ベタ一般ノ事項ノ外ニ其ノ特殊事情ノ存續スルヤ否ヤヲ調査スルモノト爲シタノデアアル(施令一)。

此等ノ調査ノ爲ニ受給者ヲシテ一定ノ書類ヲ裁定官廳ニ提出セシムル譯デアアルガ、前述ノ(イ)ノ身分關係ニ變動アリタリヤ否ヤヲ調査スル目的ノ爲ニハ、受給者ノ中デ、公務員 準公務員(自身ト寡婦トハ戶籍抄本ヲ提出スベク、又寡婦以外ノ遺族、即チ子、夫、父母、祖父母ハ戶籍謄本ヲ提出スベキデアアル(施令一))。又前述(ロ)ノ條件ノ存續ヲ證明スル爲ニハ、不具癱疾ヲ證スル診斷書(醫師ノ)ト其ノ者ガ自ラ生活資料ヲ得ルノ途モナク又之ヲ扶養スル者モナキコトヲ證スル居住地ノ市町村長又ハ之ニ準ズベキ者ノ證明書ヲ提出スベキデアアル(施令一)(施令二)。市町村長ニ準ズベキ者トイフノハ區長トカ面長トカ

イフモノヲ指スノデアアル。

右ノ戶籍抄本、戶籍謄本又ハ市町村長ノ證明書ハ之ニ依ツテ證明セントスル事實ガ裁定官廳ニ明瞭ニ分ツテオル場合ト、相當官署例ヘバ警察署等ニ於テ證明シタ場合ニハ裁定官廳ガ之デ宜シトスルトキニハ何モ出サナイデモ、又ハ相當官署ノ書面デモ宜シイノデアアル(施令一)(施令二)。然シ之ハ裁定官廳ノ方ガ、此レデ宜シイトイツタ時ダケ有效デ、受給者ノ方カラ之ヲ強ヒテ押シ付ケ得ルモノデハナイ。裁定官廳ニ顯著ナ事實トイフノハ、例ヘバ受給者ガ生存シテ居ルコトヲ裁定官廳ガ目撃シテ居ル様ナ場合トカ、生活不能ノ状態ヲ裁定官廳ガ官吏ヲ派シテ調査シタ様ナ場合ヲ指スノデアアル。

年金タル恩給ノ受給權ハ身分關係ヤ生活不能關係ヤノ外、二年ヲ超ユル懲役又ハ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ、若ハ職務ニ關スル犯罪(過失犯ヲ除ク)ニ依ツテモ失權ヲ來スモノデアツテ(九一)、之ニ付テモ調査ヲ爲スベキコトハ勿論デアアルガ、之ハ當分裁定官廳ガ行政手段ヲ以テ獨自ニ調査ヲスルコトト爲ツテオリ、受給者ヲシテ之ニ助力セシメヌカラ委任勅令タル施行令第一條、第一條ノ二ニテモ差當リ何等言及シナイノデアアル。施行令ニ何等ノ規定ガナイカラ調査ガ出來ナイトカ、調査ヲシナイモノデアルトカ誤解スベキデハナイ。唯受給者ヲシテ何等ノ書類ヲモ提出セシメヌトイフノニ過ギナイ。

此等ノ證明書ヲ出サシメテノ調査ハ恩給ノ裁定後時ヲ經タトキニ初メテ必要ニナルノデアツテ、裁



定直後ニハ之ヲ必要トシナイ譯デアル。此處デ其ノ書類ヲ提出スベキ月(後述スル)ガ恩給ノ裁定ヲ爲シタ月(證書日附ニ在ル月)ノ翌月カラ起算シテ十二月内ニ在ルトキハ其ノ書類ヲ提出シナクトモ宜シイ、トシテオル(施令一ノ二)。

次ニ、右ニ述ベタ提出スベキ書類(戶籍抄本又ハ戶籍謄本ト診斷書及生活不能ノ證明書)ヲ提出スベキ年ハ隔年デアツテ、陸軍軍人(準軍人)ト警察監獄職員ト及其等ノ者ノ遺族トハ昭和十年、十二年、十四年等偶數ノ年ニ、又其ノ他ノ公務員(準公務員)即チ文官(準文官)、海軍軍人(準軍人)、教育職員(準教育職員)、待遇職員ト及其等ノ者ノ遺族トハ昭和九年、十一年、十三年等奇數ノ年ニ書類ヲ提出スベキデアル。ソシテ提出スベキ月ハ公務員(準公務員)本人ナラバ一月、遺族ナラバ七月デアル。例ヘバ陸軍軍人ハ第一回ハ昭和十年一月デアリ、陸軍軍人遺族ハ昭和十年七月デアリ、文官、海軍軍人ハ第一回ハ昭和九年一月デアリ、文官又ハ海軍軍人ノ遺族ハ昭和九年七月デアル様ナモノデアル。

右ノ戶籍抄本、戶籍謄本、診斷書及生活不能ノ證明書ハ前述ノ提出月カ又ハ其ノ前月現在ノ状態ヲ書イタモノデナケレバナラヌ。甚ダ古イモノナドハ不十分デアル(給與規則三四ノ二)。

右ノ書類(戶籍抄本、戶籍謄本、診斷書、生活不能證明書)ヲ提出セザルコトノ結果ハ、恩給ノ現金ノ支給ガ一時差止ラレルトイフコトデアル。其レヲ差止メルニ至ル時期ハ書類ヲ提出スベキ月ノ次ノ次ニ

來ル支給期カラデアル。例ヘバ國家ノ恩給ハ一月、四月、七月、十月ニ支給スルノデアルガ、一月ニ提出スベキ書類ヲ提出シナイトキハ其ノ年七月ノ支給期カラノ支給ヲ差止メルノデアル(施令一ノ四)。此ノ差止ハ恩給法上ノ停止ト違ツテ唯、支給ノ時期ヲ後ラス丈デアツテ、後ニ證明書類ヲ提出シテ來レバ後カラ差止メテ置イタ分モ支給スルノデアル。書類提出期ニ書類ヲ提出スルコトノ出來ナカツタ者ハ、後ヨリ成ルベク速ニ之ヲ提出スルノガ良イ、之ニ依ツテ次々期ノ支給モ差止メラレズニ濟ムカモ知レナイ。

第十條 恩給權者死亡シタルトキハ其ノ生存中ノ恩給ニシテ給與ヲ受ケサリシモノハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ當該公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ遺族ニ給シ遺族ナキトキハ死亡者ノ相續人ニ給ス

第十一條 恩給ヲ受クルノ權利ハ之ヲ讓渡シ又ハ擔保ニ供スルコトヲ得

恩給ヲ受クルノ權利ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス但シ國稅徵收法又ハ國稅

第十條 恩給權者死亡シタルトキハ其ノ生存中ノ恩給ニシテ給與ヲ受ケサリシモノハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ當該公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ遺族ニ給シ遺族ナキトキハ死亡者ノ相續人ニ給ス

第十一條 恩給ヲ受クルノ權利ハ之ヲ讓渡シ又ハ擔保ニ供スルコトヲ得

恩給ヲ受クルノ權利ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス但シ國稅徵收法又ハ國稅



徵收ノ例ニ依ル場合ハ此ノ限ニ在ラ

第十二條 恩給ヲ受クルノ權利ハ勅令ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外内閣恩給局長之ヲ裁定ス

第十三條 行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ侵害セラレタリトスル者ハ處分後一年内ニ内閣恩給局長ニ具申シ其ノ裁決ヲ求ムルコトヲ得前項ノ裁決ニ不服アル者ハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ六月内ニ内閣總理大臣ニ訴願シ又ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得  
第一項ノ具申ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十三條第二項ニ左ノ但書ヲ加フ  
但シ公務傷病ノ程度ニ付テハ出訴ヲ爲スコトヲ得ス

徵收ノ例ニ依ル場合ハ此ノ限ニ在ラ

第十二條 恩給ヲ受クルノ權利ハ勅令ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外内閣恩給局長之ヲ裁定ス

第十三條 行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ侵害セラレタリトスル者ハ處分後一年内ニ内閣恩給局長ニ具申シ其ノ裁決ヲ求ムルコトヲ得前項ノ裁決ニ不服アル者ハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ六月内ニ内閣總理大臣ニ訴願シ又ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但シ公務傷病ノ程度ニ付テハ出訴ヲ爲スコトヲ得ス  
第一項ノ具申ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

本條ノ改正ハ行政裁判所ヘノ出訴事項中ヨリ公務傷病ノ程度ヲ除イタノデアアル。此ノ事項ハ大正十二年恩給法統一前モ出訴事項中ヨリ除カレテ居ツタ所デアアルガ、恩給法實施後ノ實績ニ徴シテ又々之ヲ除クコトトシタノデアアル。其レハ行政訴訟事項トシテ適當ノモノデナイカラデアツテ、恩給局長ノ

裁決(具申ニ對スル)又ハ内閣總理大臣ノ訴願裁決ヲ以テ最終トスル。此ノ出訴ニ關スル除外事項ハ傷病ノ程度丈デアツテ、其ノ傷病ガ公務ニ起因スルモノナリヤ否ヤ換言スレバ因果關係ニ付テハ行政裁判事項タルコトヲ失ハナイ。

第十四條 内閣總理大臣及内閣恩給局長ノ裁決ハ關係官廳ヲ羈束ス

第十五條 内閣總理大臣第十三條第二項ノ訴願ノ裁決ヲ爲ス場合ニ於テハ恩給審査會ニ諮問スヘシ  
恩給審査會ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 恩給ノ負擔ハ左ノ區分ニ依ル

- 一 文官及準文官並其ノ遺族ノ恩給ハ國庫之ヲ負擔ス但シ文官ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受ケサル者ノ一時恩給ハ最終ニ之ニ俸給ヲ給シタル者之ヲ負擔ス
- 二 軍人及準軍人並其ノ遺族ノ恩給

恩給法 第一章 總則 第十四條、第十五條、第十六條

第十六條第三號中「及盲啞學校其ノ他ノ「ヲ」、盲學校、聾啞學校及」ニ改ム

第十四條 内閣總理大臣及内閣恩給局長ノ裁決ハ關係官廳ヲ羈束ス

第十五條 内閣總理大臣第十三條第二項ノ訴願ノ裁決ヲ爲ス場合ニ於テハ恩給審査會ニ諮問スヘシ  
恩給審査會ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 恩給ノ負擔ハ左ノ區分ニ依ル

- 一 文官及準文官並其ノ遺族ノ恩給ハ國庫之ヲ負擔ス但シ文官ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受ケサル者ノ一時恩給ハ最終ニ之ニ俸給ヲ給シタル者之ヲ負擔ス
- 二 軍人及準軍人並其ノ遺族ノ恩給



ハ國庫之ヲ負擔ス

三 朝鮮、臺灣及樺太ニ於ケルモノ  
ヲ除クノ外公立ノ小學校、實業補習學校、幼稚園及盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員及準教育職員並其ノ遺族ノ恩給ハ其ノ學校又ハ幼稚園ノ所在地ヲ管轄スル府縣又ハ之ニ準スヘキ地方經濟之ヲ負擔ス

四 前號ニ規定スル者以外ノ教育職員及準教育職員並其ノ遺族ノ恩給ハ國庫之ヲ負擔ス但シ在外指定學校職員ノ一時恩給ヲ除クノ外一時恩給ハ最終ニ之ニ俸給又ハ給料ヲ給シタル者之ヲ負擔ス

五 警察監獄職員及其ノ遺族ノ恩給ハ最終ニ之ニ俸給又ハ給料ヲ給シタル者之ヲ負擔ス

六 待遇職員及其ノ遺族ノ恩給ハ最終ニ之ニ俸給又ハ給料ヲ給シタル

ハ國庫之ヲ負擔ス

三 朝鮮、臺灣及樺太ニ於ケルモノ  
ヲ除クノ外公立ノ小學校、實業補習學校、幼稚園、盲學校、聾啞學校及小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員及準教育職員並其ノ遺族ノ恩給ハ其ノ學校又ハ幼稚園ノ所在地ヲ管轄スル府縣又ハ之ニ準スヘキ地方經濟之ヲ負擔ス

四 前號ニ規定スル者以外ノ教育職員及準教育職員並其ノ遺族ノ恩給ハ國庫之ヲ負擔ス但シ在外指定學校職員ノ一時恩給ヲ除クノ外一時恩給ハ最終ニ之ニ俸給又ハ給料ヲ給シタル者之ヲ負擔ス

五 警察監獄職員及其ノ遺族ノ恩給ハ最終ニ之ニ俸給又ハ給料ヲ給シタル者之ヲ負擔ス

六 待遇職員及其ノ遺族ノ恩給ハ最終ニ之ニ俸給又ハ給料ヲ給シタル

者之ヲ負擔ス但シ官國幣社ノ神職及其ノ遺族ノ恩給ハ國庫之ヲ負擔ス

者之ヲ負擔ス但シ官國幣社ノ神職及其ノ遺族ノ恩給ハ國庫之ヲ負擔ス

本條中ノ改正ハ全クノ字句整理デアツテ、從來盲啞學校ト稱シ居タルモノガ、盲學校、聾啞學校ニ二分サレタ結果之ヲ別個ニ規定シタコトト、從前此等ノ學校ハ「小學校ニ類スル各種學校」中ニ一括セラレ居タルモノガ獨立ノ地位ヲ得タルガ故ニ本條デモ「其ノ他ノ」ヲ「及」ニ直シタコトデアアル。

右ノ改正ハ盲學校及聾啞學校令附則第四項ノ規定ニ依ツテ存置セララルル盲啞學校(盲學校及聾啞學校)ヲ盲學校、聾啞學校中ヨリ除外スル趣旨デナイコトハ勿論デアアル。

第十七條 前條第一號、第二號又ハ第四號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ在職年中ニ第三號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ在職年又ハ第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受ケサルモノノ在職年ヲ通算シテ國庫ヨリ恩給ヲ給スル場合ニ於テハ國庫ハ通算セラ

第十七條第一項中「前條第一號、第二號又ハ第四號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ在職年中」ヲ「前條第一號、第二號若ハ第四號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ在職年又ハ第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受ケサルモノノ在職年中」ニ、同條第四項中「第四號若ハ第五號」ヲ「第五號若ハ第六號」

第十七條 前條第一號、第二號若ハ第四號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ在職年又ハ第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受ケサルモノノ在職年ヲ通算シテ國庫ヨ



ニ依リ恩給金額ノ分擔ヲ第三號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者ニ恩給ヲ給スル者又ハ第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員ニ俸給ヲ給スル者ニ對シ請求スルコトヲ得

前條第三號、第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族ニ恩給ヲ給スヘキ國庫以外ノ者ハ其ノ恩給ノ基礎在職年中ニ第一號、第二號若ハ第四號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ在職年又ハ第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受クルモノノ在職年ヲ通算シテ恩給ヲ給スル場合ニ於テハ國庫ニ對シ其ノ通算セラルヘキ在職年ニ應シ勅令ノ定ムル所ニ依リ恩給金額ノ分擔ヲ請求スルコトヲ得

前條第三號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族ニ恩給ヲ給

リ恩給ヲ給スル場合ニ於テハ國庫ハ通算セラルヘキ在職年ニ應シ勅令ノ定ムル所ニ依リ恩給金額ノ分擔ヲ第三號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者ニ恩給ヲ給スル者又ハ第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員ニ俸給ヲ給スル者ニ對シ請求スルコトヲ得

前條第三號、第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族ニ恩給ヲ給スヘキ國庫以外ノ者ハ其ノ恩給ノ基礎在職年中ニ第一號、第二號若ハ第四號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ在職年又ハ第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受クルモノノ在職年ヲ通算シテ恩給ヲ給スル場合ニ於テハ國庫ニ對シ其ノ通算セラルヘキ在職年ニ應シ勅令ノ定ムル所ニ依リ恩給金額ノ分擔ヲ請求スルコトヲ得

スヘキ者ハ其ノ恩給ノ基礎在職年中ニ他府縣又ハ之ニ準スヘキ經濟ノ管轄内ニ於テ在職シタル第三號ニ掲クル公務員又ハ之ニ準スヘキ者トシテノ在職年ヲ含ム場合ニ於テハ當該他府縣又ハ之ニ準スヘキ經濟ニ對シ其ノ合算セラルル在職年ニ應シ勅令ノ定ムル所ニ依リ恩給金額ノ分擔ヲ請求スルコトヲ得

本條第一項中ノ改正ハ、恩給ヲ國庫ニテ負擔スル警察監獄職員又ハ待遇職員ノ在職年ニ、恩給ヲ國庫外ノ者ガ負擔スル公務員(此ノ中ニハ地方費負擔ノ警察監獄職員及待遇職員ヲ含ム)ノ在職年ヲ通算

前條第三號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族ニ恩給ヲ給スヘキ者ハ其ノ恩給ノ基礎在職年中ニ他府縣又ハ之ニ準スヘキ經濟ノ管轄内ニ於テ在職シタル第三號ニ掲クル公務員又ハ之ニ準スヘキ者トシテノ在職年ヲ含ム場合ニ於テハ當該他府縣又ハ之ニ準スヘキ經濟ニ對シ其ノ合算セラルル在職年ニ應シ勅令ノ定ムル所ニ依リ恩給金額ノ分擔ヲ請求スルコトヲ得

前項ノ規定ハ前條第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族ノ恩給ノ分擔及同條第三號、第五號若ハ第六號ニ掲クル公務員若ハ之ニ準スヘキ者又ハ其ノ遺族ノ恩給相互ノ分擔ニ付之ヲ準用ス



シテ恩給ヲ給スル場合ニハ國庫ヨリ分擔ヲ請求シ得ル旨ヲ定ムルモノデアツテ、現行恩給法ノ初頭ヨリノ不備ヲ整理シタモノデアアル。

本條第四項中ノ改正ハ現行法ノ整理洩ヲ改メタル迄デアツテ本來「第五號若ハ第六號」トアルベキヲ現行法ガ誤ツテ「第四號若ハ第五號」トシタルヲ以テ之ヲ訂正シタモノデアアル。

尙法律ノ直接改正デハナイケレドモ、本條ノ委任勅令ノ改正ニ依ツテ實質的ニハ法律ヲ改正シタト同一ニナルモノガアル。其レハ本條ノ委任ヲ受ケテ分擔ヲ定メタ所ノ恩給法施行令第四條ノ改正デアアル。同條ニ於テハ從來分擔ヲセシムルモノヲ普通恩給ト扶助料トノ二種ノ恩給ニ限ツテオツタノヲ、改正規定デハ更ニ之ニ一時恩給ト一時扶助料トヲ加ヘタノデアアル(施令四一)。而シテ分擔標準ノ一ツデアアル所ノ俸給ハ、從來ハ各官職ノ最終俸給年額デアツタノヲ、改正令ハ、中間在職ニ付テハ在職最終ノ俸給年額ニ依リ、最後ノ在職ハ、即チ退職シテ恩給ヲ受クルニ至ツタトキノ在職ニ付テハ退職(又ハ死亡)前一年間ノ俸給ニ依ルモノトシタノデアアル。而シテ退職(又ハ死亡)前一年間ノ俸給ノ計算ニ付テハ恩給法第五十九條ノ二(從テ恩給法施行令第二十四條ノ九、第二十四條ノ十)ノ規定ヲ準用シテ算出スルコトトシタ(施令四一)。

又下士以下ノ軍人及準軍人ノ分擔標準トシテノ俸給ハ、從來假定的ニ恩給法施行令別表第一號表

ヲ以テ規定シテ居ツタノデアアルガ、今回之ヲ削除シ恩給法別表第一號ノ表ヲ以テ之ニ代フルコトトシタノデアアル。其ノ結果ハ從來ノモノト幾分ノ相違ヲ來シタノデアアルガ今回ノ改正ノ方ガ、合理的デアアル。

第十八條 國庫ヨリ恩給ヲ給スルモ俸

給ヲ給セサル公務員ニ俸給ヲ給スル者ハ其ノ俸給ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ但シ府縣費ヨリ俸給ヲ給スル文官、在外指定學校及國庫ノ支辨ニ屬スル地方費ヲ以テ維持スル公立學校ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

國庫以外ノ經濟ヨリ恩給ヲ給スルモ俸給ヲ給セサル公務員ニ俸給ヲ給スル者ハ其ノ俸給ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ其ノ經濟ニ納付スヘシ前項ノ經濟ニ對シテハ國庫ハ前項ニ規定スル納金額ノ二分ノ一ニ相當ス

第十八條第一項中「百分ノ一」ヲ「百分ノ二」ニ改メ「府縣費ヨリ俸給ヲ給

スル文官、」ノ下ニ「神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ職員タル文官、」ヲ加フ

第十八條 國庫ヨリ恩給ヲ給スルモ俸

給ヲ給セサル公務員ニ俸給ヲ給スル者ハ其ノ俸給ノ百分ノ二ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ但シ府縣費ヨリ俸給ヲ給スル文官、神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ職員タル文官、在外指定學校及國庫ノ支辨ニ屬スル地方費ヲ以テ維持スル公立學校ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

國庫以外ノ經濟ヨリ恩給ヲ給スルモ俸給ヲ給セサル公務員ニ俸給ヲ給スル者ハ其ノ俸給ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ其ノ經濟ニ納付スヘシ前項ノ經濟ニ對シテハ國庫ハ前項ニ



ル金額ヲ交付ス

規定スル納金額ノ二分ノ一ニ相當ス  
ル金額ヲ交付ス

本條ハ所謂「團體納金」ヲ定メタ規定デアルガ、國庫カラハ恩給ヲ、地方團體カラハ俸給ヲ給スル場合、例ヘバ各種中等教員ニ付テハ從來其ノ俸給ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スベキモノトシテ居ツタ。之レハ元來俸給恩給共ニ地方團體ヲシテ負擔セシムベキモノヲ恩給丈國庫デ負擔スルカラ、其ノ資源トシテ第五十九條ノ規定ニ依リ個人ノ納ムルト同額(俸給額ノ百分ノ一)ヲ國庫ニ納付セシムルモノトシテ居タノデアアル。然ルニ個人ニハ今回ノ改正法ニ依リ、百分ノ二ヲ納付セシムルコトト爲ツタカラ(第五十九條ノ改正規定)、地方團體ヨリモ之ト同額ノ百分ノ二ヲ納付スベシト爲シタノデアアル。尤モ個人ノ納金ハ改正法施行後(昭和九年四月一日以後)其ノ者ノ昇給又ハ増俸ノ時ヨリ百分ノ二ニ増加スルコトニ爲ツテオルカラ(改正法附則九)、之トノ關係上本條ノ改正規定ニ依ル團體納金ノ増額モ順次的ニ百分ノ二ニ増シテ行クコトトシ、其ノ増シテ行ク關係ヲ此ノ種ノ公務員ノ個人納金ノ増シテ行ク額ト同一ナラシメタノデアアル(改正法附則四)。即チ個人納金ニ付附則第九條ノ規定ノ適用ヲ濟マス迄ハ其レト同額ニ止メルコトトスルノデアアル。

而シテ、此ノ團體納金ヲ爲サナクテ良イ者ノ中ニ「神宮司廳」ト「神宮皇學館」トヲ加ヘタノハ、此等

官廳ノ職員ハ元來恩給法上ノ文官デモアリ(恩給法二〇、二)、其ノ俸給モ此等官廳ヨリ給與スルコト其レ自身ガ變則デアツテ、寧ロ國庫直接ニ給與スベキモノデアアルカラ、之ヨリハ國庫納金ヲ爲サシメナイノデアアル。

本條第二項ニ付變更ヲ加ヘナカツタコト換言スレバ其ノ納金率ヲ百分ノ二ニシナカツタノハ此ノ納金主體ガ主トシテ市町村デアツテ、市町村ノ負擔輕減ノ陳情サレテオル今日デアアルカラデアアル。又第三項ハ小學校教員ニ個人納金ナキコトヲ主ナル理由トシテ爲サルル國庫補助ノ規定デアリ、今回ノ改正法ニ依ツテ小學校教員ニモ個人納金ヲ認メ其ノ結果府縣ノ收入ハ増加スルカラ、本項ニ依ル國庫補助ハ之ヲ廢止スルコトニ理由アリトモ謂ヒ得ルガ、府縣ノ財政ヲ考慮シ特ニ之ヲ削ラズシテ存置シタモノデアアル。

## 第二章 公務員

### 第一節 通則

第十九條 本法ニ於テ公務員トハ文官、軍人、教育職員及警察監獄職員並  
第二十四條ニ掲クル待遇職員ヲ謂フ

## 第二章 公務員

### 第一節 通則

第十九條 本法ニ於テ公務員トハ文官、軍人、教育職員及警察監獄職員並  
第二十四條ニ掲クル待遇職員ヲ謂フ



本法ニ於テ公務員ニ準スヘキ者トハ  
準文官、準軍人及準教育職員ヲ謂フ

第二十條 文官トハ武官又ハ宮内官以  
外ノ官ニ在ル者ヲ謂フ但シ勅令ヲ以  
テ定ムルモノヲ除クノ外國庫ヨリ俸  
給ヲ給セサル官ニ在ル者ハ此ノ限ニ  
在ラス

準文官トハ高等文官ノ試補、判任官  
見習及國庫ヨリ俸給ヲ給セサル官ニ  
在ル者ニシテ前項但書ノ規定ニ基ク  
勅令ヲ以テ指定セラレサルモノヲ謂  
フ

第二十一條 軍人トハ左ニ掲クル者ヲ  
謂フ

- 一 陸軍又ハ海軍ノ現役、豫備役、後  
備役又ハ補充兵役ニ在ル者
  - 二 國民兵役ニ在ル者ニシテ召集セ  
ラレタルモノ及志願ニ依リ國民軍  
ニ編入セラレタル者
- 準軍人トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

本法ニ於テ公務員ニ準スヘキ者トハ  
準文官、準軍人及準教育職員ヲ謂フ

第二十條 文官トハ武官又ハ宮内官以  
外ノ官ニ在ル者ヲ謂フ但シ勅令ヲ以  
テ定ムルモノヲ除クノ外國庫ヨリ俸  
給ヲ給セサル官ニ在ル者ハ此ノ限ニ  
在ラス

準文官トハ高等文官ノ試補、判任官  
見習及國庫ヨリ俸給ヲ給セサル官ニ  
在ル者ニシテ前項但書ノ規定ニ基ク  
勅令ヲ以テ指定セラレサルモノヲ謂  
フ

第二十一條 軍人トハ左ニ掲クル者ヲ  
謂フ

- 一 陸軍又ハ海軍ノ現役、豫備役、後  
備役又ハ補充兵役ニ在ル者
  - 二 國民兵役ニ在ル者ニシテ召集セ  
ラレタルモノ及志願ニ依リ國民軍  
ニ編入セラレタル者
- 準軍人トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

- 一 陸軍ノ見習士官及海軍ノ候補生
- 二 勅令ヲ以テ指定スル陸軍又ハ海  
軍ノ學生生徒

第二十二條 教育職員トハ左ニ掲クル  
者ヲ謂フ

- 一 公立ノ學校若ハ圖書館又ハ在外  
指定學校ノ職員ニシテ國庫ヨリ俸  
給ヲ給セサル官ニ在ルモノ及判任  
官以上ノ待遇ヲ受クルモノ
- 二 府縣立師範學校長

前項ノ在外指定學校トハ在外國本邦  
人ノ爲ニ設置シタル學校ニシテ勅令  
ノ定ムル所ニ依リ政府ノ指定シタル  
モノヲ謂フ

準教育職員トハ官立又ハ公立ノ學校  
ノ職員ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモ  
ノヲ謂フ

第二十二條第一項中「學校若ハ」ヲ  
「學校、幼稚園若ハ」ニ、「府縣立」ヲ  
「道府縣立」ニ、同條第三項中「學校」  
ヲ「學校又ハ幼稚園」ニ改ム

- 一 陸軍ノ見習士官及海軍ノ候補生
- 二 勅令ヲ以テ指定スル陸軍又ハ海  
軍ノ學生生徒

第二十二條 教育職員トハ左ニ掲クル  
者ヲ謂フ

- 一 公立ノ學校、幼稚園若ハ圖書館  
又ハ在外指定學校ノ職員ニシテ國  
庫ヨリ俸給ヲ給セサル官ニ在ルモ  
ノ及判任官以上ノ待遇ヲ受クルモ  
ノ
- 二 道府縣立師範學校長

前項ノ在外指定學校トハ在外國本邦  
人ノ爲ニ設置シタル學校ニシテ勅令  
ノ定ムル所ニ依リ政府ノ指定シタル  
モノヲ謂フ

準教育職員トハ官立又ハ公立ノ學校  
又ハ幼稚園ノ職員ニシテ勅令ヲ以テ  
指定スルモノヲ謂フ

本條中第一項第一號及第三項ノ改正ハ幼稚園令ガ制定セラレテ學校、幼稚園ト併稱セラルルコトト



爲ツタ爲ニ此處デモ之ヲ區別シタノニ過ギナイ。幼稚園モ實質ニ於テハ學校デアツテ、特ニ幼稚園ナル文字ヲ加ヘザルトキハ「學校」ノ中ニ包含サレルモノト解セラルル所デアアル。

第一項第二號ノ改正ハ北海道等ノ道立師範學校ノ校長ヲ明文ヲ以テ府縣立師範學校長ト同一ニ取扱ハントシタモノデアアルガ、之レモ明文ナケレバ解釋上「府縣立師範學校長」ノ中ニ包含セシムルコトガ出來ナイ程ノモノデモナイ。要スルニ文字的整理デアアル。

第二十三條 警察監獄職員トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

- 一 警部補、巡查、陸軍警査、海軍警査、貴族院守衛及衆議院守衛
- 二 看守、女監取締、陸軍監獄看守及海軍監獄看守
- 三 判任官ノ待遇ヲ受クル消防手

第二十四條 待遇職員トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

- 一 判任官以上ノ待遇ヲ受クル神宮司廳職員、神宮神部署職員及官國幣社ノ神職
- 二 判任官以上ノ待遇ヲ受クル監獄

第二十四條第二號ヲ左ノ如ク改ム

- 一 判任官以上ノ待遇ヲ受クル監獄ノ職員(前條第二號ニ掲クル者ヲ除ク)、感化院職員及矯正院職員

第二十三條 警察監獄職員トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

- 一 警部補、巡查、陸軍警査、海軍警査、貴族院守衛及衆議院守衛
- 二 看守、女監取締、陸軍監獄看守及海軍監獄看守
- 三 判任官ノ待遇ヲ受クル消防手

第二十四條 待遇職員トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

- 一 判任官以上ノ待遇ヲ受クル神宮司廳職員、神宮神部署職員及官國幣社ノ神職
- 二 判任官以上ノ待遇ヲ受クル監獄

ノ保健技師、保健技手、教誨師、教師、作業技手、感化院職員及矯正院職員

三 地方待遇職員令ニ依リ判任官以上ノ待遇ヲ受クル者ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモノ

四 前三號ニ掲クル者ヲ除クノ外國庫ヨリ俸給又ハ給料ヲ給スル待遇職員ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモノ

本條ノ改正ハ現行法ガ待遇職員トシテ取扱ハルベキ監獄職員ヲ個別的ニ列舉シテオル結果、作業技師(高等官)ハ作業技手(判任官)中ニ含マシメルコトガ出來ヌコトト爲ツテ居ルノヲ、全ク理由ノナキ規定ノ仕方デアルトシテ抽象的文字ヲ以テ之ヲモ包含セシムル様ニシタノニ過ギナイ。

第二十五條 本法ニ於テ就職トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルコトヲ謂フ

- 一 文官ニ在リテハ任官但シ終身官タル文官ニ在リテハ任官ノ外復職
- 二 現役軍人ニ在リテハ任官又ハ入

ノ職員(前條第二號ニ掲クル者ヲ除ク)、感化院職員及矯正院職員

三 地方待遇職員令ニ依リ判任官以上ノ待遇ヲ受クル者ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモノ

四 前三號ニ掲クル者ヲ除クノ外國庫ヨリ俸給又ハ給料ヲ給スル待遇職員ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモノ

第二十五條 本法ニ於テ就職トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルコトヲ謂フ

- 一 文官ニ在リテハ任官但シ終身官タル文官ニ在リテハ任官ノ外復職
- 二 現役軍人ニ在リテハ任官又ハ入



營若ハ入團、非現役軍人ニ在リテハ召集ニ依ル部隊編入又ハ志願ニ依リ軍人タル勤務ニ就クコト

三 教育職員ニシテ官吏タルモノニ在リテハ任官、其ノ他ノモノニ在リテハ任命

四 警察監獄職員ニシテ官吏タルモノニ在リテハ任官、其ノ他ノモノニ在リテハ任命但シ巡查若ハ判任官ノ待遇ヲ受クル消防手警部補ニ任シ又ハ警部補巡查若ハ判任官ノ待遇ヲ受クル消防手ニ就職スルトキハ之ヲ轉任ト看做ス

五 待遇職員ニ在リテハ任命

第二十六條 本法ニ於テ退職トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルコトヲ謂フ

- 一 文官ニ在リテハ免官、退官又ハ失官但シ終身官タル文官ニ在リテハ免官、退官、失官ノ外退職
- 二 現役軍人ニ在リテハ現役ヲ離ル

第二十六條第二號ニ左ノ但書ヲ加フ  
但シ下士官准士官以上ノ軍人ト爲リタルトキハ普通恩給ニ付テノ最短恩給年限ノ計算ニ關シテハ之ヲ退職ト看做ス

營若ハ入團、非現役軍人ニ在リテハ召集ニ依ル部隊編入又ハ志願ニ依リ軍人タル勤務ニ就クコト

三 教育職員ニシテ官吏タルモノニ在リテハ任官、其ノ他ノモノニ在リテハ任命

四 警察監獄職員ニシテ官吏タルモノニ在リテハ任官、其ノ他ノモノニ在リテハ任命但シ巡查若ハ判任官ノ待遇ヲ受クル消防手警部補ニ任シ又ハ警部補巡查若ハ判任官ノ待遇ヲ受クル消防手ニ就職スルトキハ之ヲ轉任ト看做ス

五 待遇職員ニ在リテハ任命

第二十六條 本法ニ於テ退職トハ左ノ各號ノ一ニ該當スルコトヲ謂フ

- 一 文官ニ在リテハ免官、退官又ハ失官但シ終身官タル文官ニ在リテハ免官、退官、失官ノ外退職
- 二 現役軍人ニ在リテハ現役ヲ離ル

ルコト、非現役軍人ニ在リテハ召集セラレタル者ニ付テハ召集解除志願ニ依リ軍人タル勤務ニ服スル者ニ付テハ解職

三 教育職員ニシテ官吏タルモノニ在リテハ免官、退官又ハ失官、其ノ他ノモノニ在リテハ免職、退職、解職又ハ失職

四 警察監獄職員ニシテ官吏タルモノニ在リテハ免官、退官又ハ失官、其ノ他ノモノニ在リテハ免職、退職又ハ失職但シ警部補他ノ官職ニ轉シ又ハ他ノ官ヨリ警部補ニ轉シタルトキハ之ヲ退職ト看做ス

五 待遇職員ニ在リテハ免職、退職又ハ失職

ルコト、非現役軍人ニ在リテハ召集セラレタル者ニ付テハ召集解除志願ニ依リ軍人タル勤務ニ服スル者ニ付テハ解職但シ下士官准士官以上ノ軍人ト爲リタルトキハ普通恩給ニ付テノ最短期間ノ計算ニ關シテハ之ヲ退職ト看做ス

三 教育職員ニシテ官吏タルモノニ在リテハ免官、退官又ハ失官、其ノ他ノモノニ在リテハ免職、退職、解職又ハ失職

四 警察監獄職員ニシテ官吏タルモノニ在リテハ免官、退官又ハ失官、其ノ他ノモノニ在リテハ免職、退職又ハ失職但シ警部補他ノ官職ニ轉シ又ハ他ノ官ヨリ警部補ニ轉シタルトキハ之ヲ退職ト看做ス

五 待遇職員ニ在リテハ免職、退職又ハ失職



本條ハ如何ナル場合ニ退職カトイフコトニ付規定シテオトルノデアアルガ、其ノ第二號ニ定ムル軍人ノ退職事由トシテ更ニ一事項ヲ加ヘテ、下士官ガ准士官以上ノ軍人ニ任官シタトキハ普通恩給ノ爲ノ最短恩給年限ノ關係ニ於テハ退職シタト同様ニ見ルトシタノデアアル。之ヲ具體的ニ言ヘバ、下士官ガ在職年數十二年以上十三年未滿デ准士官又ハ士官ニ任命サレタ場合ハ下士官兵ノ最短恩給年限ハ十二年デアリ、准士官以上ノ其レハ十三年デアル關係上、下士官トシテハ普通恩給年限ニ達スルガ准士官以上トシテハ其ノ年限ニ達シナイトイフ場合ヲ生ズル。其レデ、此ノ場合ニハ准士官又ハ士官ニ任官ノ日ヲ以テ下士官ヲ退職シタモノトシ、假リニ下士官トシテノ十二年ノ普通恩給ノ權利ヲ生ゼシメル。然シ事實上退職ハシテ居ナイノデアアルカラ、准士官任官ノ時ニ確定的ニ普通恩給權ガ生ジタトイフ譯デハナイ。准士官又ハ士官トシテ退職スルトキニ瑕疵アル退職デ失格スル様ナ場合ニハ下士官トシテノ恩給權モ勿論發生シナイノデアアル。唯其ノ年數ノ不足ノ點丈ガ此ノ規定ニ依ツテ救ハレルコトト爲ル。年數ノ不足ガ救ハレルト言ツテモ、十二年ノ在職年デ准士官以上ノ普通恩給ヲ給ストイフノデハナク、下士官トシテノ普通恩給ヲ給ストイフ意味デアアル。又下士官トシテ十二年ニ達スルヤ否ヤハ下士官ヨリ准士官以上ニ任官シタ日ヲ標準トシテ定メルノデアアルカラ、其ノ日迄二十二年ニ達シナカツタ者ニハ普通恩給ヲ給シナイ。例ヘバ下士官ヨリ准士官ニ爲ル迄二十一年ヲ經過シ准士官トシテ一年

半在職シタトイフ様ナ者ハ如何トモスル由ノナイモノデアアル。

第二十七條 第二十五條第一號及前條

第一號ノ規定ハ準文官ノ就職及退職

ニ付之ヲ準用ス

第二十五條第三號及前條第三號ノ規

定ハ準教育職員ノ就職及退職ニ付之

ヲ準用ス

準軍人ノ就職トハ戰務、戒嚴地境內

ノ勤務又ハ外國ノ鎮戍ニ服スルコト

ヲ謂ヒ退職トハ其ノ勤務ヲ終ルコト

ヲ謂フ

第二十八條 公務員ノ在職年ハ就職ノ

月ヨリ之ヲ起算シ退職又ハ死亡ノ月

ヲ以テ終ル

退職シタル後再就職シタルトキハ前

後ノ在職年月數ハ之ヲ合算ス但シ一

時恩給ノ基礎ト爲ルヘキ在職年ニ付

テハ前ニ一時恩給ノ基礎ト爲リタル

在職年ノ年月數ハ之ヲ合算セス

第二十八條第二項但書ヲ左ノ如ク改

ム

但シ一時恩給又ハ第八十二條ニ規

定スル一時扶助料ノ基礎ト爲ルヘ

キ在職年ニ付テハ前ニ一時恩給ノ

基礎ト爲リタル在職年其ノ他ノ前

在職年ノ年月數ハ之ヲ合算セス

第二十七條 第二十五條第一號及前條

第一號ノ規定ハ準文官ノ就職及退職

ニ付之ヲ準用ス

第二十五條第三號及前條第三號ノ規

定ハ準教育職員ノ就職及退職ニ付之

ヲ準用ス

準軍人ノ就職トハ戰務、戒嚴地境內

ノ勤務又ハ外國ノ鎮戍ニ服スルコト

ヲ謂ヒ退職トハ其ノ勤務ヲ終ルコト

ヲ謂フ

第二十八條 公務員ノ在職年ハ就職ノ

月ヨリ之ヲ起算シ退職又ハ死亡ノ月

ヲ以テ終ル

退職シタル後再就職シタルトキハ前

後ノ在職年月數ハ之ヲ合算ス但シ一

時恩給又ハ第八十二條ニ規定スル一

時扶助料ノ基礎ト爲ルヘキ在職年ニ

付テハ前ニ一時恩給ノ基礎ト爲リタ



退職シタル月ニ於テ再就職シタルト  
キハ再在職ノ在職年ハ再就職ノ月ノ  
翌月ヨリ之ヲ起算ス

ル在職年其ノ他ノ前在職年ノ年月數  
ハ之ヲ合算セス  
退職シタル月ニ於テ再就職シタルト  
キハ再在職ノ在職年ハ再就職ノ月ノ  
翌月ヨリ之ヲ起算ス

現行法ニ依レバ一時恩給ノ基礎在職年ハ引續イター在職年ノミデアルノニ(引續カザルモノ  
デモ前ニ一時恩給ノ基礎ト爲ラナカツタモノハ之ヲ含マシムル)、之ニ對應スル公務員ノ死亡シタト  
キニ遺族ニ給スル一時扶助料ノ爲ノ基礎在職年ハ一時恩給ノ基礎ト爲ツタモノデアルト否トヲ論ゼズ  
凡テノ在職年ヲ合シタモノデアアル。併シ乍ラ一時恩給ト此ノ意味ノ一時扶助料トハ公務員ガ生キテ受  
ケルカ死シテ其ノ遺族ガ受ケルカノ區別以外ニハ全ク事情ノ異ルモノガナイノデアアルカラ、改正法ハ  
現行法制定當時ノ整理洩デアツタ此ノ點ヲ修正シ、兩者ノ基礎在職年ハ何レモ引續イタモノノミニ限  
リ間ヲ置イタ前ノ在職年ノ月ハ後ノ在職年ニ合算シナイコトニシタノデアアル。改正法ニ於テハ其レガ  
一時恩給ノ基礎ト爲ツタモノデモ、ナラナカツタモノデモ何レモ除算サレルコトニ爲ル。而シテ今回  
ノ改正ニ依ツテ其ノ基礎在職年數ハ三年以上(加算年ヲモ含ム)タルコトヲ要スルコトト爲ツタカラ、  
三年未滿ノ切レ切レノ在職年ハ絕對ニ一時恩給又ハ一時扶助料ノ基礎ト爲ル機會ハナイノデアアル。

此ノ規定ハ本年十月一日以後ニ退職又ハ死亡スル者ニ付テノミ適用サルルモノデアアル。

第二十九條 公務員ニ以上ノ官職ヲ併  
有スル場合ニ於テ其ノ重複スル在職  
年ニ付テハ年數計算ニ關シ利益ナル  
一官職ノ在職年ニ依ル

第二十九條 公務員ニ以上ノ官職ヲ併  
有スル場合ニ於テ其ノ重複スル在職  
年ニ付テハ年數計算ニ關シ利益ナル  
一官職ノ在職年ニ依ル

第三十條 軍人ノ恩給權ニ付其ノ在職  
年ヲ計算スル場合ニ於テハ十一年ニ  
達スル迄ハ軍人又ハ警察監獄職員以  
外ノ公務員トシテノ在職年ハ其ノ四  
分ノ三ニ當ル年月數ヲ以テ之ヲ計算  
ス

第三十條中「軍人ノ恩給權」ヲ「軍人  
又ハ警察監獄職員ノ恩給權」ニ、「十  
一年ニ達スル迄」ヲ「准士官以上ノ軍  
人ニ付テハ十三年ニ達スル迄、下士  
官以下ノ軍人及警察監獄職員ニ付テ  
ハ十二年ニ達スル迄」ニ、「四分ノ三」  
ヲ「十分ノ七」ニ改ム

第三十條 軍人又ハ警察監獄職員ノ恩  
給權ニ付其ノ在職年ヲ計算スル場合  
ニ於テハ准士官以上ノ軍人ニ付テハ  
十三年ニ達スル迄、下士官以下ノ軍  
人及警察監獄職員ニ付テハ十二年ニ  
達スル迄ハ軍人又ハ警察監獄職員以  
外ノ公務員トシテノ在職年ハ其ノ十  
分ノ七ニ當ル年月數ヲ以テ之ヲ計算  
ス

公務員ハ其ノ種類ニ依ツテ普通恩給ノ爲ノ最短在職年限ガ異ツテ居リ、改正法ニ依レバ文官、待遇職  
員、教育職員ノ年限ハ十七年、准士官以上ノ軍人ハ十三年、下士官以下ノ軍人ト警察監獄職員トハ十二  
年デアアル。其ノ年限ニ達シタ後ノ一年ハ同價值デアツテ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一(下士官兵  
ニ多少ノ相違ハアルガ)ニ當ル金額ヲ以テ表ハサレテオル。其ノ最短年限ニ達スル迄ノ價值ハ各年限



ニ逆比スル筈デアル。從テ異種ノ在職年ヲ通算スル場合ニ其ノ最短年限ニ達スル迄ハ右逆比ニ依ツテ換算シテ通算スルノヲ正確トスルガ、計算上ノ便宜カラシテ現行法ハ軍人ト警察監獄職員トヲ同價値ト見其レニ他ノ者ノ在職年ヲ通算スル場合ニハ、通算サレル在職年ヲ四分ノ三ニ計算シテ通算ヲ爲スコトニシテオル。之レモ正確ニスレバ十五分ノ十一ニスベキデアアルガ近似數ヲ採ツテ計算ヲ便ニシタノデアアル。改正法ニ於テハ此ノ分數タル四分ノ三ヲ十分ノ七トシタ。尙改正法ハ現行法第三十一條ノ規定ノ内容ヲモ合セ規定シタノデ、字句ハ複雑ニナツタケレドモ内容ハ現行法ト餘リニ變化ハナイ。此ノ改正規定ハ本年十月一日以後退職スル者ノ在職年(再任改定ノ場合ヲモ含ム)ニ付凡テ之ヲ適用スル。

第三十一條 警察監獄職員ノ恩給權ニ

第三十一條 削除

付其ノ在職年ヲ計算スル場合ニ於テハ十年ニ達スル迄ハ警察監獄職員又ハ軍人以外ノ公務員トシテノ在職年ハ其ノ三分ノ二ニ當ル年月數ヲ以テ之ヲ計算ス

本條ハ其ノ内容ガ前條ニ併セ規定セラレタカラ之ヲ削除シタノデアアル。唯内容トシテ異ルノハ「三

分ノ二」トアルヲ「十分ノ七」トシタ點ニ在ル。

第三十二條 公務員其ノ職務ヲ以テ從軍シタルトキハ左記各號ノ規定ニ依リ加算ス

- 一 戰地ニ在リテ職務ニ服シタルトキハ從軍期間ノ一月ニ付三月
  - 二 戰地外ニ在リテ職務ニ服シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付一月半
- 前項ノ規定ハ公務員其ノ職務ヲ以テ戰爭ニ準スヘキ事變ニ際シ職務ニ服シタル場合ニ付之ヲ準用ス
- 戰爭ノ期間及地域、職務ノ範圍竝戰爭ニ準スヘキ事變ハ勅裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條 公務員外國ノ交戦又ハ擾亂ノ地域内ニ於テ危險ヲ顧ミス其ノ職務ヲ以テ勤務シタルトキハ在勤期間ノ一月ニ付二月ヲ加算ス

前項ノ外國ノ交戦又ハ擾亂ノ地域及期間ハ勅裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十二條 公務員其ノ職務ヲ以テ從軍シタルトキハ左記各號ノ規定ニ依リ加算ス

- 一 戰地ニ在リテ職務ニ服シタルトキハ從軍期間ノ一月ニ付三月
  - 二 戰地外ニ在リテ職務ニ服シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付一月半
- 前項ノ規定ハ公務員其ノ職務ヲ以テ戰爭ニ準スヘキ事變ニ際シ職務ニ服シタル場合ニ付之ヲ準用ス
- 戰爭ノ期間及地域、職務ノ範圍竝戰爭ニ準スヘキ事變ハ勅裁ヲ以テ之ヲ定ム

第三十三條 公務員外國ノ交戦又ハ擾亂ノ地域内ニ於テ危險ヲ顧ミス其ノ職務ヲ以テ勤務シタルトキハ在勤期間ノ一月ニ付二月ヲ加算ス

前項ノ外國ノ交戦又ハ擾亂ノ地域及期間ハ勅裁ヲ以テ之ヲ定ム



第三十四條 公務員戒嚴地境內ニ於テ危険ヲ顧ミス其ノ職務ヲ以テ勤務シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付二月ヲ加算ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ勤務ノ場所カ内國ナルトキハ加算年ハ其ノ二分ノ一トス

第三十五條 公務員外國鎮戍ニ服シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付一月半ヲ加算ス

第三十六條 航空機乗員タル公務員其ノ職務ヲ以テ航空勤務ニ服シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付二月以内ヲ加算ス

第三十七條 潜水艦乗員タル公務員其ノ職務ヲ以テ在役潜水艦ノ勤務ニ服シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付一月ヲ加算ス

第三十八條 公務員其ノ職務ヲ以テ邊陲又ハ不健康ノ地域ニ引續キ一年以

第三十四條 公務員戒嚴地境內ニ於テ危険ヲ顧ミス其ノ職務ヲ以テ勤務シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付二月ヲ加算ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ勤務ノ場所カ内國ナルトキハ加算年ハ其ノ二分ノ一トス

第三十五條 公務員外國鎮戍ニ服シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付一月半ヲ加算ス

第三十六條 航空機乗員タル公務員其ノ職務ヲ以テ航空勤務ニ服シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付二月以内ヲ加算ス

第三十七條 潜水艦乗員タル公務員其ノ職務ヲ以テ在役潜水艦ノ勤務ニ服シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付一月ヲ加算ス

第三十八條 公務員其ノ職務ヲ以テ邊陲又ハ不健康ノ地域ニ引續キ一年以

上在勤シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付一月以内ヲ加算ス不健康ナル業務ニ引續キ一年以上服務シタルトキ亦同シ

前項ノ地域相互間ノ轉勤ハ之ヲ引續キタル在勤ト看做ス

第一項ノ地域及業務ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十九條 海上勤務ニ服スル公務員其ノ職務ヲ以テ遠洋航海ヲ爲シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付半月ヲ加算ス

第三十九條第一項中「半月」ヲ「三分ノ一月」ニ改メ同項ノ末尾ニ左ノ如ク加フ  
一年以上引續キ編隊艦船ニ乗シテ上陸制限ノ下ニ準戰訓練ニ服シタルトキ亦同シ

上在勤シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付一月以内ヲ加算ス不健康ナル業務ニ引續キ一年以上服務シタルトキ亦同シ

前項ノ地域相互間ノ轉勤ハ之ヲ引續キタル在勤ト看做ス

第一項ノ地域及業務ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十九條 海上勤務ニ服スル公務員其ノ職務ヲ以テ遠洋航海ヲ爲シタルトキハ其ノ期間ノ一月ニ付三分ノ一月ヲ加算ス一年以上引續キ編隊艦船ニ乗シテ上陸制限ノ下ニ準戰訓練ニ服シタルトキ亦同シ

前項ノ遠洋航海ノ範圍ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

本條ノ改正ハ航海加算ノ率ガ在職期間一月ニ付半月ナルヲ一月ニ付三分ノ一月ニ減ジタルコトト、新ニ艦隊加算ナルモノヲ創設シタコトトニ在ル。航海加算ノ率ノ減少ハ遠洋航海ニヨル苦痛ガ艦船、航法、安全設備等ノ發達ニヨリテ著シク輕減サレタルコトヲ理由トスルモノデアリ、艦隊加算ノ創設



ハ軍縮會議以來爲サルルニ至ツタ海軍ノ猛訓練ヲ目標トスルモノデアツテ一年以上引續キ編隊ノ艦船ニ乗組ミ且一年以上陸制限下ニ準戰的ノ訓練ニ服シタル場合ニ其ノ在職一月(曆月單位)ニ付三分ノ一月ヲ加算スルノデアアル。加算ノ基礎ト爲ル在職ノ月ハ本年十月ヨリ始マル。其ノ前ノ同様ノ勤務ニ對シテハ此ノ加算年ハ附セラレナイ。

第四十條 第三十二條乃至前條ノ規定ニ依リ附スヘキ加算年ハ在職年ノ計算ニ付勅令ノ定ムル所ニ依リ實在職年ニ從トシテ之ヲ算入ス  
加算年ヲ附スヘキ基礎在職年ハ加算事由ノ生シタル月ヨリ之ヲ起算シ其ノ事由ノ止ミタル月ヲ以テ終ル  
二種以上ノ加算年ヲ附セラルヘキ期間ニ對シテハ最モ利益ナルモノニ依リ其ノ一ヲ附ス

第四十條ノ二 休職、待命、歸休、停職其ノ他現實ニ職務ヲ執ルヲ要セサル在職期間ニシテ一月以上ニ互ルモノハ勅令ノ定ムル所ニ依リ在

第四十條 第三十二條乃至前條ノ規定ニ依リ附スヘキ加算年ハ在職年ノ計算ニ付勅令ノ定ムル所ニ依リ實在職年ニ從トシテ之ヲ算入ス  
加算年ヲ附スヘキ基礎在職年ハ加算事由ノ生シタル月ヨリ之ヲ起算シ其ノ事由ノ止ミタル月ヲ以テ終ル  
二種以上ノ加算年ヲ附セラルヘキ期間ニ對シテハ最モ利益ナルモノニ依リ其ノ一ヲ附ス  
第四十條ノ二 休職、待命、歸休、停職其ノ他現實ニ職務ヲ執ルヲ要セサル在職期間ニシテ一月以上ニ互ルモノハ勅令ノ定ムル所ニ依リ在職年ノ計

職年ノ計算ニ於テ之ヲ半減ス

算ニ於テ之ヲ半減ス

本條ノ追加ハ休職、待命、歸休、停職等ノ期間ヲ在職年數計算ニ於テ半減スル爲ノモノデアアル。法文ノ「職務ヲ執ルヲ要セサル」トイフノハ法令上職務ヲ執ルヲ要セザル場合ヲ指シ、所屬長官ガ特ニ免除シタ様ノ場合ヲ包含シナイ。期間ガ一月以上ニ互ルトハ、其ノ期間ガ在職年ノ計算ニ於テ本來一月以上ニ計算セラルベキ凡テノ場合ヲ謂フノデアアル(九ノ二)。從テ實際ニ於テ三十日以上ニ互ラナイ場合デモ效果ニ於テ一月ノ價值ヲ持ツトキハ一月ト謂ツテ宜シイノデアアル。但シ其ノ曆月中ニ職務ヲ執ルヲ要シタル日ガ一日デモアツタトキハ其ノ月ハ半減計算ノ期間ニハ入レナイ(九ノ二)。例示スレバ或月ノ中途カラ休職ヲ命ゼラレタトスルト、其ノ月ハ在職期間ヲ一月ト計算シ休職部分ニ付テモ半減ハシナイ。其ノ翌月以後全然休職デ通シテオルトスルト其レ等ノ月ハ全部半減計算ニスル。爾シテ或月ノ初デ辭職シタトスルト其ノ月モ半減計算デ在職期間ハ半月ト計算スル。又休職中或月ノ末頃ニ復職シタトスルト其ノ月ハ半減シテ計算シナイ。茲ニ注意スベキハ休職中ノ或月ノ中途デ退職シ其ノ月内ニ更ニ他ニ就職シタ場合ニハ其ノ月ハ半減サレタ儘デアツテ、施行令第十九條ノ二ノ但書ノ規定ニ依ツテ一月ニ計算サレルコトトハナラナイ。其レハ斯ル場合ニハ在職關係ハ一旦切レテ再在職ノ在職年ハ翌月カラ起算サレルコトニ爲ツテオラカラデアアル(二八〇)。



第四十一條 左ニ掲クル年月數ハ在職年ヨリ之ヲ除算ス

第四十一條第三號中「六年未滿」ヲ「二年以下」ニ改ム

第四十一條 左ニ掲クル年月數ハ在職年ヨリ之ヲ除算ス

一 普通恩給又ハ増加恩給ヲ受クルノ權利消滅シタル場合ニ於テ其ノ恩給權ノ基礎ト爲リタル在職年

同條中第四號ヲ第五號、第五號ヲ第六號トシ第三號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

一 普通恩給又ハ増加恩給ヲ受クルノ權利消滅シタル場合ニ於テ其ノ恩給權ノ基礎ト爲リタル在職年

二 第五十一條ノ規定ニ依リ公務員カ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ヒタル在職年

四 公務員退職後在職中ノ職務ニ關スル犯罪(過失犯ヲ除ク)ニ付陸軍刑法若ハ海軍刑法ニ依リ死刑、懲役刑若ハ一年以上ノ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ其ノ他ノ法令ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキハ其ノ犯罪ノ時ヲ含ム引續キタル在職年月數

二 第五十一條ノ規定ニ依リ公務員カ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ヒタル在職年

三 在職中六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル場合ニ於テハ其ノ月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄ノ在職年月數但シ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス其ノ言渡ヲ取消サレタルトキハ取消ノ月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄ノ在職年月數

三 在職中二年以下ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル場合ニ於テハ其ノ月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄ノ在職年月數但シ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス其ノ言渡ヲ取消サレタルトキハ取消ノ月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄ノ在職年月數

三 在職中二年以下ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル場合ニ於テハ其ノ月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄ノ在職年月數

四 公務員ノ不法ニ其ノ職務ヲ離レタル月ヨリ職務ニ復シタル月迄ノ在職年月數

四 公務員退職後在職中ノ職務ニ關スル犯罪(過失犯ヲ除ク)ニ付陸軍刑法若ハ海軍刑法ニ依リ死刑、懲役刑若ハ一年以上ノ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ其ノ他ノ法令ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキハ

四 公務員退職後在職中ノ職務ニ關スル犯罪(過失犯ヲ除ク)ニ付陸軍刑法若ハ海軍刑法ニ依リ死刑、懲役刑若ハ一年以上ノ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ其ノ他ノ法令ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキハ

五 宮内職員トシテノ在職年月數ニシテ宮内官ノ恩給規程ニ依リ除算セラルヘキモノ

五 宮内職員トシテノ在職年月數ニシテ宮内官ノ恩給規程ニ依リ除算セラルヘキモノ

五 公務員ノ不法ニ其ノ職務ヲ離レタル月ヨリ職務ニ復シタル月迄ノ在職年月數

本條中第三號ノ改正ハ失權規定タル第九條ニ對應シタモノデアルガ、之レハ解釋上當分ノ間六年未滿ト規定シアルト同様ノ結果ヲ生ズル。此ノ際必シモ改正ヲ要シナカツタ所デアアル。

本條ニ新第四號ヲ加ヘタノモ亦、失權失格ノ規定ノ改正ニ對應シテデアアル。在職中ノ職務ニ關スル犯罪ニ依ツテ一定ノ刑ニ處セラレタルトキハ、其ノ時期ガ在職中デアアルナラバ犯罪時ヲ含ム所ノ在職ニ付失格ヲ來シ(五)、其ノ在職年月數ハ本條第二號ヲ除算サレル。又其ノ時期ガ退職後デアアル場合ニ於テハ更ニ二ツノ場合ヲ生ズル。退職ニ因ツテ普通恩給權ノ發生シタトキト之ヲ生ジナカツタトキトデアアル。普通恩給權ヲ生ジタトキニハ(再任改定ノ場合ヲ含ム)其ノ在職年ハ本條第一號ヲ除算サレルシ、又之ヲ生ジナカツタ場合ハ他ニ特別ノ除算規定ガナクテ此ノ新第四號ノ規定ニ依ツテ除算セラルベキモノデアアル。

其ノ犯罪ノ時ヲ含ム引續キタル在職年月數

第四十二條 左ニ掲クル年月數ハ之ヲ在職年ニ通算ス

第四十二條第二項ヲ左ノ如ク改ム

第四十二條 左ニ掲クル年月數ハ之ヲ在職年ニ通算ス

一 宮内官ノ恩給規程ニ依リ宮内官

第二十八條、第二十九條及第三十條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依リ在職

一 宮内官ノ恩給規程ニ依リ宮内官



恩給權ノ基礎ト爲ルヘキ宮内職員トシテノ在職年月數

二 準軍人ノ在職年月數  
三 高等文官ノ試補又ハ判任官見習引續キ公務員ト爲リタルトキハ公務員トシテノ就職ニ接續スル其ノ勤続年月數ノ二分ノ一ニ相當スル年月數

四 準教育職員引續キ教育職員ト爲リタルトキハ教育職員トシテノ就職ニ接續スル其ノ勤続年月數ノ二分ノ一ニ相當スル年月數

第二十八條、第二十九條及第三十一條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ、第三十條ノ規定ハ前項第一號第三號又ハ第四號ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス

分ノ一ニ相當スル年月數  
第二十八條、第二十九條及第三十一條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ、第三十條ノ規定ハ前項第一號第三號又ハ第四號ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス

年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス此ノ場合ニ於テハ準軍人又ハ皇宮警手トシテノ在職年ハ夫々之ヲ軍人又ハ警察監獄職員トシテノ在職年ト看做ス

恩給權ノ基礎ト爲ルヘキ宮内職員トシテノ在職年月數

二 準軍人ノ在職年月數  
三 高等文官ノ試補又ハ判任官見習引續キ公務員ト爲リタルトキハ公務員トシテノ就職ニ接續スル其ノ勤続年月數ノ二分ノ一ニ相當スル年月數

四 準教育職員引續キ教育職員ト爲リタルトキハ教育職員トシテノ就職ニ接續スル其ノ勤続年月數ノ二分ノ一ニ相當スル年月數

第二十八條、第二十九條及第三十條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス此ノ場合ニ於テハ準軍人又ハ皇宮警手トシテノ在職年ハ夫々之ヲ軍人又ハ警察監獄職員トシテノ在職年ト看做ス

分ノ一ニ相當スル年月數  
第二十八條、第二十九條及第三十條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ、第三十條ノ規定ハ前項第一號第三號又ハ第四號ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス

本條ハ恩給法上ノ公務員デナイ者ノ在職年ヲ公務員ノ在職年中ニ通算スルコトヲ定メタ規定デアアルガ、本條第二項ヲ改正シタ實質上ノ目的ハ通算ニ當リ皇宮警手ノ在職年ヲ警察監獄職員ノ在職年ト同價値ニ見タトイフ所ニ存スル。第二項ニ但書ヲ附シタノハ之ガ爲デアアル。但書中ニ準軍人ヲ加ヘタノ

ハ實際問題トシテハ餘リ必要ハナイガ、準軍人ノ在職年ヲ通算スル場合ニハ軍人ノ在職年ト同視スルコトトスルヲ理論上相當トスルカラデアアル。此ノ他ノ點ハ單ナル法文整理デアツテ、「第三十一條」ヲ「第三十條」ニ更ヘタノハ第三十一條ガ削除サレ其ノ内容ガ第三十條中ニ規定セラレタカラデアアル。

第四十三條 第三十二條乃至第四十條ノ規定ハ準軍人ノ在職年ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第四十一條ノ規定ハ前條第一項第二號乃至第四號ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月ニ付之ヲ準用ス

第四十三條第二項中「第四十一條」ヲ「第四十條ノ二及第四十一條」ニ、「前條第一項第二號乃至第四號」ヲ「前條第一項」ニ改ム

第四十三條 第三十二條乃至第四十條ノ規定ハ準軍人ノ在職年ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第四十條ノ二及第四十一條ノ規定ハ前條第一項ノ規定ニ依リ在職年ニ通算セラルヘキ年月ニ付之ヲ準用ス

本條ノ改正中「第四十一條」ヲ「第四十條ノ二及第四十一條」ニ改メタノハ第四十條ノ二ナル休職期間半減ノ規定ガ新設セラレタカラ、公務員ニアラザル者ノ在職年ヲ公務員ノ在職年ニ通算スル場合ニモ之ヲ準用シテ半減スルノヲ相當トスル爲デアアル。又「前條第一項第二號乃至第四號」ヲ「前條第一項」ニ改メテ「第一號」ヲ新ニ加ヘルコトトシタノハ宮内官ノ恩給規程ガ恩給法ト全然同様ニ改正サレルカ否カ例ヘバ休職期間半減等ニ付テ同一歩調ガ採ラレルカ否カ、採ラレルトシテモ其ノ施行ノ時期ガ本



改正法ノ施行時期ト一致スルカ否カガ不明デアルカラ、念ノ爲ニ準用規定中ニ加ヘタノデアアル。之レハ詳細ノ協議ヲ遂グルノ暇ナシニ本改正法律案ヲ議會ニ提出セザルヲ得ナカツタカラデアツテ、宮内官恩給規程ニ於テ本法ト同様ノ改正ガ施サレルコトト爲レバ此ノ改正ハ實質上必要ハナクナル譯デア

第四十四條 本法ニ於テ俸給トハ本俸及之ニ準スヘキモノヲ謂フ  
本俸ニ準スヘキモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公務員ニ以上ノ官職ヲ併有シ各官職ニ付俸給ヲ給セラルル場合ニ於テハ俸給額ヲ合算シタルモノヲ以テ其ノ者ノ俸給額トス

第四十五條 公務員所定ノ年數在職シ退職シタルトキハ之ニ普通恩給又ハ一時恩給ヲ給ス

第四十六條 公務員公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具癡疾ト爲リ失格原因ナクシテ退職シタルトキハ之

第四十四條 本法ニ於テ俸給トハ本俸及之ニ準スヘキモノヲ謂フ  
本俸ニ準スヘキモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公務員ニ以上ノ官職ヲ併有シ各官職ニ付俸給ヲ給セラルル場合ニ於テハ俸給額ヲ合算シタルモノヲ以テ其ノ者ノ俸給額トス

第四十五條 公務員所定ノ年數在職シ退職シタルトキハ之ニ普通恩給又ハ一時恩給ヲ給ス

第四十六條 公務員公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具癡疾ト爲リ失格原因ナクシテ退職シタルトキハ之

第四十六條第三項ヲ左ノ如ク改ム  
前項ノ期間ヲ經過シタルトキト雖  
裁定官廳ニ於テ恩給審査會ノ議ニ

ニ普通恩給及增加恩給ヲ給ス  
公務員公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ失格原因ナクシテ退職シタル後五年内ニ之カ爲不具癡疾ト爲リ又ハ其ノ程度増進シタル場合ニ於テ其ノ期間内ニ請求シタルトキハ新ニ普通恩給及增加恩給ヲ給シ又ハ現ニ受クル增加恩給ヲ不具癡疾ノ程度ニ相應スル增加恩給ニ改定ス

前項ノ期間ヲ經過シタルトキト雖恩給審査會ニ於テ不具癡疾カ公務ニ起因シタルコト顯著ナリト議決シタルトキハ決議後之ニ相當ノ恩給ヲ給シ又ハ改定ス  
公務員公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具癡疾ト爲ルモ公務員ニ重大ナル過失アリタルトキハ前三項ニ規定スル恩給ヲ給セス

付スルヲ相當ト認メ且恩給審査會ニ於テ不具癡疾カ公務ニ起因シタルコト顯著ナリト議決シタルトキハ議決シタル月ノ翌月ヨリ之ニ相當ノ恩給ヲ給シ又ハ之ヲ改定ス

ニ普通恩給及增加恩給ヲ給ス  
公務員公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ失格原因ナクシテ退職シタル後五年内ニ之カ爲不具癡疾ト爲リ又ハ其ノ程度増進シタル場合ニ於テ其ノ期間内ニ請求シタルトキハ新ニ普通恩給及增加恩給ヲ給シ又ハ現ニ受クル增加恩給ヲ不具癡疾ノ程度ニ相應スル增加恩給ニ改定ス  
前項ノ期間ヲ經過シタルトキト雖裁定官廳ニ於テ恩給審査會ノ議ニ付スルヲ相當ト認メ且恩給審査會ニ於テ不具癡疾カ公務ニ起因シタルコト顯著ナリト議決シタルトキハ議決シタル月ノ翌月ヨリ之ニ相當ノ恩給ヲ給シ又ハ之ヲ改定ス  
公務員公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具癡疾ト爲ルモ公務員ニ重大ナル過失アリタルトキハ前三項ニ規定スル恩給ヲ給セス



本條ノ改正ハ全然實質上ノ改正ヲ含マナイ。現行法ノ文字ガ疑問ヲ生ゼシムル恐アルコトヲ認めテ文字ヲ改メタノニ過ギナイ。請求期間經過後ノ請求ニ對シテハ、裁定官廳ハ其レ丈ノ理由デ直チニ之ヲ却下スルコトヲ得ルノデアルガ、場合ニ依ツテハ不具癡疾ガ公務ニ起因シタコトノ證據ガ長時期經過ノ後ニ於テモ歴然タルコトガアル。其ノ場合ニハ裁定官廳ノ獨斷デハ給與スルヲ許サヌガ、恩給審査會モ亦其ノ顯著ナルコトヲ認めタトキニハ給與ヲ爲シ得ルトイフコトガ本條ノ趣旨デアアル。然ルニ裁定官廳ハ凡テノ場合ニ請求ヲ恩給審査會ニ付議スベキモノデアルトノ解釋ヲ下ス者ガ生ジタノデ立法ニ依リ然ラザル所以ヲ明ニシタモノデアアル。又此ノ例外の場合ノ給與ハ議決シタ時ノ以後ノ分ヲ將來ニ向ツテ給スルモノデアアルガ、現行法ハ此ノ點ニ付テモ疑義ヲ生ゼシムル恐ガアツテ、議決シタ後ニ給與手續ハ開始スルガ給與分其ノモノハ初ニ溯リ其ノ溜ツテ居ル分ヲ一時ニ支給スルノデアルト解スル者ガ無キヲ保セナイカラ、然ラザルコトヲ文字的ニ明ニシ、議決ノ翌月分ヨリ給與ヲ始メルモノナルコトニ規定ノ文字ヲ改メタノデアアル。

第四十六條ノ二 公務員公務ノ爲永績性ヲ有スル傷疾ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具癡疾ノ程度ニ至ラサルモ勅令ノ定ムル程度ニ達シ失格原因ナクシ

第四十六條ノ二 公務員公務ノ爲永績性ヲ有スル傷疾ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具癡疾ノ程度ニ至ラサルモ勅令ノ定ムル程度ニ達シ失格原因ナクシ

テ之カ爲其ノ職ニ堪ヘスシテ一年内ニ退職シタルトキ又ハ其ノ公務員カ下士官以下ノ軍人ニシテ退職後一年内ニ之カ爲一種以上ノ兵役ヲ免セラレタルトキハ之ニ傷病年金ヲ給ス  
前條第二項及第三項ノ規定ハ前項ニ規定スル條件(傷病ノ程度ヲ除ク)ヲ具備スル者ニシテ退職當時ノ傷病ノ程度カ前項ノ勅令ニ定ムル程度ニ達セサリシモノノ傷病年金ニ付之ヲ準用ス  
前條第四項ノ規定ハ前二項ノ規定ニ依リ給スヘキ傷病年金ニ付之ヲ準用ス  
傷病年金ハ之ヲ普通恩給又ハ一時恩給ト併給スルヲ妨ケス

テ之カ爲其ノ職ニ堪ヘスシテ一年内ニ退職シタルトキ又ハ其ノ公務員カ下士官以下ノ軍人ニシテ退職後一年内ニ之カ爲一種以上ノ兵役ヲ免セラレタルトキハ之ニ傷病年金ヲ給ス  
前條第二項及第三項ノ規定ハ前項ニ規定スル條件(傷病ノ程度ヲ除ク)ヲ具備スル者ニシテ退職當時ノ傷病ノ程度カ前項ノ勅令ニ定ムル程度ニ達セサリシモノノ傷病年金ニ付之ヲ準用ス  
前條第四項ノ規定ハ前二項ノ規定ニ依リ給スヘキ傷病年金ニ付之ヲ準用ス  
傷病年金ハ之ヲ普通恩給又ハ一時恩給ト併給スルヲ妨ケス

本條ハ全然新規定デアツテ所謂「傷病年金」ヲ定メタモノデアアル。公務ノ爲ニ永績性ノ傷病ト爲ツタガ其ノ程度ガ恩給法ノ定ムル不具癡疾即チ「カタワ」ノ程度ニ達シナイ者ニ、新ニ年金タル恩給ヲ給與



シヨウトイフノデアル。如何ナル程度ヲ以テ不具癱疾ニ達シタル程度ト認ムベキカ、其ノ著シイモノヲ對比スレバ判別ハ明瞭デアル、例へバ兩眼全ク盲スルニ至ツタ者ノ如キヲ不具トイフニ何人モ躊躇セスト共ニ、微熱ヲ時々發スルトイツタ程度ノ者ヲ癱疾ト言フベカラザルコトモ何人モ異論ナキ所デアル。其ノ中間ニ於テ兩者區別ノ劃線ヲ引クコトト爲レバ勢ヒ其ノ區別ハ人工的ナラザルヲ得ナイ。現行法ハ一足總趾又ハ一手ノ拇指示指ヲ喪失シタ程度ヲ以テ其ノ境界トシテ居ル。傷病ノ程度ガ此ノ程度ニ達シナイモノニ付テハ一般公務員ニハ何等ノ恩給ヲ給與シナイコトニシテ居リ、唯下士官以下ノ軍人ノミニ付テ、公務傷病ヲ理由トシテ一種以上ノ兵役ヲ免セラレタトキニ一時金タル傷病賜金ヲ給スルコトニシテアル。之レハ下士官以下ノ軍人ハ身體的勞作ガ特殊デアツテ比較的的低度ノ障礙デモ勤務不能ト爲ルカラデアツタ。シカシ乍ラ、恩給ハ結果ヲ理由トシテ給與スルモノデアルカラ傷病ノ結果ガ同程度デアアル限りハ之ヲ下士官以下ノ軍人ノミニ限リ給與スベキ理由ハナイ。且、不具癱疾程度ニ達シナイモノデモ其ノ程度ノ比較的高イモノニハ年金ヲ給與スル實質上ノ理由モ存スルノデ、改正法ニ於テハ其ノ種ノ傷病ノ中デ勅令ノ定ムル程度以上ノ(勅令ハ追テ制定セラルルノデアアルガ現行法第四款症程度ヲ以テ此ノ程度トスル)永續性ヲ有スルモノニ對シテハ傷病年金ト稱シテ改正法ニ依ル別表第三號表ノ金額ヲ給與スルコトニシタノデアアル。同表ノ金額ニ付テハ第六十五條ノ二ヲ説明スル

所ニ讓ル。此ノ勅令ノ定ムル程度(第四款症)ニ達セザル公務傷病ニ對シテハ現行法ノ儘ニ下士官以下ノ軍人ノミニ對シテ一時金タル傷病賜金ヲ給スルニ止マル(六六一、第四號表)。

此ノ傷病年金ハ公務傷病ガ永續性ヲ有スルコトト、其ノ程度ガ第四款以上ニ達シタコトヲ以テ十分トセズニ、更ニ公務員ガ其ノ傷病ノ爲ニ職ニ堪ヘズニ退職シタルカ又下士官以下ノ軍人ナラバ退職後一年内ニ其ノ傷病ノ爲ニ一種以上ノ兵役ヲ免セラレタルコトヲモ必要トスル。

尤モ一般ノ公務員ニ付テ云ヘバ退職ノ當時ニハ傷病ガ未ダ第四款以上ニ達セヌガ而モ之ガ爲ニ職ニ堪ヘズ退職シ爾後重症ニ赴キ第四款程度ニ達スル場合ガアルシ、又下士官以下ノ軍人デハ斯ウイフコトノ外ニ公傷治療中ニ現役満期又ハ召集解除ト爲リ、而モ其ノ後一年内ニハ傷病ハ未ダ之ガ爲ニ一兵役ヲ免ゼラルル程度ニ確定セズ、其ノ後ニ至ツテ第四款程度ニ達スル場合ガアル。此ノ兩場合ニ於テハ増加恩給ニ關スル爾後重症ニ赴ク場合ノ規定デアアル所ノ第四十六條ノ第二項及第三項ノ規定ヲ準用シ、退職後五年内ニ第四款以上ニ達シタル者ニハ其レニ達シタル時ヨリ新ニ傷病年金ヲ給シ、又既に第四款症以上ニ達シテ傷病年金ヲ受ケテ居リ其ノ傷病程度ガ其ノ後増進シテ何款カ進ンダ者ニハ退職後五年内ニ請求シタトキニ限リ其ノ程度ニ應ズル傷病年金ニ改定シテアル(四六II準用)。又退職後五年ヲ經過シタ後ニ第四款以上ニ達シ從テ五年經過後ニ請求シタトキニ於テモ裁定官廳ハ其ノ傷病及



増進ガ公務ニ起因シタルコトノ顯著ナルコトヲ認メタルトキハ恩給審査會ニ付議シ其ノ顯著ナリトスル決議アリタル場合ニハ議決ノ翌月分ヨリ新ニ傷病年金ヲ給シ又ハ相當ノ傷病年金ニ改定スルコトガ出來ルノデアル。之レガ本條第二項ノ規定デアル。

而シテ如何ナル場合ニ於テモ傷病ト爲リ又ハ其ノ程度ノ増進スルコトニ付公務員ニ重大ナル過失(即チ故意又ハ故意ト同視スベキ過失)ノアリタルトキハ傷病年金ヲ給シナイ(本條III)。

傷病年金ニハ増加恩給ノ如ク必然的ニ普通恩給ヲ伴フトイフコトハナイガ、在職年數ガ最短普通恩給年限ニ達シタトキハ普通恩給、又其レニ達セズトモ引續キ三年以上デアルトキハ一時恩給ヲ併給スル(本條IV)。シカシ之ト増加恩給トハ併給スルコトハナク又傷病賜金トモ併給スルコトハナイ(八)。前ニ傷病賜金ヲ給セラレ爾後重症ニ赴キ傷病年金ヲ給セラルル場合ニ於テハ裁定官廳ハ傷病年金ノ給與始期ニ付考慮スルカ又ハ傷病賜金ノ返還ヲ命ズベキモノデアツテ重複的ニ給與スベキモノデハナイ。

傷病年金ハ昭和八年十月一日以後ニ公務傷病ト爲リタル者ニ給スルノヲ原則トスル。但シ其レ前下士官以下ノ軍人トシテ賑恤金、傷病賜金又ハ之ニ準ズベキモノヲ給與サルベキ事由アリタル者(所謂無償療兵ヲ含ム)ニハ其レ迄ニ公務傷病ニ爲ツタ者ト雖モ之ニ傷病年金ヲ給スルノデアル(改正法(附則七))。

第四十七條 前條ノ規定ハ準文官、陸

軍ノ見習士官海軍ノ候補生以外ノ準

軍人又ハ準教育職員ニシテ在職中

公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルモノ及陸軍ノ見習士官又ハ海軍ノ候補生ニシテ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルモノニ付之ヲ準用ス

公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルモノ及陸軍ノ見習士官又ハ海軍ノ候補生ニシテ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルモノニ付之ヲ準用ス

本條ハ前條トシテ傷病年金ニ關スル第四十六條ノ二ガ制定セラレタ結果之ヲモ準公務員ニ準用センガ爲ニ改正セラレタモノデアアル。

第四十八條 公務員左ノ各號ノ一ニ該

當スルトキハ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又

ハ疾病ニ罹リタルモノト看做ス

一 勅令ヲ以テ指定スル地域ニ在勤

中其ノ地ニ於テ流行病ニ罹リタル

トキ

二 戰地ニ於テ又ハ公務旅行中流行

病ニ罹リタルトキ

三 公務員タル特別ノ事情ニ關聯シ

第四十八條 公務員左ノ各號ノ一ニ該

當スルトキハ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又

ハ疾病ニ罹リタルモノト看做ス

一 勅令ヲ以テ指定スル地域ニ在勤

中其ノ地ニ於テ流行病ニ罹リタル

トキ

二 戰地ニ於テ又ハ公務旅行中流行

病ニ罹リタルトキ

三 公務員タル特別ノ事情ニ關聯シ



テ生シタル不慮ノ災厄ニ因リ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ恩給審査會ニ於テ公務ニ起因シタルト同視スヘキモノト議決セラレタルトキ前項ノ流行病ノ種類ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

前二項ノ規定ハ公務員ニ準スヘキ者ニ付之ヲ準用ス

第四十九條 公務傷病ノ原因ヲ分ツテ戰闘又ハ戰闘ニ準スヘキ公務ト普通公務トス

戰闘ニ準スヘキ公務ノ範圍及公務傷病ニ因ル不具癡疾ノ程度並教育職員、警察監獄職員、待遇職員、準文官、準軍人及準教育職員ノ公務傷病ニ關スル規定ノ適用ニ付テノ階等ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四十九條第二項中「及公務傷病ニ因ル不具癡疾ノ程度」ヲ「公務傷病ニ因ル不具癡疾ノ程度及傷病年金ヲ給スヘキ傷病ノ程度」ニ改ム

テ生シタル不慮ノ災厄ニ因リ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ恩給審査會ニ於テ公務ニ起因シタルト同視スヘキモノト議決セラレタルトキ前項ノ流行病ノ種類ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
前二項ノ規定ハ公務員ニ準スヘキ者ニ付之ヲ準用ス  
第四十九條 公務傷病ノ原因ヲ分ツテ戰闘又ハ戰闘ニ準スヘキ公務ト普通公務トス  
戰闘ニ準スヘキ公務ノ範圍、公務傷病ニ因ル不具癡疾ノ程度及傷病年金ヲ給スヘキ傷病ノ程度並教育職員、警察監獄職員、待遇職員、準文官、準軍人及準教育職員ノ公務傷病ニ關スル規定ノ適用ニ付テノ階等ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

本條ノ改正ハ傷病年金ヲ給スベキ傷病ノ程度ヲ勅令ヲ以テ定ムルコトノ委任ヲ追加スルコトヲ目的

トシテオル。之ニ基イテ恩給法施行令ニ第二十四條ノ二ナル一條ヲ追加シテ其ノ程度ヲ定メタノデアアル。其ノ程度ハ改正前ノ傷病賜金ニ付テ定メラレアル第一款乃至第四款ノ程度デアリ、且同ジ様ニ四段ニ區別シ各之ニ第一款症、第二款症、第三款症、第四款症ノ名稱ヲ附シテオル(改正法別表)。

第五十條 裁定官廳ハ増加恩給ノ裁定

ヲ爲スニ當リ將來不具癡疾ノ回復シ又ハ其ノ程度低下スルコトアルヘキコトヲ認メタルトキハ五年間之ニ普通恩給及増加恩給ヲ給ス  
前項ノ期間滿了ノ六月前迄傷痍疾病回復セサル者ハ再審査ヲ請求スルコトヲ得再審査ノ結果恩給ヲ給スヘキモノナルトキハ之ニ相當ノ恩給ヲ給ス

第五十條ニ左ノ一項ヲ加フ

前二項ノ規定ハ傷病年金ノ裁定ヲ爲ス場合ニ付之ヲ準用ス

第五十條 裁定官廳ハ増加恩給ノ裁定

ヲ爲スニ當リ將來不具癡疾ノ回復シ又ハ其ノ程度低下スルコトアルヘキコトヲ認メタルトキハ五年間之ニ普通恩給及増加恩給ヲ給ス  
前項ノ期間滿了ノ六月前迄傷痍疾病回復セサル者ハ再審査ヲ請求スルコトヲ得再審査ノ結果恩給ヲ給スヘキモノナルトキハ之ニ相當ノ恩給ヲ給ス  
前二項ノ規定ハ傷病年金ノ裁定ヲ爲ス場合ニ付之ヲ準用ス

本條ノ改正ハ傷病年金ニ付テモ有期裁定ヲ認ムルコトヲ定メタノデアアル。傷病年金ハ永續性アル傷病ニ付給與スルノデアアルガ、永續性丈ハ裁定時ニ於テモ認メ得ルガ其ノ程度ハ將來或ハ降下スルヤモ



知レズト想像シ得ルモノガアル。此レハ程度ノ高キ不具癱疾ノ場合ニ於ケルヨリモ一層繁キモノガアル。茲ニ於テ不具癱疾ニ付テノ有期裁定ノ規定ヲ準用シ、裁定ニ當リ傷病ノ回復シ又ハ其ノ程度ノ低下スルコトアルベキ疑アルトキハ五年間給與スルノ期限附ノ裁定ヲ爲シ、其ノ期間滿了ノ六月前迄其ノ傷病ガ第四款以下ニ低下シナカツタトキハ残りノ六ヶ月内ニ更ニ爲シタル再審査ノ請求ヲ審査シ其ノ傷病程度ノ測定ヲ爲シ新ニ無期限ノ傷病年金給與ヲ始メル。而シテ初ノ傷病程度ガ例ヘバ第一款デアツテ再審査ノ結果ガ第四款デアツタトキハ第四款ニ相當スル傷病年金ヲ給シ、第四款ニ達セザルトキハ再度ノ請求ヲ棄却スル。

第五十一條 公務員左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ引續キタル在職ニ付恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

第五十一條第二項中「第四號但書」ヲ「第二號但書及第四號但書」ニ改ム

第五十一條 公務員左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ引續キタル在職ニ付恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

- 一 懲戒、懲罰又ハ教員免許狀褫奪ノ處分ニ因リ退職シタルトキ
- 二 在職中陸軍刑法若ハ海軍刑法ニ依リ死刑、懲役刑若ハ一年以上ノ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ其ノ他ノ法令ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

- 一 懲戒、懲罰又ハ教員免許狀褫奪ノ處分ニ因リ退職シタルトキ
- 二 在職中陸軍刑法若ハ海軍刑法ニ依リ死刑、懲役刑若ハ一年以上ノ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ其ノ他ノ法令ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

第二十六條第四號但書ノ規定ハ前項ノ規定ノ適用ニ關シテハ之ヲ適用セズ

第二十六條第二號但書及第四號但書ノ規定ハ前項ノ規定ノ適用ニ關シテハ之ヲ適用セズ

本條第二項ニ第二十六條「第二號但書」ナルモノヲ加ヘタノハ下士官以下ノ軍人ヨリ准士官以上ノ軍人ニ進級シタ場合ニ普通恩給ノ爲ノ最短期限ノ計算ニ關シテハ之ヲ退職ト看做シタノデアアルガ(新二六)失格ノ爲ニハ退職ト見テオルノデハナイトイフコトヲ言ツタ迄デアアル。此ノ規定ハ警部補、警部ノ間ニ於ケル場合(二六・四)ト異リ、第二十六條ノ第二號デ目的ヲ限定シテ居ルカラ茲ニ明文ヲ以テ更ニ斷リ書ヲ入レルノ必要ハナイノデアアルケレドモ、若シ之レヲ省クトキハ同條第四號ノ明言サレテオルノニ比較シテ此ノ場合ハ或ハ引續カザルモノトスルノ意味ナルカノ疑問ヲ生ズル虞ガアルカラデアアル。

第五十二條 公務員ニシテ其ノ退職ノ當時仍他ノ公務員トシテ在職スルモノニ付テハ總テノ公務員ヲ退職スルニ非サレハ之ニ恩給ヲ給セス  
公務員ニシテ退職ノ當日又ハ翌日他ノ公務員ニ就職シ之ヲ勤續ト看做サルモノニ付テハ後ノ公務員ヲ退職スルニ非サレハ之ニ恩給ヲ給セス

第五十二條 公務員ニシテ其ノ退職ノ當時仍他ノ公務員トシテ在職スルモノニ付テハ總テノ公務員ヲ退職スルニ非サレハ之ニ恩給ヲ給セス  
公務員ニシテ退職ノ當日又ハ翌日他ノ公務員ニ就職シ之ヲ勤續ト看做サルモノニ付テハ後ノ公務員ヲ退職スルニ非サレハ之ニ恩給ヲ給セス



公務員ニシテ恩給ヲ給セサル官職ニ轉シ退職シタルモノニ付テハ其ノ轉任ヲ退職ト看做シ之ニ恩給ヲ給ス

第五十三條 公務員ニシテ其ノ退職ノ當時仍第四十二條第一項第一號ニ規定スル宮内職員トシテ在職スルモノニ付テハ本法ニ依ル恩給ハ之ヲ給セス

第五十四條 普通恩給ヲ受クル者再就職シ失格原因ナクシテ退職シ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ恩給ヲ改定ス

- 一 再就職後在職一年以上ニシテ退職シタルトキ
- 二 再就職後公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具癡疾ト爲リ退職シタルトキ
- 三 再就職後公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退職シタル後五年内ニ之カ爲不具癡疾ト爲リ又ハ其ノ

公務員ニシテ恩給ヲ給セサル官職ニ轉シ退職シタルモノニ付テハ其ノ轉任ヲ退職ト看做シ之ニ恩給ヲ給ス

第五十三條 公務員ニシテ其ノ退職ノ當時仍第四十二條第一項第一號ニ規定スル宮内職員トシテ在職スルモノニ付テハ本法ニ依ル恩給ハ之ヲ給セス

第五十四條 普通恩給ヲ受クル者再就職シ失格原因ナクシテ退職シ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ恩給ヲ改定ス

- 一 再就職後在職一年以上ニシテ退職シタルトキ
- 二 再就職後公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具癡疾ト爲リ退職シタルトキ
- 三 再就職後公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退職シタル後五年内ニ之カ爲不具癡疾ト爲リ又ハ其ノ

程度増進シタル場合ニ於テ其ノ期間内ニ請求シタルトキ

前項第三號ノ場合ニ於テハ第四十六條第三項ノ規定ヲ準用ス

第五十五條 前條ノ規定ニ依リ普通恩給ヲ改定スルニハ前後ノ在職年ヲ合算シ其ノ年額ヲ定メ増加恩給ヲ改定スルニハ前後ノ傷痍又ハ疾病ヲ合シタルモノヲ以テ不具癡疾ノ程度トシ其ノ恩給年額ヲ定ム

- 一 後ノ傷痍又ハ疾病カ戦闘又ハ戦闘ニ準スヘキ公務ニ起因スルトキ
- ハ別表第二號表甲號中前項ノ規定ニ依リ定メタル不具癡疾ノ程度ニ相應スル増加恩給年額ヨリ前ノ増加恩給年額ト別表第二號表甲號中其ノ不具癡疾ノ程度ニ相應スル増

程度増進シタル場合ニ於テ其ノ期間内ニ請求シタルトキ

前項第三號ノ場合ニ於テハ第四十六條第三項ノ規定ヲ準用ス

第五十五條 前條ノ規定ニ依リ普通恩給ヲ改定スルニハ前後ノ在職年ヲ合算シ其ノ年額ヲ定メ増加恩給ヲ改定スルニハ前後ノ傷痍又ハ疾病ヲ合シタルモノヲ以テ不具癡疾ノ程度トシ其ノ恩給年額ヲ定ム

- 一 後ノ傷痍又ハ疾病カ戦闘又ハ戦闘ニ準スヘキ公務ニ起因スルトキ
- ハ別表第二號表甲號中前項ノ規定ニ依リ定メタル不具癡疾ノ程度ニ相應スル増加恩給年額ヨリ前ノ増加恩給年額ト別表第二號表甲號中其ノ不具癡疾ノ程度ニ相應スル増



加恩給年額トノ差額ヲ控除シタルモノヲ以テ増加恩給ノ年額トス但シ後ノ傷痍又ハ疾病ノミニ因ル増加恩給年額カ前後ノ傷痍又ハ疾病ヲ合シタルモノニ依ル増加恩給年額ト同額ナルトキハ此ノ控除ヲ爲サス

二 後ノ傷痍又ハ疾病カ普通公務ニ起因スルトキハ別表第二號表乙號中前項ノ規定ニ依リ定メタル不具痲疾ノ程度ニ相應スル増加恩給年額ニ前ノ増加恩給年額ト別表第二號表乙號中其ノ不具痲疾ノ程度ニ相應スル増加恩給年額トノ差額ヲ加ヘタルモノヲ以テ増加恩給ノ年額トス

加恩給年額トノ差額ヲ控除シタルモノヲ以テ増加恩給ノ年額トス但シ後ノ傷痍又ハ疾病ノミニ因ル増加恩給年額カ前後ノ傷痍又ハ疾病ヲ合シタルモノニ依ル増加恩給年額ト同額ナルトキハ此ノ控除ヲ爲サス

二 後ノ傷痍又ハ疾病カ普通公務ニ起因スルトキハ別表第二號表乙號中前項ノ規定ニ依リ定メタル不具痲疾ノ程度ニ相應スル増加恩給年額ニ前ノ増加恩給年額ト別表第二號表乙號中其ノ不具痲疾ノ程度ニ相應スル増加恩給年額トノ差額ヲ加ヘタルモノヲ以テ増加恩給ノ年額トス

第五十五條ノ二 前二條中増加恩給ノ改定ニ關スル規定ハ傷病年金ヲ受クル者再就職シ再就職後公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退職

第五十五條ノ二 前二條中増加恩給ノ改定ニ關スル規定ハ傷病年金ヲ受クル者再就職シ再就職後公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退職シ増加恩

シ増加恩給又ハ傷病年金ヲ受クヘキ場合ニ付之ヲ準用ス

給又ハ傷病年金ヲ受クヘキ場合ニ付之ヲ準用ス

本條ヲ置イタノハ傷病年金創設ノ結果デアアル。傷病年金受給者(傷病賜金者ヲ含マズ)ガ再就職シ更ニ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹ッタ場合ニ於テハ其ノ傷病合計ノ程度ニヨリ或ハ上位ノ傷病年金ヲ給スベキコトモアルベク、或ハ不具痲疾トシテ増加恩給及普通恩給ヲ給スベキコトモアル。此ノ場合ニ於テ前後ノ傷病原因ガ異ルトキ即チ其ノ何レカ一方ノ原因ガ戦闘又ハ戦闘ニ準ズベキ公務デアツテ他方が普通公務デアアル場合ニ於テハ前條第二項ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定ムルノデアアル。

(一) 先ヅ前後ノ傷病ヲ合シテモ依然トシテ第一款以下デアアル場合ニハ(イ)後ノ原因ガ戦闘(又ハ準戦闘)ナルトキハ前後ノ傷病ヲ合シタル程度ニ對スル別表第三號表ノ甲號欄ノ金額ヲ求メ、之ヨリ更ニ一定金額ヲ控除シタモノヲ以テ其ノ改定傷病年金額トスルノデアアルガ、其ノ控除スベキ一定金額トイフノハ、前傷病ノ程度ニ對スル甲號欄ノ金額ト乙號欄ノ金額トノ差額デアアル。但シ後ノ傷病ノミニ對スル傷病年金額ガ前後ノ傷病ヲ合シタルモノニ對スル傷病年金額ニ等シキ様ナル場合(増加恩給ト異リ斯ル場合ハ稀有ナルベシ)ニハ此ノ控除ヲ爲サナイ。(ロ)後ノ原因ガ普通公務ナルトキハ前後ノ傷病ヲ合シタル程度ニ對スル別表第三號表ノ乙號欄ノ金額ヲ求メ、之ニ(イ)ニ述ベタ差額ヲ加ヘタモ



ノヲ以テ傷病年金ノ額トスル。

(二) 次ニ前後ノ傷病ヲ合シテ不具癡疾程度ニ達スル場合ニハ(イ)後ノ原因ガ戦闘(又ハ準戦闘)ナルトキハ前後ノ傷病ヲ合シタル程度ニ對スル別表第二號表ノ甲號欄ノ金額ヲ求メ之ヨリ(一)ノ(イ)ニ於テ述ベタ一定金額(差額)ノ控除ヲ爲シタモノヲ以テ改定ノ増加恩給年額トシ、從來普通恩給ガ併給セラレテオラナカツタトキニハ別ニ普通恩給ヲ併給スル。(ロ)後ノ原因ガ普通公務ナルトキハ前後ノ傷病ヲ合シタル程度ニ對スル別表第二號表ノ乙號欄ノ金額ヲ求メ、之ニ(一)ノ(イ)ニ於テ述ベタ一定金額(差額)ヲ加ヘタルモノヲ以テ増加恩給ノ年額トスルノデアアル。改定ニ依リ増加恩給ヲ給スベキ場合ニハ必然的ニ普通恩給ヲ併給スル。

第五十六條 前二條ノ規定ニ依リ恩給ヲ改定スル場合ニ於テ其ノ年額從前ノ恩給年額ヨリ少キトキハ從前ノ恩給年額ヲ以テ改定恩給ノ年額トス

第五十六條中「前三條」ヲ「前三條」ニ改ム

第五十六條 前三條ノ規定ニ依リ恩給ヲ改定スル場合ニ於テ其ノ年額從前ノ恩給年額ヨリ少キトキハ從前ノ恩給年額ヲ以テ改定恩給ノ年額トス

本條ノ改正ハ傷病年金ノ再任改定ニ當リテハ改定ニ依リテ前ノ額ヨリ下スコトナキコトヲ規定シタモノデアアル。改定ニ依ツテ傷病年金額ノ減少スル様ナコトハ前ノ傷病ガ戦闘(又ハ準戦闘)ニ原因シ後ノ傷病ガ普通公務ニ原因スル場合ニ生ジ得ル所デアアル。前ノ傷病ガ治癒シテ其ノ程度ヲ低下シタコト

ニヨツテ年金額ヲ減少スル場合ハ別ノ理由ニヨルモノデアツテ、此ノ規定ノ關知スル所デハナイ。

第五十七條 前三條ノ規定ハ宮内官ノ恩給規程ニ依ル恩給ヲ受クル者公務員ト爲リ退職シタル場合ニ付之ヲ準用ス

第五十七條中「前三條」ヲ「前四條」ニ改ム

第五十七條 前四條ノ規定ハ宮内官ノ恩給規程ニ依ル恩給ヲ受クル者公務員ト爲リ退職シタル場合ニ付之ヲ準用ス

本條ハ宮内官ノ恩給規程ニ依リテ恩給ヲ受クル者ガ公務員ト爲リ再任改定ヲ爲ス場合ニ關スル規定デアアル。「前三條」ヲ「前四條」ニ改メタ結果ハ宮内官ノ方面ニ傷病年金制度ガ設ケラレタル曉、其ノ受給者ガ恩給法上ノ公務員ト爲リ、更ニ公務ノ爲傷病ト爲リタル場合ノ改定ハ公務員ガ傷病年金ヲ受ケ更ニ公務員ニ再任シテ公務傷病ト爲リタル場合ニ爲ス改定ニ準ジテ定メラルモノト爲ルノデアアル。宮内官恩給規程ガ傷病年金制度ヲ認ムルヤ否ヤハ全ク同規定ノ定ムル所デアアル。

第五十八條 普通恩給ハ之ヲ受クル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ間之ヲ停止ス

第五十八條第一項第一號中「兵卒」ヲ「兵」ニ、同項第二號中「六年未滿」ヲ「二年以下」ニ改ム

一 公務員又ハ第四十二條第一項第一號ニ規定スル宮内職員トシテ就職スルトキハ就職ノ月ノ翌月ヨリ

同條第一項ニ左ノ二號ヲ加フ  
三 之ヲ受クル者三十五歳ニ滿ツル月迄ハ普通恩給ノ六分ノ一、

一 公務員又ハ第四十二條第一項第一號ニ規定スル宮内職員トシテ就職スルトキハ就職ノ月ノ翌月ヨリ



退職ノ月迄但シ實在職期間一月未  
滿ナルトキ、軍人以外ノ公務員ト  
シテ恩給ヲ受クル者陸軍若ハ海軍  
ノ兵卒トシテ就職スルトキ又ハ准  
士官以下ノ軍人若ハ準軍人トシテ  
恩給ヲ受クル者軍人以外ノ公務員  
トシテ就職スルトキハ此ノ限ニ在  
ラス

二 六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ  
處セラレタルトキハ其ノ月ノ翌月  
ヨリ其ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受  
クルコトナキニ至リタル月迄但シ  
刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタルト  
キハ恩給ハ之ヲ停止セス其ノ言渡  
ヲ取消サレタルトキハ取消ノ月ノ  
翌月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行  
ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄  
之ヲ停止ス

前項第二號ノ規定ハ増加恩給ニ付之  
ヲ準用ス

三十五歳以上四十歳ニ滿ツル月  
迄ハ普通恩給ノ八分ノ一ヲ停止  
ス但シ増加恩給又ハ傷病年金ト  
併給セラルル場合ニハ之ヲ停止  
セス

四 恩給年額千圓以上ニシテ其ノ  
恩給外ノ所得ノ年額五千圓ヲ超  
ユルトキハ恩給年額ト恩給外ノ  
所得ノ年額トノ合計額ノ六千圓  
ヲ超ユル額ノ二割ニ相當スル金  
額ヲ停止ス但シ恩給ノ支給額年  
額千圓ヲ下ラシムルコトナク其  
ノ停止年額ハ恩給年額ノ二割ヲ  
超ユルコトナシ

同條第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ  
前項第四號ノ所得ノ範圍及計算方  
法並停止方法ニ關シテハ勅令ヲ以  
テ之ヲ定ム

同條第二項中「前項」ヲ「第一項」ニ、  
「増加恩給」ヲ「増加恩給及傷病年金」

退職ノ月迄但シ實在職期間一月未  
滿ナルトキ、軍人以外ノ公務員ト  
シテ恩給ヲ受クル者陸軍若ハ海軍  
ノ兵トシテ就職スルトキ又ハ准士  
官以下ノ軍人若ハ準軍人トシテ恩  
給ヲ受クル者軍人以外ノ公務員ト  
シテ就職スルトキハ此ノ限ニ在ラ  
ス

二 二年以下ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ  
處セラレタルトキハ其ノ月ノ翌月  
ヨリ其ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受  
クルコトナキニ至リタル月迄但シ  
刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタルト  
キハ恩給ハ之ヲ停止セス其ノ言渡  
ヲ取消サレタルトキハ取消ノ月ノ  
翌月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行  
ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄  
之ヲ停止ス

三 之ヲ受クル者三十五歳ニ滿ツル  
月迄ハ普通恩給ノ六分ノ一、三十

ニ改ム

五歳以上四十歳ニ滿ツル月迄ハ普  
通恩給ノ八分ノ一ヲ停止ス但シ増  
加恩給又ハ傷病年金ト併給セラル  
ル場合ニハ之ヲ停止セス

四 恩給年額千圓以上ニシテ其ノ恩  
給外ノ所得ノ年額五千圓ヲ超ユル  
トキハ恩給年額ト恩給外ノ所得ノ  
年額トノ合計額ノ六千圓ヲ超ユル  
額ノ二割ニ相當スル金額ヲ停止ス  
但シ恩給ノ支給額年額千圓ヲ下ラ  
シムルコトナク其ノ停止年額ハ恩  
給年額ノ二割ヲ超ユルコトナシ  
前項第四號ノ所得ノ範圍及計算方法  
並停止方法ニ關シテハ勅令ヲ以テ之  
ヲ定ム

第一項第二號ノ規定ハ増加恩給及傷  
病年金ニ付之ヲ準用ス

本條第一項第一號及第二號中ノ改正ハ字句整理的ノモノデアリ、新ニ追加シタル同項第三號ハ所謂  
若年者ノ恩給停止デアリ、同第四號ハ多額所得者ノ恩給停止デアアル。本條第二項ヲ第三項トシタノハ



新ニ第二項ヲ加ヘタ結果デアル。現行ノ第二項(即チ新第三項)中ニ傷病年金ヲ加ヘタルハ傷病年金ハ増加恩給ト同ジク受給者ガ刑罰ヲ受ケタ時ノミ之ヲ停止スル趣旨ヲ規定シタモノデアアル。以下ニ之ヲ分説スル。

第一項第一號中「兵卒」ヲ「兵」ニ改メタノハ軍ニ於テ「兵卒」ノ稱呼ヲ「兵」ニ改メタコトニ應ジタノデアアル。

第一項第二號中「六年未滿」ノ懲役又ハ禁錮ヲ「二年以下」ノ懲役又ハ禁錮ニ改メタノハ二年ヲ超ユル懲役又ハ禁錮ニ處セラレタトキハ失權ヲ來スコトニ改正シタ結果(九)、恩給停止ハ二年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處セラレタル場合ニ之ヲ認ムベキガ故デアアル。

新ニ追加セラレタル第三號ハ普通恩給受給者ハ年齢三十五歳ニ滿ツル月迄(其ノ月ヲ含ム)ノ分ハ普通恩給額ノ六分ノ一ヲ、又三十五歳ニ滿チタ月ノ翌月分ヨリ四十歳ニ滿チタ月迄(其ノ月ヲ含ム)ハ普通恩給額ノ八分ノ一ヲ停止スルコトヲ定メタノデアアル。但シ普通恩給ガ増加恩給又ハ傷病年金ト併給セラルル場合ニハ停止シナイ。此ノ恩給金額ノ減少ハ停止デアツテ普通恩給金額其ノモノノ減額デハナイカラ、若シ其ノ停止中ノ者ガ死亡シテ遺族ノ扶助料ト爲ル場合ニハ停止セラレザル原ノ金額ヲ標準ニシテ扶助料額ガ算出セラルルコトト爲ルノデアアル。

若年者ノ恩給停止ハ若年者ノ能力轉換ノ可能トイフコトヲ中心理由トシテオル。恩給ハ減損能力補填ノ性質ヲ有スルモノデアアルガ、或方面ニ於テ減損シタ能力デモ、其ノ主體ガ比較的若年者デアアルトキハ其ノ能力ノ轉換ヲ行フコトニ依ツテ自ラ其ノ一部ヲ補填スルコトヲ得ルモノデアアル。一方ニ於テ若年者ニ對シテ恩給ヲ給與スルコトヲ定メツツ、他方ニ於テ其ノ一部ノ停止ヲ爲シ得ルコトノ合理的根據ハ此處ニ存スルト思フ。

一此ノ若年者ノ恩給停止ニ付テハ附則ニ改正法施行當時ニ於テノ經過的規定(改正法附則八)アルコトヲ注意セネバナラナイ。即チ本年九月三十日迄ニ退職シテ普通恩給權ヲ生ジタ者ト、改正法施行ノ日タル本年十月一日ニ在職中(休職中ノ者ヲモ含ム)デアツテ且其ノ後引續キ在職シ退職シタコトニ因ツテ普通恩給權ヲ生ズル者トニハ其ノ年齢ガ四十歳未滿デアツテモ此ノ若年者停止ノ規定ヲ適用シナイ。ガ其レ等ノ者ガ本年十月一日以後ニ再就職シテ既ニ受ケタ普通恩給ヲ再任改定セラルル場合ニハ其ノ再任改定ニ因ル増額分ニ付テハ増額分ノ六分ノ一又ハ八分ノ一ヲ其ノ年齢ニ應ジテ停止スル。

第四號ノ規定ハ所謂多額所得者ノ恩給停止デアアル。即チ恩給ノ年額ガ千圓以上デアツテ、其ノ恩給外ノ所得年額ガ五千圓ヲ超ユル者ノミニ付テ停止ヲ爲スノデアアル。所得總額ガ如何ニ多額デモ恩給年額ガ千圓ニ滿タナイ者ト恩給年額ガ多額デモ他ノ所得年額ガ五千圓ヲ超エナイ者トニ付テハ恩給ヲ停



止シナイ。「恩給年額」トイフノハ恩給法ニ依リテ其ノ者ノ受クル普通恩給ノ年額ヲ謂フ。若シ其ノ者ガ恩給法ニ依リ二個ノ普通恩給ヲ受クルガ如キ場合(稀ナガラ存ス)ニハ其ノ年額ノ合計額ヲ指スノデアル。「其ノ恩給外ノ所得」トイフノハ恩給法ニ依リテ其ノ者ノ受クル普通恩給ヲ除イタ外ノ所得ヲ謂フノデアルカラ、此ノ中ニハ財産ヨリ來ル所得モ、勤勞ヨリ來ル所得モ、勳章年金モ又他ノ恩給規程例ヘバ市町村條例等ニ依ル恩給モ入り、更ニ恩給法ニ依ル恩給デアツテモ觀念上一應ハ(施行令第二十四條ノ三第二項デ更ニ抜クノハ別トシ)包含セラレルノデアアル。法文ガ「其ノ恩給外ノ」ト規定シ單純ニ「恩給外ノ」ト規定シナカツタノハ此ノ意味カラデアアル。「其ノ」ノ文字ハ法律案ノ成立段階ニ於テ意識的ニ追加セラレタモノデアツテ意味ナキ文字デハナイ。恩給年額千圓以上ノ計算ニ付テハ本條第一項第三號ノ規定ニ依ル停止金額ヲ控除セズ裁定金額ニ依ツテ千圓以上ナルヤ否ヤヲ決定スルノデア  
ル。

恩給外ノ所得トハ何ヲ謂フカ、其ノ範圍ヲ如何ニスルカ又恩給ノ停止方法ヲ如何ニスルカハ勅令ニ委任サレテオル。此ノ委任ニ基イテ恩給法施行令ハ第二十四條ノ三以下ニ此等ノ事項ニ付テ規定ヲ爲シテオル。右ノ中第二十四條ノ三、第二十四條ノ四ハ何ヲ恩給外所得トスルカヲ定メ、第二十四條ノ五ハ其ノ所得ノ計算方法ヲ定メ、第二十四條ノ七ハ所得ノ調査決定ノ機關ヲ定メ、第二十四條ノ八ハ

受給者ノ所得申告義務ヲ規定シテオル。

(一) 恩給外所得ト其ノ範圍

此ノ恩給外ノ所得ハ恩給受給者ガ内地、朝鮮、臺灣、樺太、關東州又ハ南洋群島ニ住所又ハ一年以上居所ヲ有シテ居ル場合ト否トデ岐レル。

- (イ) 右地域内ニ住所又ハ一年以上ノ居所ヲ有スル場合ニハ
- (1) 右地域内ニ於テ受給者ニ生ズル一切ノ所得ノ中所得税法ノ定ムル第三種所得ニ當ルモノ
  - (2) 受給者ノ右地域外ニ於ケル資産、營業又ハ職業ヨリ生ズル所得中、所得税法ノ定ムル第三種所得ニ當ルモノ
- (ロ) 右地域内ニ住所又ハ一年以上ノ居所ヲ有セザル場合ニハ
- (1) 受給者ノ右地域内ニ於ケル資産又ハ營業ヨリ生ズル所得ノ中所得税法ノ定ムル第三種所得ニ當ルモノ

- (2) 右地域内ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ヨリ受クル利益若ハ利息ノ配當、剩餘金ノ分配、俸給賞與、俸給賞與ノ性質ヲ有スル給與

ガ恩給外ノ所得デアアル(三四ノ三、三四ノ四)。唯此等諸所得ト雖モ所得税法第十八條ニ於テ第三種所得稅ヲ課シナ



イコトトシタ所得ハ之ヲ控除スル。其ノ所得トイフノハ(イ)軍人從軍中ノ俸給手當、(ロ)遺族ノ扶助料、(ハ)傷痍疾病者ノ恩給即チ公務傷病ヲ理由トシテ受クル一切ノ恩給(所得税法第十八條第二號ニ於テ退隱料ヲ規定スルモ恩給法第八十五條ニ依リ今ハ退隱料ナルモノナシ)、(ニ)旅費、學資金及法定扶助料、(ホ)郵便貯金、産業組合(朝鮮ノ金融組合ヲ含ム)及銀行預金ノ利子、(ヘ)營利ノ事業ニ屬セザル一時ノ所得ヲ指シテ謂フノデアアル(所得税法一八)。

右ノ場合ニ於テ恩給法施行令第二十四條ノ四ヲ解スルニ當ツテ「所得税法ニ規定スル」トイフノハ所得税法中ニ規定シアル地域迄ヲモ指スモノデハナイ。從テ所得税法中ニ「本法施行地外ニ於テ」ナドノ文句ガ存スルガ、其レハ恩給外所得ノ方ニ持ツテ來ル場合ニハ「所得税法トイフ具體的法律(即チ大正九年法律第十一號)ノ施行地外ニ於テ」トイフ意味ニ解スベキデハナクシテ「恩給法施行令、言ヒ換レバ恩給法ヲ施行セラルル地域外ニ於テ」トイフ意味ニ讀ムベキデアアル。

(二) 恩給外所得ノ計算

其ノ計算ハ所得税法第十四條第一項、同條第二項、同法施行規則ノ第七條、第八條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ定メルコトトシテ居ル、準用シタ結果ニ付テノ細カイ説明ハ省略シテ之ヲ本書附録中ノ條文ニ讓ルガ、之ニ關シテノ二三ノ注意事項ヲ此處ニ述ベテ見ヨウト思フ。

(イ) 所得税ニ關シテハ被相続人ノ所得ヲ相続人ノ所得ト看做ス場合、及相続シタル資産又ハ營業ヲ相続人ガ前ヨリ引續キ有シタルモノトシテ所得ヲ計算スル場合ガアルガ、恩給外所得ニ付テハ之ヲ認メナイ(所得税法一四參照)。

(ロ) 所得税ニ關シテハ勤勞所得ニ付テノ控除ヲ爲スモ(所得税法一五)恩給外所得ニ付テハ之ヲ爲サナイ。之ハ恩給外所得ニ付テハ初カラ恩給受給者ニ取ツテ主ナル勤勞所得デアアル恩給ヲ包含シナイノデアルカラ課税ノ場合ノ如ク勤勞控除ヲ爲スノ要ガナイカラデアアル。

(ハ) 恩給外所得ニ付テハ戸主及其ノ同居家族ノ所得ヲ合算スルコトハナイ(所得税法一五)。

(ニ) 恩給外所得ニ付テハ生命保險契約ノ保險料ノ控除モ亦之ヲ爲サナイ(所得税法一六ノ三)。

(三) 恩給外ノ所得ノ決定ハ其ノ恩給ノ裁定官廳ガ之ヲ爲スノデアアルガ之ヲ爲スニ至ル前提トシテノ所得ノ調査ハ内地ニ在リテハ稅務署長、朝鮮、臺灣、關東州、樺太又ハ南洋群島ニ在リテハ内地ノ稅務署ノ事務ニ當ルベキ事務ヲ司ル官廳デ之ヲスル(法令二四ノ六)。

恩給外所得ノ調査ヲ爲サン爲ニハ恩給ノ裁定官廳ハ調査ヲ要スル受給者即チ年額千圓以上ノ普通恩給又ハ扶助料等ノ受給者ノ氏名、住所(居所)及恩給年額ヲ稅務署(稅務官署)ニ通知スル(法令二四ノ六)。  
通知ノ時期ニ付テハ別ニ法定ハシナイケレドモ、毎年四月末日迄ニ通常其レ迄ニ裁定シアル分ヲ通知シ、



其レ以後ニ裁定スル前年以前ノ退職(又ハ死亡)者ノ恩給ハ隨時之ヲ稅務署長(稅務官署)ニ通知スルコトト爲ラウ。

稅務署長(稅務官署)ハ之ニ基イテ所得ヲ調査シ之ヲ結了シタトキハ裁定官廳ニ報告スル(施令二四)ノ其ノ時期ハ、原則トシテハ七月末日デアル。後ヨリ追加シテ報告サレタ分ハ自然多少後レザルヲ得ナイシ、又場合ニ依ツテハ、其ノ年ニハ調査決定出來ナイ場合ヲ生ズル。此ノ事由ヨリ調査決定ノ後レタトキハ、其ノ爲停止ガ後レタ分ニ付テハ次ニ述ブルガ如ク後ノ支給分ヨリ控除スルコトガ出來ルノデアル。

斯ノ如クニシテ恩給外ノ所得ノ調査ガ出來タ場合ニハ裁定官廳ハ其ノ所得額ヲ決定シ法律ヲ適用シテ恩給ノ停止年額ヲ定メル。

又所得額ヲ決定シタ後ニ於テモ其ノ所得額ハ後ヨリ追加又ハ減損等ノ更訂ヲ爲シ得ルガ、之ヲ追加又ハ更訂シタトキハ恩給ノ停止額モ亦之ヲ更正シ、若シ不足分アレバ未支給恩給又ハ財産ヨリ追徴シ、若シ過剩分アレバ之ヲ追給スルノデアル(施令二四)。

停止額ハ普通恩給年額ト右ニ述ベタル所ニヨリ定ムル所得年額トノ合計額ガ六千圓ヲ超過シタ額ノ二割ニ當ル額デアル。尤モ其ノ二割ヲ減ズルトキハ普通恩給ノ支給額ガ年額千圓ニ滿タザルニ至ルト

キハ千圓ニ滿ツル程度ノ停止ニ止メ、又停止年額ガ普通恩給年額ノ二割ヲ超ユル計算ト爲ルトキハ普通恩給年額ノ二割ニ當ル程度ニ止メル。二三ノ例ヲ示セバ次ノ如クデアル。

普通恩給年額	其ノ他ノ所得年額	停止額	適用規定
1,000	7,000	0	本文ノ規定
1,100	6,000	100	但書前段
1,500	5,500	200	本文ノ規定
2,000	10,000	400	但書後段
3,000	4,000	0	本文ノ規定

右ノ停止ノ理論上ノ根據ハ恩給外ノ所得ガ勤勞所得ナルトキト財産所得ナルトキトニ依ツテ異ル。勤勞所得ヲ標準トスル停止ハ、減損能力認定ノ訂正又ハ能力ノ轉換ヲ理由トスルモノデアリ、財産所得ヲ標準トスル停止ハ之トハ全ク理由ヲ異ニシ、恩給ノ財政的輕減ヲ圖ルニ當ツテ最モ負擔力ノ大ナルモノヲ擇ンダ結果デアル。之ニハ尙實際上ノ理由トシテ勤勞所得ガ財産所得ノ形ヲ取ツテ表ハルル幾多ノ場合ガアツテ兩者ノ區別シ得ザルコトモ存スル。

恩給一部ノ停止方法ハ前述ノ方法ニヨリテ決定シタル停止額ヲ、所得決定ノ年(所得ノ屬スル年)ノ



七月一日ヨリ翌年六月三十日ニ至ル滿一年間ニ給與スベキ恩給中カラ控除スルノデアル(施令二四ノ)。即チ所得ハ其ノ年ノ始カラ其ノ年ノ末迄ノ分ヲ或ハ前年ノ實績ヲ標準トシ或ハ其ノ年ノ豫算ヲ見テ、之デ年ノ半デアル所ノ七月迄ニ決定シ、決定シタ以後其ノ年半年ト翌年半年トニテ——即チ半年後レノ一年間ニ——停止ヲシテ行カウトイフノデアル。デアルカラ停止ハ半分ハ所得ノ屬スル年分ノ恩給カラ爲サレルシ半分ハ所得ノ屬スル年ノ翌年分カラ爲サルコトト爲ルノデアル。當該翌年ニ同ジ様ナ所得ガアルカ否カラ問ハナイ。其ノ代リ所得ノ屬スル年ノ前半ニハ全然停止ヲシテ居ナイ。是レハ停止技術上止ムヲ得ナイ爲デアル。此ノ結果トシテ恩給停止期間中ニ死亡其ノ他ノ原因ニヨツテ失權ヲ來ス様ナ場合ニハ其ノ月以後ノ分トシテ別ノ財産等カラ停止スベキ分ヲ追徴スル様ナコトハナイ(施令二四ノ)。

多少問題ト爲ルハ、此ノ多額所得停止中ニ再就職又ハ刑罰等ノタメニ恩給全額ノ停止ガ爲サルルニ至ツタトキデアル。此ノ場合ニ付テハ明文ハ存シナイケレドモ、停止ハ給與ヲ前提トシテオルカラ再就職等デ全部停止ヲシテオルトキニ於テハ多額所得ノ爲ノ停止モアリ得ナイト謂ハザルヲ得ナイ。再就職ノ場合デモ恩給法第九十九條ノ規定(昭和八年法律第五十號恩給法中改正法律附則第十七條ニヨリ尙殘ル分)ニ依ツテ一部給與ヲ受ケテ居レバ其ノ限度ニ於テ停止ヲ受ケル場合ガ無イトハ言ヒ得ナ

イ。

以上ニ述ベタ通常ノ場合ノ外ニ、退職後數年ヲ經テ恩給ノ裁定ヲ申請スル場合又ハ申請ハ早クナシテモ調査ノ爲ニ裁定ガ翌年以後ニ行ハルル場合ガアル。此ノ場合ニ於テハ、裁定ヲ爲シタ年ニ屬スル恩給外所得ノ調査決定ハ右ニ述ベタ通常ノ手續デ之ヲ爲シ得ルモ、其ノ以前ノ分ノ恩給ニ付テハ通常ノ手續デ恩給外所得ノ調査決定ヲ爲シ得ナイ。此ノ場合ニ於テハ恩給外所得ノ調査機關タル稅務署長其ノ他ノ稅務官署、其ノ決定機關タル裁定官廳ハ其ノ分ニ付テハ臨時ニ出來得ル限り一般ノ場合ニ準ジテ過去ノ恩給外所得ヲ調査シ之ヲ決定シ、間ニ合フナラバ過去ノ溜ツテ居ル分ノ恩給支給額ヨリ其ノ決定額ノ停止ヲ爲シ、若シ又停止額ノ決定ガ非常ニ後レル様ナ場合ニ裁定官廳ガ先ヅ一應溜ツテ居ル分ノ給與丈ヲ爲シテ置カウト思フ場合ニハ、之ヲ支給シテ置イテ其ノ後ノ給與分カラ新ラシイ停止分ト一緒ニ停止シテモ宜シイ(施令二四ノ)。

公務員ガ退職シテ新タニ恩給ヲ受クルニ至ツタカ、又ハ公務員ガ死亡シテ遺族ガ新タニ扶助料ヲ受クルニ至ツタ半端ノ年分ノ恩給外所得ニ付テハ調査決定ノ手續ヲ行ハナイ(施令二四ノ)。其ノ結果ハ、其ノ分ニ付テハ多額所得ニ依ル恩給停止ヲ行ハナイコトト爲リ、全年恩給ヲ受クルニ至ル年カラ恩給ヲ停止スルコトト爲ルノデアル。故ニ極長イモノハ一年半近クニ互ツテ此ノ恩給停止ヲ受ケナイ場合ガ



存スル。

朝鮮、關東州、南洋群島等個人ノ第三種所得ニ付所得税ヲ課シテ居ラヌ所ニ居住シテ居ル者ハ其ノ所得ニ付テ稅務官署ニ申告スル機會ガナイ。從テ稅務官署ハ其ノ恩給外所得ヲ調査スルニ資料ヲ得ルコトニ困難ヲ感ズル。其處デ施行令第二十四條ノ八デハ年額千圓以上ノ恩給ヲ受クル者ニシテ朝鮮、關東州又ハ南洋群島ニ住所又ハ一年以上ノ居所ヲ有スル者ト同地域内ニ住所又ハ一年以上ノ居所ヲ有セザルモ同地域内ニ有スル資産又ハ營業ヨリ生ズル所得ヲ得ル者トハ毎年三月十五日迄ニ所得ノ種類及金額ヲ詳記シ裁定官廳ニ之ヲ申告スベキモノトシテオル(同條)。此ノ申告ヲ爲スニハ裁定官廳ガ内閣恩給局長ナル場合ニハ申告書ハ朝鮮ニ在ツテハ朝鮮總督府、關東州ニ在ツテハ關東廳、南洋群島ニ在ツテハ南洋廳ヲ經由スベキモノトシタ。此ノ經由廳ニ屬スル稅務官署ハ、ヤガテ恩給外所得ノ調査ヲ爲スベキ機關ト爲ルノデアルカラ申告書ノ進達ニ際シテ所得ノ調査ヲ行フコトト爲ラウト思フ。尤モ此ノ申告トハ別ニ裁定官廳ハ此等ノ稅務官署ニ右居住者又ハ財產所有者ノ所得ノ調査ヲ委嘱スルコトハ勿論デアルカラ此ノ兩方面カラノ書面ニ依ツテ經由廳ハ其ノ事實ヲ知ツテ調査ヲ完了スルコトガ出來ル。

又其ノ裁定官廳ガ總督其ノ他地方長官デアル様ノ場合ニハ、若シ其ノ受恩給者ガ裁定官廳タル總督其ノ他地方長官ノ管轄内ニ居住スルトキハ何者モ經由セズニ其ノ裁定官廳ニ、又若シ裁定官廳タル總督其ノ他地方長官ノ管轄内ニ居住シナイトキハ居住地又ハ資産若ハ營業ノ所在地ヲ管轄スル總督又ハ地方長官ヲ經由シテ裁定官廳ニ申告ヲ爲スベキデアアル。申告ノ期限及内容事項ハ前ニ述べタモノト同様デアアル。

經由廳ガ内地ノモノデアツタトキニハ裁定官廳ハ更ニ内地ノ稅務官署ニ調査ヲ委嘱スルコトヲ必要トスル。尤モ總督其ノ他地方長官ノ裁定ノモノデ年額千圓ヲ超ユル恩給ナドハ極メテ少ナク、待遇職員ノ恩給ニ付テ其ノ事例ヲ生ズルコトガアルノニ過ギマイト思フ。

内地、朝鮮、臺灣、樺太、關東州、南洋群島ノ何レニモ居住シナイ者デ、其ノ地域ノ何レニカ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ヨリ利益若ハ利息ノ配當、剩餘金ノ分配、又ハ俸給賞與若ハ此等ノ性質ヲ有スル給與ヲ受クル恩給受給者(年額千圓以上ノ)モ亦毎年三月十五日迄ニ所得ノ種類及金額ヲ詳記シ直接ニ裁定官廳ニ其ノ申告ヲ爲スベキデアアル(施令二四ノ八I)。

此等申告ヲ怠ツタ結果ハ特別ノ制裁ヲ規定シタモノハナイケレドモ、調査ノ後レル爲ニ恩給ノ支給ガ長イ間見合セラレテ居ル場合ヲ生ズルコトガアル。過拂ハ後ヨリ追徴シ得ルハ勿論デアアルシ、過拂ヲ避クル爲ニ支給ノ一時見合セヲスルコトハ支給廳ノ當然ノ權能デアラカラデアアル。



此ノ改正規定ハ昭和九年四月一日以後ニ施行セラレル(改正法)(附則一)。

第五十九條 文官ハ毎月其ノ俸給ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ

教育職員ハ毎月其ノ俸給ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ  
但シ朝鮮、臺灣又ハ樺太以外ノ地ニ於ケル公立ノ小學校、實業補習學校、幼稚園及盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員ハ此ノ限ニ在ラス  
待遇職員ハ之ニ俸給ヲ給スル國庫、府縣其ノ他ノ經濟ニ對シ其ノ俸給又ハ給料ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ納付スヘシ

第五十九條 文官ハ毎月其ノ俸給ノ百分ノ二ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ

下士官以上ノ軍人ハ毎月其ノ俸給ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ  
教育職員ハ毎月其ノ俸給ノ百分ノ二ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ  
但シ朝鮮、臺灣又ハ樺太以外ノ地ニ於ケル公立ノ小學校、實業補習學校、幼稚園、盲學校、聾啞學校及小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員ハ其ノ學校又ハ幼稚園ノ所在地ヲ管轄スル府縣又ハ之ニ準スヘキ地方經濟ニ對シ其ノ俸給(又ハ給料)ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ納付スヘシ  
警察監獄職員ハ之ニ俸給ヲ給スル

第五十九條 文官ハ毎月其ノ俸給ノ百分ノ二ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ

下士官以上ノ軍人ハ毎月其ノ俸給ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ  
教育職員ハ毎月其ノ俸給ノ百分ノ二ニ相當スル金額ヲ國庫ニ納付スヘシ  
但シ朝鮮、臺灣又ハ樺太以外ノ地ニ於ケル公立ノ小學校、實業補習學校、幼稚園、盲學校、聾啞學校及小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員ハ其ノ學校又ハ幼稚園ノ所在地ヲ管轄スル府縣又ハ之ニ準スヘキ地方經濟ニ對シ其ノ俸給(又ハ給料)ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ納付スヘシ  
警察監獄職員ハ之ニ俸給ヲ給スル國庫、府縣其ノ他ノ經濟ニ對シ毎月其

國庫、府縣其ノ他ノ經濟ニ對シ毎月其ノ俸給(又ハ給料)ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ納付スヘシ  
待遇職員ハ之ニ俸給ヲ給スル國庫、府縣其ノ他ノ經濟ニ對シ毎月其ノ俸給(又ハ給料)ノ百分ノ二ニ相當スル金額ヲ納付スヘシ

ノ俸給(又ハ給料)ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ納付スヘシ  
待遇職員ハ之ニ俸給ヲ給スル國庫、府縣其ノ他ノ經濟ニ對シ毎月其ノ俸給(又ハ給料)ノ百分ノ二ニ相當スル金額ヲ納付スヘシ

本條ハ公務員個人ノ納金義務ヲ規定シタモノデアアル。即チ文官、中等學校ノ教育職員、待遇職員等從來其ノ俸給ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ納付スベカリシ公務員ハ之ヲ百分ノ二ニ増額シ、從來何等ノ個人納金ヲ爲サザリシ軍人(兵ヲ除キ)、警察監獄職員、初等學校ノ教育職員等ノ公務員ハ新ニ其ノ實俸給(軍人ニ付テモ假定俸給ヲ云フノデハナイ)ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ毎月納付スベキモノデアアル。公務員ニシテ納付義務ナキモノハ兵アルノミデアアル。之レハ兵ガ純然タル義務ノ履行トシテ在職スルコトト、俸給ト目スベキ給與ヲ給セラレザルモノナルコトヲ理由トスルモノデアアル。

個人納金ノ制度ハ沿革的ニハ扶助料基金構成ノ方法デアッタガ現行法及改正法ニ於テハ全ク一般財政的補助ノ目的ヲ有スルニ過ギナイ。勿論保險料タルノ意味ナドハ存シナイ。



第二節 恩給金額

第二章第二節中第六十條ノ前ニ左ノ一條ヲ加フ

第五十九條ノ二 本節ニ於テ退職前ノ俸給年額ト稱スルハ退職前一年内ノ俸給(軍人及準軍人ニ在リテハ各階等ニ付定メラレタル別表第一號表ノ假定俸給額ヲ以テ其ノ階等ニ對スル俸給額トス)ノ總額ヲ謂フ但シ左ノ特例ニ從フ

- 一 公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ之カ爲退職シ又ハ死亡シタル者ニ付退職又ハ死亡ノ際昇給アリタルトキハ其ノ爲サレタル昇給ノ中級俸ノ定アルモノ(軍人及準軍人ニ付テハ別表第一號表ノ假定俸給額ヲ以テ級俸トス)ニ付テハ一級、其ノ定ナキモノニ付テハ昇給前ノ俸給ノ百分ノ十五ヲ限度トシ退職一年前ヨリ昇給セラレタルモノトシテ計算ス

第二節 恩給金額

第五十九條ノ二 本節ニ於テ退職前ノ俸給年額ト稱スルハ退職前一年内ノ俸給(軍人及準軍人ニ在リテハ各階等ニ付定メラレタル別表第一號表ノ假定俸給額ヲ以テ其ノ階等ニ對スル俸給額トス)ノ總額ヲ謂フ但シ左ノ特例ニ從フ

- 一 公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ之カ爲退職シ又ハ死亡シタル者ニ付退職又ハ死亡ノ際昇給アリタルトキハ其ノ爲サレタル昇給ノ中級俸ノ定アルモノ(軍人及準軍人ニ付テハ別表第一號表ノ假定俸給額ヲ以テ級俸トス)ニ付テハ一級、其ノ定ナキモノニ付テハ昇給前ノ俸給ノ百分ノ十五ヲ限度トシ退職一年前ヨリ昇給セラレタルモノトシテ計算ス
- 二 前號ニ規定スル場合以外ノ場合

二 前號ニ規定スル場合以外ノ場合

ニ於テ退職前一年内ニ昇給アリタルトキハ其ノ昇給力前俸給二年以上据置ノ後爲サレタルモノナルトキニ限り前號ノ規定ヲ準用ス  
轉官職ニ依ル俸給ノ増額ハ之ヲ昇給ト看做シ前項但書ノ規定ヲ準用ス  
前二項ニ規定スル退職前一年内ノ俸給ノ算出方法ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
實在職期間一年未滿ナルトキハ其ノ俸給額ヲ月數ノ割合ニ依リ一年分ニ換算ス  
本節ニ於テ退職前ノ俸給月額ト稱スルハ退職前ノ俸給年額ノ十二分ノ一ニ相當スル金額ヲ謂フ

二 於テ退職前一年内ニ昇給アリタルトキハ其ノ昇給力前俸給二年以上据置ノ後爲サレタルモノナルトキニ限り前號ノ規定ヲ準用ス

轉官職ニ依ル俸給ノ増額ハ之ヲ昇給ト看做シ前項但書ノ規定ヲ準用ス  
前二項ニ規定スル退職前一年内ノ俸給ノ算出方法ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
實在職期間一年未滿ナルトキハ其ノ俸給額ヲ月數ノ割合ニ依リ一年分ニ換算ス  
本節ニ於テ退職前ノ俸給月額ト稱スルハ退職前ノ俸給年額ノ十二分ノ一ニ相當スル金額ヲ謂フ

今回ノ改正ノ一重要項目トシテ基礎俸給ノ變更ガアル。現行規定ニ依レバ普通恩給ハ公務員ノ退職

瞬間ニ於ケル名義上ノ俸給額ヲ一年分ニ換算シ之ヲ基礎俸給年額トシテ其ノ年額ヲ算出スルコトニ爲



ツテ居ル。公務員ノ中軍人ニ付テハ其ノ階等ニ依ツテ恩給額ガ定マルコトト爲ツテオリ直接ニ俸給ガ基礎ト爲ツテ恩給ガ算出サレテハ居ナイノデアルガ、其ノ階等ニ割當テラレタル金額ハ、中佐以上ニ付テハ實俸給ヲ基礎トシテ文官等ト同率ニヨリテ算出シタ額デアリ、又少佐以下ニ於テハ各階等ニ付計算上ノ便宜ノ爲ニ假定俸給ヲ作ツテ之ニ文官等ト同率(下士官兵ニ於テ少許ノ率ノ變更アリ)ヲ適用シテ算出シタ額デアル。而シテ何レノ場合ニ於テモ退職ノ瞬間ノ収入ヲ基礎トシテ其ノ額ヲ定メタモノデアル。併シ乍ラ恩給ハ公務員ノ在職中ノ經濟上ノ地位ヲ標準トシテ其ノ額ガ定メラルベキモノデアリ、其ノ經濟上ノ地位ハ俸給ヲ以テ測定スルノ外ハナイ。其ノ俸給トイフノハ現實ノ俸給ヲ謂フベキデアツテ、受ケザル俸給名義デアルベキ理由ガナイ。退職ノ日ニ於テ昇給セラレタル俸給ノ如キハ竟ニ受ケザル俸給デアル。茲ニ於テ外國ノ立法例ハ多クハ退職前三年間ノ平均俸給ヲ以テ俸給トシ、甚シキハ退職前十年間ノ平均俸給ヲ以テ俸給トシ、其ノ恩給金額ヲ算出シテ居ル。然ルニ我國ニ於テハ退職時ニ於ケル俸給名義ヲ基礎トシテ恩給額ヲ算出スベキモノトノ傳統的解釋ガ行ハレテオル所ヨリ、給セザル最後ノ俸給ヲ一二級、甚シキハ一舉ニ四五級モ昇給セシメル。俸給ノ給與主體ハ之ニ依ツテ自ラハ何等ノ給與ヲ増サズニ、他人ノ負擔スベキ恩給ヲ増額シ、現在收入即チ其ノ者ノ經濟能力ニ比例セザル恩給ヲ與ヘルコトト爲ツテオル。之レハ理論上誤デアルコトノ言フ迄モナキノミナラ

ズ、豫算ノ形式ヲ以テスル監督ヲ受クル俸給ヲ避ケテ、議會ノ協賛ヲ要セザル恩給ノ形式ニ依ツテ給與ヲ爲スモノデアツテ財政上看過スルヲ許サレナイ。殊ニ俸給ノ給與主體ト恩給ノ給與主體トガ相異ル場合ニ於テ其ノ弊害ノ著シキヲ見ル。茲ニ於テ改正法ハ恩給額算出ノ基礎ト爲ルベキ俸給ヲ原則トシテ退職前一年間ニ其ノ者ノ受ケタル實俸給額トスルコトトシタ。其處デ第六十條以下ノ法文ニ於テモ從來ノ用語デアル所ノ「退職當時ノ俸給」トイフノヲ「退職前ノ俸給」ト改メ、其ノ退職前ノ俸給トハ何ヲ謂フカヲ本條デ定メタノデアル。

軍人ノ現行普通恩給額表(改正前ノ別表第一號表)ハ前述ノ如ク、假リノ俸給額ヲ基礎トシテ算出シタ結果ヲ軍人ノ階等ニ配シテ表ニシタモノデアルガ、改正法ニ於テハ之ヲ還元シ、別表第一號表ニ軍人ノ各階等ニ付テノ假定俸給ヲ掲ゲ、一般ノ率ヲ用キテ之ヨリ普通恩給ノ年額ヲ算出スルコトトシタノデアル。其ノ結果軍人ニ付テモ「退職前一年内ノ俸給」トイフコトガ言ヒ得ルノデアル。實質ニ於テハ「退職前一年内ノ階等」トイフ意味デアル。

普通恩給年額ノ算出ハ其ノ基礎ヲ退職前一年間ノ俸給總額ニ置キ之ヲ以テ所謂俸給年額トシ之ニ法定ノ恩給率ヲ乗ズルノデアルガ、退職前一年内ノ俸給實額ヲ以テ俸給年額トスルニ付テ疑問ト爲ル數個ノ事柄ガアルノデ恩給法施行令第二十四條ノ九ニ於テハ其ノ主ナルモノヲ解決シテオル。即チ、



(イ) 初任ノ月ニ於テ日割計算ヲ以テ俸給ヲ給セラレタル場合ニ於テモ其ノ全月分ヲ以テ其ノ月ノ俸給額トスル

(ロ) 月ノ中途ニ於テ昇給アリタルトキハ昇給後ノ俸給額ヲ以テ其ノ月ノ俸給額トス。此處ニ謂フ所ノ昇給中ニハ轉官職ニ依ル昇給ヲモ包含スル。

月ノ中途ニ於テ俸給ノ降下シタ場合ニ付テハ特別ノ規定ガナイカラ、此ノ場合ニハ日割計算ニ依ル外ハナイ、又之レガ公平デアル。

(ハ) 休職ニ入ツタ爲ニ休職俸ヲ給セラレ、罰俸處分ヲ受ケテ俸給ヲ減ゼラレタ様ナ本來給與スベキ俸給ニ比シテ一時的ニ少額ヲ給セラレタル場合ニ於テハ、恩給ノ算出ノ基礎俸給トシテハ本來給セラルベキ俸給額ニ依ルノデアル。永久的減俸ノ場合ハ之ニ入ラナイ、減ゼラレタル俸給ニ依ルノデアル。タトヒ其ノ減俸期間ガ事實上短クトモ減俸前ノ俸給ニ依ルノデハナイ。

以上ノ場合ニ於テ軍人ハ凡テ恩給法別表第一號表ノ假定俸給ニ依ルベキデアルカラ、昇給トカ俸給ヲ給セラレルトカイフノハ、其ノ階等ノ進級トカ新任官トカヲ指スモノデアル。

退職前一年内ノ俸給實額ヲ以テ俸給年額トスルノ原則ニ對シテハ二個ノ經常的特例ト一個ノ經過的特例トガアル。本條第一項ノ第一號及第二號ガ前者デ、改正法附則第十條ガ後者デアル。先ヅ本條ニ

規定セラレル經常的ノモノニ付テ説明スレバ、

(イ) 公務傷病ノ爲ニ退職シ又ハ死亡シタ者ニ付テハ退職ノ際昇給ヲ爲スノガ一般ノ慣例デアル。而シテ或者ニ付テ現ニ昇給(軍人ナラバ階等ノ進級)ガ爲サレタトキハ、其ノ昇給ガ一級進ミデアツタトキハ其ノ一級、若シ又二級以上進メラレタトキニモ一級ハ退職一年前ニ溯ツテ其ノ時カラ昇給セラレテ居ツタモノトシテ取扱フトイフノデアル。言葉ヲ更ヘテ言ヘバ此ノ場合ニハ一級進ミノ退職時ノ俸給ヲ基礎トシテ恩給ヲ算出スルトイフコトニ爲ルノデアル。例ヘバ戰死シタ上等兵ガ即日伍長ニ進級セシメラレタトスレバ上等兵ニ爲ツタノガ何時デアツタトシテモ、伍長トシテ、其ノ假定俸給(第一號表)ニ依ツテ普通恩給額ヲ考ヘ、之ニ基イテ扶助料額ヲ算出スル。又假ニ戰死ノ日ニ於テ曹長ニ進メラレタトスレバ、其ノ時ニモ、一級上リ伍長ノ假定俸給ニ依ツテ恩給ヲ算出スルノデアリ、恩給丈ノ結果カラ見レバ一級進メラレタノト同ジデアル。俸給ニハ段階ノ法定セラレテ居ルモノト然ラザルモノトガアル。前者ヲ級俸ノ定アルモノト謂ヒ、後者ヲ其ノ定ナキモノトイフ。級俸ノ定メナキモノ例ヘバ年功加俸ノ如ク何圓以上何圓以下ト定ムルモノハ一級進ミトイフコトガ言ヘヌカラ、此レハ昇給前ノ俸給ノ一割五分進ミヲ以テ一級進ミトスルノデアル。學校職員ノ當分俸給ヲ給與級俸トシ又ハ上級ノ當分俸給トスルガ如キヲ如何ニ定ムベキカハ疑問デアルカラ、之ハ勅令ヲ以テ明確ニスルコトト



シテ居ルノデアル(Ⅰ)。此ノ委任ヲ受ケテ恩給法施行令第二十四條ノ十八左ノ如ク規定シテ居ル。

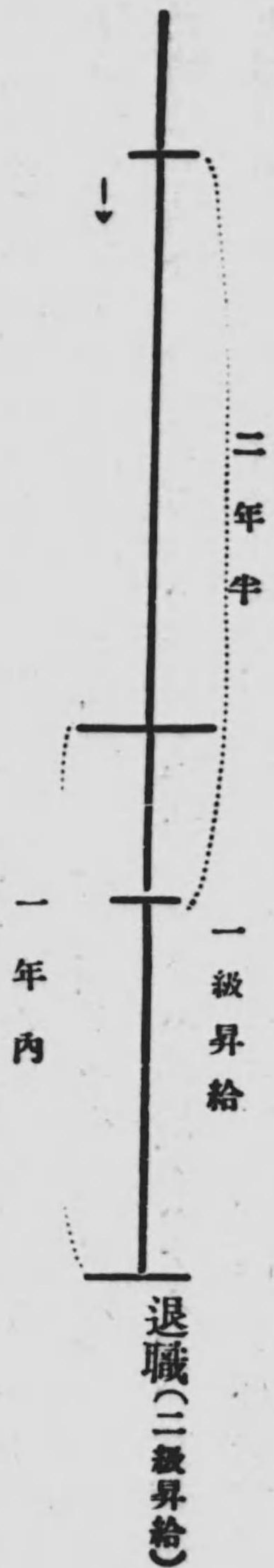
(一) 級俸ノ定アル場合ニ於テ當分給トシテ給與級俸ヨリ少額ノ俸給ヲ給セラレタル者ニ付テハ給與級俸ニ對シテ現實ノ當分給ガドウイフ位置ニ居ルカヲ定メ、給與級俸ノ一級上位ノ級俸ニ對シテ同様ノ位置ニ居ル想像上ノ給與額ヲ算出シテ之ヲ以テ當分給ニ對スル一級上位ノ俸給トスルモノデア。又判任官七十五圓未滿ノモノニ付テハ級俸ノ定アルニ拘ラズ適宜ノ俸給ヲ定メテ給與シ得ルコトト爲ツテオロノデアアルガ、此ノ場合モ當分給ト同様ニ取扱ツテ其ノ俸給ニ對スル一級上位ノ俸給ヲ算出スルノデアアル。

(二) 俸給令ニ依ツテハ同ジ一級ト云ヒ二級トイフ中ニ上俸下俸ノ區別ヲ爲シテオロモノガアル。此ノ場合ニハ同ジ一級中ノ上俸ハ其ノ下俸ニ對シテ實質上一級上位ノ俸給タル性質ヲ有スルカラ、此ノ場合ニ於テモ其ノ上俸ハ下俸ニ對シテ一級上位ノ俸給ト看做シタノデアアル(施令二四・二)。

(三) 轉任ニヨツテ昇給ヲ來ス場合ニ於テハ、新官職ニ付テ定メラレテオロ級俸中カラ轉任直前ノ官職ニ付テ現ニ給セラレテオツタ(當分給ナラ其ノ當分給)俸給ノ直上ニ當ル級俸ヲ以テ一級上位ノ俸給トスル。尤モ其ノ増シ方ガ前俸給ノ一割五分増以下デアルトキハ前俸給ノ一割五分増シノ程度迄ハ進級ヲ認め、之ヲ一級上位ノ俸給ト看做スノデアアル。

茲ニ注意スベキハ一級上位ノ俸給トシテ恩給額算出ノ基礎ト爲ルモノハ架空ノ俸給デハナクシテ現ニ昇給シタモノノ中デ此ノ一級程度ノ分ガ退職一年前カラ昇給アツタモノトシテ取扱ハレルトイフノデアツテ、昇ラナイ分迄ヲ昇ツタコトニシテ恩給算出ノ基礎トスルトイフコトデハナイコトデアアル。

(ロ) 俸給ヲ二年以上握置カレタ後ニ昇給サレテ退職シタ者ニ付テハ公務傷病ノ爲ニ退職シタ者ト同ジク一級程度ノ昇給ヲ認メルコトトシテオロ。例ヘバ前ニ昇給シタトキカラ二年以上ヲ經テ一級進級シ其ノ日ニ退職シタトキニハ其ノ進級シタ俸給ヲ一年分ニ換算シテ俸給年額トシ、又同様ノ者ガ二級進級シテ退職シタトキニモ一級進級シタモノトシテ其レヲ一年分ニ換算シテ俸給年額トスル。又例ヘバ退職半年前ニ一級昇級シタ者ガ其ノ級ノ儘退職シタ場合ニ、半年前ノ昇給ガ其レ前ノ俸給二年以上据置ノ後ニ爲サレタモノデアルトキハ、其ノ退職半年前ノ昇級俸給ヲ一年分ニ換算シテ之ヲ俸給年額トスル譯デアアル。若シ一度ニ二級以上昇給シタトキニハ一級丈昇給ヲ認メル譯デアアル。較々複雑ノ場合ノ一例ヲ探ルト



右ノ圖ニ示ス様ナ場合ニハ初ノ一級昇給ハ退職前ノ一年ノ初頭ニ昇給アリタルモノトシ、退職時ノ



二級昇給ハ前昇給即チ一級昇給ノ時ヨリ二年以上經過セヌカラ、退職ノ月分丈ヲ二級昇給シタ俸給トシテ退職前ノ俸給年額中ニ加ヘル。其ノ結果ハ一級昇給シタ俸給十一ヶ月分ト、其ノ後二級昇給シタ分ノ俸給一ヶ月分トノ合計ヲ以テ退職前ノ俸給年額トスルノデアル。

官職轉任ノ場合ノ俸給ノ増加ハ嚴格ノ意味ニ於テハ昇給デハナイガ、基礎俸給ノ關係ニ於テハ之ヲ昇給ト看做ス。若シ新舊官職ノ俸給ガ級俸ノ定アルモノナラバ兩者ニ付對當ヲ見、之ニヨツテ一級進級ナリヤ否ヤヲ定メル。若シ新官職ノ俸給ニ級俸ノ定ナキモノナルトキハ一割五分ノ制限ニ依ルベキデアル。其ノ如何ナルモノガ相對當スルカハ勅令ノ定ムル所デアル。

實在職期間ガ一年未滿ナルトキハ一年分ノ俸給實額ヲ計算スルコトハ出來ナイノデアルカラ、之ヲ一年分ニ換算スルノ外ハナイ。

休職俸ヤ罰俸ノ場合ニハ普通ノ俸給ニ引直シテ其ノ俸給額ヲ定メルノデアル。此レハ政府内部丈ノ事情デハアルガ改正立法立案ニ當リ「一年內ニ受ケタル」ト規定シタノヲ確定案ニ於テ「一年內ノ」ト較々曖昧ノ文字ヲ用ヒルコトニシタノモ此ノ意味ヲ含メテノコトデアツタ。

尙俸給ニ付テハ昭和七年法律第十三號ノ減額補給ニ關スル法律ノ適用ヲ妨グルモノデハナイ。

本條第五項ニ於テハ「退職前ノ俸給月額」ノコトヲ規定シテ居ル。退職前ノ俸給月額トイフノハ前四項ニ依ツテ定マルベキ俸給年額ノ十二分ノ一ヲ謂フノデアツテ、退職ノ月ノ俸給實額又ハ其ノ月分ノ

名義上ノ俸給月額ヲ謂フモノデモナイ。從ツテ退職前ノ俸給月額ヲ出スニハ先ヅ退職前ノ俸給年額ヲ出シテ之ヲ十二分スルノ方法ニ出ヅベキデアル。一時恩給ハ退職前ノ俸給月額ヲ基礎トシテ其ノ額ヲ算出スル。

以上ノ法則ニ對シ經過的ノ特別規定ガ存スル、其レハ改正法附則第十條ノ規定ガ其レデアツテ、本條第一項但書ニ規定スルニツノ場合ニ於テ其ノ公務員ガ恩給法上ノ同一種ノ公務員トシテ(公務員ノ種類ハ第十九條ニ於テ之ヲ定メテオル。又準文官ハ文官ニ、準教育職員ハ教育職員ニ、準軍人ハ軍人ニ準ジテ取扱フ)、加算年ヲ除キタル實在職年二十年以上勤績(中途ニ切レタルトキハ勿論勤績デハナイ)シタトキハ特殊事情アルトキニ限り本條ノ制限ノ一級ヲ二級迄、百分ノ十五ヲ百分ノ三十迄ニ上シテ退職前ノ俸給年額ヲ算出スル。勿論之レハ本條第一項ノ但書ノ條件ヲ具備シタ場合ニ限ルノデ、公務傷病トカ、俸給二年据置トカイフ條件ヲ要スルノハ言フ迄モナイ。又特殊事情ノ有無ハ裁定官廳ノ認定スル所デハアルガ、例ヘバ地方ノ教育職員ノ俸給豫算單價ガ甚ダ低クテ其ノ昇給ガ思フ様ニナラヌ様ナ事情ヲ指スノデアル。又當分ノ間トイフノハ事實上ハ法律改正ノ爲サル迄ヲ指スコトト爲ルノデアル。

基礎俸給ノ改正規定ハ本年十月一日以後ニ退職スル凡テノ者ニ適用シ全然例外ハナイ。



第六十條 文官在職年十五年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス

前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十五年以上十六年未滿ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額トシ十五年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス

前項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ外國實勤續在職年十五年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤續在職年中十五年ヲ控除シタル殘ノ勤續在職年一年ニ付退職當時ノ俸給年額三百分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ加給ス

在職年四十年ヲ超ユル者ニ給スヘキ恩給年額ハ之ヲ在職年四十年トシテ計算ス

第一項ノ在職年ハ國務大臣トシテ退

第六十條中「十五年」ヲ「十七年」ニ、「十六年」ヲ「十八年」ニ、「在職年五年」ヲ「在職年七年」ニ、「退職當時」ヲ「退職前」ニ改ム

同條第六項中「第二號若ハ第三號」ノ下ニ「第五十五條ノ二」ヲ加フ

第六十條 文官在職年十七年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス

前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十七年以上十八年未滿ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額トシ十七年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス

前項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ外國實勤續在職年十七年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤續在職年中十七年ヲ控除シタル殘ノ勤續在職年一年ニ付退職前ノ俸給年額三百分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ加給ス

在職年四十年ヲ超ユル者ニ給スヘキ恩給年額ハ之ヲ在職年四十年トシテ計算ス

第一項ノ在職年ハ國務大臣トシテ退

官スル者ニ付テハ國務大臣トシテノ在職年五年以上ナルヲ以テ足ル

第四十六條、第五十四條第一項第二號若ハ第三號又ハ前項ノ規定ニ依リ在職年十五年未滿ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ在職年十五年ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ額トス

第四十七條ノ規定ニ依リ準文官ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額トス

官スル者ニ付テハ國務大臣トシテノ在職年七年以上ナルヲ以テ足ル

第四十六條、第五十四條第一項第二號若ハ第三號、第五十五條ノ二又ハ前項ノ規定ニ依リ在職年十七年未滿ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ在職年十七年ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ額トス

第四十七條ノ規定ニ依リ準文官ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額トス

本條ハ文官ニ付テ其ノ普通恩給年額ヲ定メタ規定デアルガ、本條中ノ改正ノ要點ハ二ツデアル。一ハ普通恩給ヲ給スル最短在職年限ヲ十五年ヨリ十七年ニ延シタコトデ、他ハ普通恩給ノ年額ヲ算出スル基礎俸給ヲ從來ノ退職當時ノ俸給年額ニ代フルニ退職前ノ俸給年額ヲ以テシタコトデアル。退職前ノ俸給年額ニ付テハ前條ノ説明ニ於テ詳細ヲ盡シタカラ茲ニハ之ヲ省略シ、年限延長ニ付テノミ説明スルコトトスル。



一般ニ文官ノ在職年十七年ニ達シタトキニ之ニ對シテ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十即チ三分ノ一ニ相當スル金額ヲ普通恩給年額トシテ給スルノデアル。之レハ從來ノ在職年十五年ノ者ニ給スル額ト同一デア。爾後在職年一年ノ増ス毎ニ進ム率ハ基礎俸給ノ百五十分ノ一デアツテ從來ト異ラナイ。故ニ在職年十七年以上ノモノヲ採レバ、基礎俸給ノ百五十分ノ二ダケ減少スルコトト爲ル譯デア

ル。  
現行法ニ於テハ國務大臣ノミトシテノ在職年五年以上アルトキハ之ニ普通恩給ヲ給スルノデアルガ改正法ハ之ヲ七年以上ト改メタ。普通恩給ノ爲ノ最短在職年限ヲ一般ニ二年宛延長シタ結果デア。本年十月一日以後ニ退職スル者ハ在職年十七年未滿デハ原則トシテ普通恩給ヲ給セラレナイノデア。本年九月三十日迄ニ在職年十五年(國務大臣ニ在ツテハ五年)ニ達シテ居ル者ハ十月一日以後十七年(國務大臣七年)未滿ニテ退職シタトキニ於テモ之ニ普通恩給ヲ給スル(改正法附則一)。尤モ其ノ基礎俸給ハ新規定タル退職前一年間ノ實俸給(改正法五九ノ二)ニ依ルベキデアリ又十七年ニ不足スル年數一年ニ付退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ控除スル(改正法附則一一)。即チ在職年十五年以上十六年未滿ノ者ニ對シテハ百五十分ノ四十八、十六年以上十七年未滿ノ者ニ對シテハ百五十分ノ四十九ノ率ニ依ツテ其ノ額ヲ定ムルノデア。國務大臣ノ場合ニ於テモ同様ノ方法ニ依ル。

又本年九月三十日迄ニ在職年十五年ニ達シナイ者デモ、十月一日ニ現ニ休職中、待命中等デアツテ其ノ期間ガ法令上定マツテ居リ、其ノ期間ノ滿期ニ因ツテ當然退職スルガ如キモノニ在ツテハ、其ノ期間ノ滿了ニ因ツテ在職年ガ十五年ニ達スルトキハ退職ニ因リ在職年ガ十七年ニ達シナクトモ其ノ者ニモ普通恩給ヲ給スル。此ノ場合ニ於テハ休職、待命等ノ期間ハ半減計算ハシナイ(改正法四〇ノ二、附則五)。斯クテ在職年數ガ十五年以上十六年未滿ナラバ基礎俸給年額ノ百五十分ノ四十八、十六年以上十七年未滿ナラバ百五十分ノ四十九ノ率ニ依ツテ普通恩給ノ年額ヲ定ムルノデア(改正法附則一一)。

本條第六項中ニ「第五十五條ノ二」ヲ加ヘタノハ傷病年金ヲ受ケタル公務傷病者ガ再任後更ニ公務ノ爲傷病ト爲リ其ノ結果不具癡疾ニ達シ在職年十七年未滿ニテ普通恩給ヲ受クル場合ヲ生ズルカラ其ノ場合ニ給スル普通恩給ノ年額ハ在職年十七年ノ者ニ給スル額ト同ジデア。ルコトヲ定ムル爲デア。

第六十一條 軍人在職年十一年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス  
第六十一條第一項乃至第四項ヲ左ノ如ク改ム  
准士官以上ノ軍人在職年十三年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス  
前項ノ規定ハ第二十一條第二項第一號ノ準軍人在職年十三年以上ニシテ退職シ且其ノ身分ヲ免セラレタル場合ニ付之ヲ準用ス  
第六十一條 准士官以上ノ軍人在職年十三年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス  
前項ノ規定ハ第二十一條第二項第一號ノ準軍人在職年十三年以上ニシテ退職シ且其ノ身分ヲ免セラレタル場合ニ付之ヲ準用ス



ノ階等及其ノ在職年數ニ依リ定メタル別表第一號表ノ金額トス  
 前項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ外國實勤績在職年十五年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤績在職年中十五年ヲ控除シタル殘ノ勤績在職年一年ニ付退職當時ノ軍人ノ階等ニ應シ別表第一號表ノ十一年ノ額ト十二年ノ額トノ差額ノ二分ノ一ニ相當スル金額ヲ之ニ加給ス  
 在職年五十年ヲ超ユル者ニ給スヘキ恩給年額ハ之ヲ在職年五十年トシテ計算ス  
 陸海軍准士官ニシテ其ノ官ニ對スル最高ノ俸給ヲ受ケタル者ニハ高等官八等ノ額ヲ給ス  
 第四十六條、第四十七條又ハ第五十四條第一項第二號若ハ第三號ノ規定ニ依リ在職年十一年未滿ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ在職年十一年

シテ退職シ且其ノ身分ヲ免セラレタル場合ニ付之ヲ準用ス  
 前二項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十三年以上十四年未滿ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二ニ相當スル金額トシ十四年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス  
 前條第三項ノ規定ハ准士官以上ノ軍人ニ付之ヲ準用ス  
 同條第六項ヲ左ノ如ク改ム  
 陸海軍准士官ニシテ其ノ官ニ二年以上實在職シ最高ノ俸給ヲ受ケタル者ニハ高等官八等ノ額ヲ給ス  
 同條第七項中「又ハ第五十四條第一項第二號若ハ第三號」ヲ「第五十四條第一項第二號若ハ第三號又ハ第五十五條ノ二」ニ「十一年」ヲ「十三年」ニ改ム

前二項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十三年以上十四年未滿ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二ニ相當スル金額トシ十四年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス  
 前條第三項ノ規定ハ准士官以上ノ軍人ニ付之ヲ準用ス  
 在職年五十年ヲ超ユル者ニ給スヘキ恩給年額ハ之ヲ在職年五十年トシテ計算ス  
 陸海軍准士官ニシテ其ノ官ニ二年以上實在職シ最高ノ俸給ヲ受ケタル者ニハ高等官八等ノ額ヲ給ス  
 第四十六條、第四十七條、第五十四條第一項第二號若ハ第三號又ハ第五十五條ノ二ノ規定ニ依リ在職年十三年未滿ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ在職年十三年ノ者ニ給スヘキ普通

ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ額トス  
 準軍人ノ階等ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

恩給ノ額トス  
 準軍人ノ階等ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

從來本條ハ凡テノ軍人ニ付テ其ノ普通恩給金額ヲ規定シテ居ツタノデアアルガ、本條改正ノ結果准士官以上ノ軍人ニ付テノミノ普通恩給金額ヲ規定スルモノト爲ツタノデアアル。

本條ノ改正モ前條ノ文官ニ關シテト同ジク、普通恩給ノ爲ノ最短恩給年限ヲ二年延長シタルコトト、從來軍人ノ階等ヲ標準トシテ恩給金額ヲ定メタルモノヲ假定俸給ニ依リ退職前一年ノ俸給額ヲ基礎トシテ恩給金額ヲ算出スルコトニシタルコト(實質上ハ階等ヲ標準トスルト異ラナイガ)トヲ改正ノ内容トスル。年限延長ノ結果ハ准士官以上ノ軍人ハ在職年十三年以上ニ達シテ始メテ普通恩給ヲ受クルコトト爲リ、其ノ十三年ニ於ケル恩給率ハ基礎俸給年額ノ百五十分ノ五十(即三分ノ一)トシ爾後在職年一年ヲ増ス毎ニ百五十分ノ一ヲ加フルモノデアアル。

準軍人中准士官ノ待遇ヲ受クルモノ即チ陸軍ノ見習士官及海軍ノ候補生ハ或場合ニハ其ノ資格ニ於テ獨立ニ普通恩給ヲ受ケ得ル者デアアルガ其レハ准士官ト同ジク在職年十三年以上ニシテ初メテ之レヲ受クルコトヲ得ルノデアアル。

陸海軍准士官トシテ退職シタル者ニ於テモ准士官トシテ二年以上(加算年ヲ除キ)在職シ且准士官ノ



最高俸給ヲ受ケタルコトアル(二年以上タルコトヲ要セヌ)者ニハ高等官八等ノ者ノ假定俸給ニ依リテ普通恩給ヲ給スルノデアアル(VI)。此ノ點ニ關スル規定ノ改正ハ准士官トシテ二年以上在官スルコトヲ要件中ニ加ヘタ點ニ在ル。之レハ一般ノ軍人又ハ文官等ハ二年以上同等ノ地位ニ据置カレタル後ニ非ザレバ一級進ミヲ認メラザルコトト歩調ヲ合セタモノデアアル。此レハ高等官八等ニ進級セザルニモ拘ラズ高等官八等ノ額ヲ給スルノデアツテ、進級シテ始メテ進級ヲ認メラルル他ノ軍人及文官等ニ比較シテ依然有利ノ立場ニ在ルモノト謂ヒ得ル。

准士官以上ノ軍人ニ付テモ經過の規定トシテ(イ)本年九月三十日迄ニ在職年十一年ニ達シタ者及(ロ)本年十月一日ニ於テ待命中ニシテ待命満期ニヨリ在職年十一年以上十三年未滿ニ達スル者(事實上ルベ)ニ付テノ特別規定ガ(改正法附則一、一、一)アル。此ノコトニ關シテハ文官ニ付前條ニ於テ説明シタル所ト同一デアアル。

第七項ニ「第五十五條ノ二」ヲ加ヘタル理由モ前條ニ付テ述ベタル所ニ同ジ。

第六十一條ノ二 下士官以下ノ軍人在職年十二年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス  
前項ノ規定ハ第二十一條第二項第二

號ノ準軍人在職年十二年以上ニシテ退職シ且其ノ身分ヲ免セラレタル場合ニ付之ヲ準用ス  
前二項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十二年以上十三年未滿ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額トシ十三年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ下士官ニ在リテハ七圓、兵ニ在リテハ六圓ヲ加ヘタル金額トス  
第六十條第三項並前條第五項、第七項及第八項ノ規定ハ下士官以下ノ軍人ニ付之ヲ準用ス

號ノ準軍人在職年十二年以上ニシテ退職シ且其ノ身分ヲ免セラレタル場合ニ付之ヲ準用ス  
前二項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十二年以上十三年未滿ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額トシ十三年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ下士官ニ在リテハ七圓、兵ニ在リテハ六圓ヲ加ヘタル金額トス  
第六十條第三項並前條第五項、第七項及第八項ノ規定ハ下士官以下ノ軍人ニ付之ヲ準用ス

本條ハ下士官以下ノ軍人ノ爲ニ其ノ普通恩給年額ヲ定ムル爲ニ新ニ置カレタル條文デアアルガ、其ノ内容ハ現行ノ第六十一條ノ規定中ヨリ下士官以下ノ分ヲ分離シ且其ノ内容ニ改正ヲ加ヘタモノデア

ル。  
第一項ハ下士官兵ノ普通恩給ノ爲ノ最短年限ヲ十二年ト定メタモノデアツテ、現行規定ニ比シテ一年ノ延長デアアル。他ノ公務員ハ一般ニ年限二年ヲ延長シタノニ、下士官兵ノミ一年ノ延長ニ止メタノ



ハ、延長ノ結果ヲ警察監獄職員ノ其レト同ジク十二年ト爲サンガ爲デアル。

第三項ハ普通恩給ノ年額ヲ定ムル規定デアル。在職年十二年ニ對シテハ退職前ノ俸給年額(別表第一定俸)ノ百五十分ノ五十(即三分ノ一)ニ相當スル金額トシ、爾後在職年一年ヲ増ス毎ニ下士官ニ在リテハ定額七圓、兵ニ在リテハ定額六圓ヲ加フルノデアル。下士官ニ在リテノ七圓、兵ニ在リテノ六圓ハ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ヨリハ多額デアル。他ノ公務員ト異ニシテ此ノ定額ヲ加フルコトトシタノハ現行規定タル改正前ノ別表第一號表(軍人ノ普通恩給年額表)ニ存スル下士官兵ノ爲ノ増加率ヲ其ノ儘ニ採用シタル結果デアル。

第二項ハ準軍人中陸海軍ノ學生生徒ニ給スル普通恩給ノ年額ヲ定メタルモノデアル。

第四項ハ外國勤続加給(六〇Ⅱ)、基礎在職年ノ最長限(六二Ⅴ)、在職年十二年未滿ノ者ニ給スル普通恩給年額(六一Ⅶ)、準軍人ノ階等ヲ勅令ヲ以テ定ムルコト(六一Ⅷ)等ニ付テノ規定ノ準用デアル。

下士官兵ニ付テモ、本年九月三十日迄ニ在職年十一年ニ達スル者ノ十月一日以後在職年十二年未滿ニテ退職シタル場合ニ普通恩給ヲ給スルコト、其ノ場合ニ於ケル普通恩給ノ率ハ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ四十九ナルコトノ經過の規定(改正法附則一)、及本年十月一日ニ於テ再服役中ニ在ル下士官ガ其ノ再服役(再現役)期間ノ滿了ニ因リ在職年十一年ニ達スルモノナルトキハ在職年十二年ニ達セザルモ照セラレ度イ。

尙之ニ普通恩給ヲ給スルコト、其ノ場合ニ於ケル普通恩給率ハ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ四十九ナルコトノ經過の規定(改正法附則一二)アルコトハ准士官以上ノ軍人ニ付テ述ベタル所ニ同ジキヲ以テ之ヲ參照セラレ度イ。

第六十二條 教育職員在職年十五年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス

前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十五年以上十六年未滿ニ對シ退職當時ノ俸給年額百五十分ノ五十ニ相當スル金額トシ十五年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス  
前項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ小學校、實業補習學校、幼稚園又ハ盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員トシテノ勤続在職年十五年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤

第六十二條中「十五年」ヲ「十七年」ニ、「十六年」ヲ「十八年」ニ、「退職當時」ヲ「退職前」ニ、「又ハ盲啞學校其ノ他ノ」ヲ「盲學校、聾啞學校又ハ」ニ、「第一項ノ場合ニ於テ」ヲ「第二項ノ場合ニ於テ」ニ、「又ハ第五十四條第一項第二號若ハ第三號」ヲ「第五十四條第一項第二號若ハ第三號又ハ第五十五條ノ二」ニ改ム

第六十二條 教育職員在職年十七年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス

前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十七年以上十八年未滿ニ對シ退職前ノ俸給年額百五十分ノ五十ニ相當スル金額トシ十七年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス  
前項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ小學校、實業補習學校、幼稚園、盲學校、聾啞學校又ハ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員トシテノ勤続在職年十七年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤



續在職年中十五年ヲ控除シタル殘ノ  
勤續在職年一年ニ付退職當時ノ俸給  
年額ノ百五十分ノ一ノ割合ヲ以テ之  
ニ加給ス

第一項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ  
中學校又ハ之ト同等以下ノ程度ノ學  
校ノ教育職員トシテノ勤續在職年十  
五年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤  
續在職年中十五年ヲ控除シタル殘ノ  
勤續在職年一年ニ付退職當時ノ俸給  
年額ノ百五十分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ  
加給ス

前項ノ中學校ト同等以下ノ程度ノ學  
校ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
第四十六條又ハ第五十四條第一項第  
二號若ハ第三號ノ規定ニ依リ在職年  
十五年未滿ノ者ニ給スヘキ普通恩給  
ノ年額ハ在職年十五年ノ者ニ給スヘ  
キ普通恩給ノ額トス  
第六十條第三項及第四項ノ規定ハ教

續在職年中十七年ヲ控除シタル殘ノ  
勤續在職年一年ニ付退職前ノ俸給年  
額ノ百五十分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ  
加給ス

第二項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ  
中學校又ハ之ト同等以下ノ程度ノ學  
校ノ教育職員トシテノ勤續在職年十  
七年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤  
續在職年中十七年ヲ控除シタル殘ノ  
勤續在職年一年ニ付退職前ノ俸給年  
額ノ百五十分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ加  
給ス

前項ノ中學校ト同等以下ノ程度ノ學  
校ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
第四十六條、第五十四條第一項第  
二號若ハ第三號又ハ第五十五條ノ二  
ノ規定ニ依リ在職年十七年未滿ノ者  
ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ在職年  
十七年ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ額  
トス

育職員ニ付之ヲ準用ス  
第四十七條ノ規定ニ依リ準教育職員  
ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ退職當  
時ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相  
當スル金額トス

第六十條第三項及第四項ノ規定ハ教  
育職員ニ付之ヲ準用ス  
第四十七條ノ規定ニ依リ準教育職員  
ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ退職前  
ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相  
當スル金額トス

本條ノ改正ハ第六十條以下前條迄ニ於ケル改正ト同ジク普通恩給ノ爲ノ最短期限ノ延長、基礎俸給  
ノ變更ヲ目的トシ、其ノ他ハ概ネ規定ノ整理タルニ過ギナイ。最短普通恩給年限ノ十五年ヲ十七年ト  
シ、之レニ對シテハ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十(即三分ノ一)ニ相當スル金額ヲ盛ツテ其ノ普通  
恩給年額トシ、爾後在職年一年ヲ増ス毎ニ基礎俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ増シテ行ク  
コトニ付テハ全ク文官ニ付第六十條ニ於テ規定スル所ト異ラナイ。基礎俸給ニ付テモ文官ニ付テ述ベ  
タルガ如ク退職前一年間ノ實俸給ノ合計額ヲ基礎トスル(五九ノ二)。此ノ點ニ於テモ第六十條ニ付テ述  
ベタ所ト同ジデアル。基礎俸給ニ付テノ經過的規定デアル處ノ附則第十條ノ規定ハ教育職員ニ付テ最  
モ多ク其ノ適用ヲ見ルコトト思フ。

尙最短普通恩給年限ヲ延長シタルコトニ伴ヒ初等教員ニ關スル勤續加給ノ規定(第三項)及中等教員ニ



關スル勤績加給ノ規定(第IV項)ニモ自然變動ヲ來スコトト爲リ此ノ加給ハ何レモ繼續在職年十七年以上アル者ニ付其ノ十七年ヲ控除シタル殘ノ在職年一年ニ付夫々退職前ノ俸給ノ百五十分ノ一又ハ三百分ノ一ニ當ル金額ヲ加ヘラルルコトト爲ツタノデアアル。

文字の整理トシテハ先年盲啞學校ガ盲學校、聾啞學校ニ二分セラレタルニ應ジテ、第二項ニ於テ之レヲ盲學校、聾啞學校ト分立セシメテ規定シ、又此等ノ學校ヲ小學校ニ類スル各種學校ノ中ヨリ省キ小學校ニ對立セシムルコトトシタコトニ應ジテ第二項ニ於テ「其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校」ヲ「又ハ小學校ニ類スル各種學校」ト規定シタ。又第四項ノ初ニ於テ「第一項」ヲ「第二項」ニ改メタノハ初ヨリノ誤字ヲ整理シタノニ過ギナイ。又第五項中ニ「第五十五條ノ二」ヲ加ヘタノハ在職年十五年未滿デ而モ普通恩給ヲ給スル場合ガ第五十五條ノ二ニ於テ一ツ増シタカラ其ノ意味ヲ現ハシタノニ過ギナイ。此ノコトニ付テモ既ニ第六十條ニ於テ説明ヲ盡シテオル。

第六十三條 警察監獄職員在職年十年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス  
前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十年以上十一年未滿ニ對シ退職當時ノ俸

第六十三條中「十年」ヲ「十二年」ニ、「十一年」ヲ「十三年」ニ、「退職當時」ヲ「退職前」ニ、「又ハ第五十四條第一項第二號若ハ第三號」ヲ、「第五十四條第一項第二號若ハ第三號又ハ第五

第六十三條 警察監獄職員在職年十二年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス  
前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十二年以上十三年未滿ニ對シ退職前ノ俸

給年額ノ百五十分ノ五十二ニ相當スル

十五條ノ二ニ改ム

金額トシ十年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス

前項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ警察監獄職員トシテノ勤績在職年十年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤績在職年中十年ヲ控除シタル殘ノ勤績在職年一年ニ付退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ加給ス

第四十六條又ハ第五十四條第一項第二號若ハ第三號ノ規定ニ依リ在職年十年未滿ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ在職年十年ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ額トス  
第六十條第三項及第四項ノ規定ハ警察監獄職員ニ付之ヲ準用ス

給年額ノ百五十分ノ五十二ニ相當スル金額トシ十二年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス

前項ノ場合ニ於テ其ノ在職年中ニ警察監獄職員トシテノ勤績在職年十二年以上ノモノヲ含ムトキハ其ノ勤績在職年中十二年ヲ控除シタル殘ノ勤績在職年一年ニ付退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ノ割合ヲ以テ之ニ加給ス

第四十六條、第五十四條第一項第二號若ハ第三號又ハ第五十五條ノ二ノ規定ニ依リ在職年十二年未滿ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ年額ハ在職年十二年ノ者ニ給スヘキ普通恩給ノ額トス  
第六十條第三項及第四項ノ規定ハ警察監獄職員ニ付之ヲ準用ス



本條ノ改正モ亦警察監獄職員ノ最短普通恩給年限ノ延長、基礎俸給ノ變更ノ二者ヲ目的トシテオ  
ル。其ノ最短年限ハ從來ノ十年ヲ十二年ト爲シタノデアリ、基礎俸給ハ「退職當時ノ俸給年額」ヲ「退  
職前ノ俸給年額」(五九ノ二)ニ改メタノデアル。此等ニ付テハ都ベテ文官ニ付テ述ベタル所(六〇)ト同ジ  
デアル(五九ノ二、六)。又第四項ニ「第五十五條ノ二」ヲ加ヘタル理由モ文官ニ付テ述ベタル所ト同ジデ  
アル。

第六十四條 待遇職員在職年十五年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス

第六十四條中「十五年」ヲ「十七年」ニ、「十六年」ヲ「十八年」ニ、「退職當時」ヲ「退職前」ニ改ム

前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十五年以上十六年未滿ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額トシ十五年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス

第六十四條 待遇職員在職年十七年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス

前項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十七年以上十八年未滿ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額トシ十七年以上一年ヲ増ス毎ニ其ノ一年ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額トス

第六十條第三項及第四項並第六十二條第六項ノ規定ハ待遇職員ニ付テ之ヲ準用ス

本條ノ改正モ亦最短普通恩給年限ノ延長ト、基礎俸給ノ變更トヲ目的トシタモノデアアル。最短年限十五年ナルヲ十七年トシ、基礎俸給年額ガ從來「退職當時」モノナリシヲ「退職前」モノトシタコトハ文官ニ於ケルト全ク異ル所ガナイ。退職前ノ俸給年額ノ何タルカハ第五十九條ノ二ニ於テ規定シテアル。

尙本條其レ自分ニ於テハ改正シナイガ本條デ準用スル條文ニ改正ガ加ヘラレタモノトシテハ外國在勤加給ガ外國實動績在職年十八年以上ニシテ始メテ問題ト爲リ得ルコトト爲ツタ點デアアル。尤モ待遇職員ニ付テハ此ノ年數ノ延長ハ實際上何等ノ影響モナイコトト思フ。

第六十四條ノ二 一時恩給ヲ受ケタル後其ノ一時恩給ノ基礎ト爲リタル在職年數一年ヲ二月ニ換算シタル月數内ニ召集其ノ他ノ強制ニ依ラスシテ再就職シタル者ニ普通恩給ヲ給スル場合ニ於テハ當該換算月數ト退職ノ翌月ヨリ再就職ノ月迄ノ月數トノ差月數ヲ一時恩給額算出ノ基礎ト爲リタル俸給月額ノ二分ノ一ニ乗シタル

第六十四條ノ二 一時恩給ヲ受ケタル後其ノ一時恩給ノ基礎ト爲リタル在職年數一年ヲ二月ニ換算シタル月數内ニ召集其ノ他ノ強制ニ依ラスシテ再就職シタル者ニ普通恩給ヲ給スル場合ニ於テハ當該換算月數ト退職ノ翌月ヨリ再就職ノ月迄ノ月數トノ差月數ヲ一時恩給額算出ノ基礎ト爲リタル俸給月額ノ二分ノ一ニ乗シタル



金額ノ十五分ノ一ニ相當スル金額ヲ  
控除シタルモノヲ以テ其ノ普通恩給  
ノ年額トス但シ差月數一月ニ付一時  
恩給額算出ノ基礎ト爲リタル俸給月  
額ノ二分ノ一ノ割合ヲ以テ計算シタ  
ル金額ヲ勅令ノ定ムル時期ニ於テ返  
還シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

金額ノ十五分ノ一ニ相當スル金額ヲ  
控除シタルモノヲ以テ其ノ普通恩給  
ノ年額トス但シ差月數一月ニ付一時  
恩給額算出ノ基礎ト爲リタル俸給月  
額ノ二分ノ一ノ割合ヲ以テ計算シタ  
ル金額ヲ勅令ノ定ムル時期ニ於テ返  
還シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

本條ハ改正法ニ於テ新ニ加ヘタルモノデアツテ、一時恩給受給者ノ再任ノ場合ニ於ケル控除ヲ定メ  
タモノデアアル。本條ノ趣旨ハ一時恩給ヲ受ケタル者が退職後一時恩給ヲ以テ生活シ其ノ一時恩給ニ餘  
剩アル間ニ再ビ公務員トシテ就職シタトキハ其ノ兩就職ガ軍ノ召集等ノ強制ニ依ルモノナラザル限り  
其ノ餘剩分ヲ返還スルカ又ハ其ノ返還スベキ分ヲ將來ノ普通恩給年額ヨリ控除スルカノ何レカノ方法  
ヲ採ルコトトシタノデアアル。以下較々詳説スルコトトスル。

(1)本年十月一日以後ニ退職シ一時恩給ヲ受クルノ權利ヲ生ジタ者ガ其ノ一時恩給ヲ生ムニ至ツタ基礎  
在職年ノ年數ノ二倍ニ當ル月數内ニ再就職シタ場合ニノミ本條ノ規定ハ適用サレルノデアアル。例ヘ  
バ在職年數五年ノ一時恩給ヲ受ケタ者ナラバ十ヶ月内、在職年數十年十ヶ月ノ一時恩給ヲ受ケタ者ナ  
ラバ二十ヶ月内ニ再就職シタ場合ニノミ適用サレル。其ノ十ヶ月又ハ二十ヶ月ヲ經過シテ後ニ再就職

シタ場合ニハ、本條ヲ適用スルコトハナイ。基礎在職年ノ二倍ノ月數内ナリヤ否ヤハ前ノ退職ノ翌月  
ヨリ起算シテ再就職シタ月迄(其ノ月ヲ入レル)ノ月數ヲ算シテ判定スルノデアアル。

右ノ月數内ニ再就職シテモ再就職ガ軍ノ召集ノ如ク強制的ノ場合ニハ此ノ規定ヲ適用シナイ。強制  
的就職トイフノハ法規上強制サレル場合ニ限ルノデ、官廳ニ在ル者ノ個人的都合デ強制スルガ如キ通  
俗ニ謂フ所ノ強イテ就職セシメタ場合ナドハ含マナイ。法文ガ召集「其ノ他」ト規定シタノハ召集ノ形  
式ニ依ラザル就職ヲモ豫想シテノコトデアアルガ、主ニ軍ニ於テ爲サル所デアツテ文官等ニ於テハ  
目下ノ處ハ此ノ様ノコトハナイ。

右期間内ニ強制ニ依ラズシテ再就職シタ場合ニハ、前ノ退職ノ月ノ翌月ヨリ再就職シタ月迄(其ノ  
月ヲ含ム)ノ月數ヨリ基礎在職年ノ年ノ數ニ當ル月數ヲ控除シタ殘ノ月數ヲ、一時恩給ノ基礎ト爲ツタ  
俸給月額(俸給年額ノ十二分ノ一)ニ乗ジタ金額ノ十五分ノ一ヲ、後ニ受クベキ普通恩給年額ヨリ控除  
シテ、以テ恩給年額トスル。從テ扶助料額モ此ノ控除後ノ恩給年額ヲ基準トシテ算出セラレル。此ノ  
殘存一時恩給額ヲ十五分シテ其ノ一分ヲ普通恩給年額ヨリ控除スルハ、普通恩給ノ平均受給年數ガ現  
下ノ所十五年餘ニ當ルカラ、端月數ヲ切捨テ十五年トシ其ノ十五年間ニ分割シテ無利息ヲ以テ返還セ  
シムル趣旨デアアル。併シ十五ヶ年間ニ分割返還セシムルトイフノハ立法上ノ説明デアツテ、法ノ規定



トシテハ殘存分ノ十五分ノ一ニ該ル金額ヲ恩給年額ヨリ減額スルコトデアルカラ、現實ノ普通恩給受給年數ガ何年デアツテモ、控除スル額ハ常ニ殘存一時恩給額ノ十五分ノ一デアル。又其ノ受給者ガ死亡シテ扶助料ト爲ル場合ニ減額サレタ額ガ基準ト爲ルノデアツテ、此ノ點ニ於テ若年受給者ノ停止其ノ他ノ停止トハ異ル。此ノ一部減額ハ已ニ一時恩給ニ依ツテ顧ラレテオル在職年ガ再ビ基礎在職年トシテ通算セラレルカラトイフ理由カラ來テオル。此ノ理由ヲ徹底スレバ其ノ者ノ浪人時期ノ長短ニ拘ラズ一時恩給全部ヲ分割シテ控除スベキデアルガ、退職後ノ收入ナキ生活ノ苦痛ヲ考慮シテ前述ノ如ク一定期ヲ經過シテ後ノ再就職ノ場合ニハ全ク控除ヲ爲サズ又其ノ期間内ニ再就職シタ場合ト雖モ殘存期間分ニ對スル一時恩給ヲ返還セシムルニ止メタノデアル。

例ヘバ退職前ノ俸給月額百圓ノ者ガ在職七年ニシテ退職シタトスレバ其ノ者ノ受クル一時恩給額ハ七百圓デアル、其ノ者ガ退職ノ翌月ヨリ起算シテ四ヶ月目ノ中頃ニ再就職シタトスレバ十四ヶ月ヨリ此ノ四ヶ月ヲ減ジタル殘十ヶ月分ニ對スル一時恩給即チ十ヶ月ヲ俸給月額ノ半額(五十圓)ニ乗ジタル金額五百圓ヲ算出シ、其ノ十五分ノ一即チ三十三圓三十三錢ヲ後ニ受クベキ普通恩給ノ年額(圓位未滿ノ切上ヲ爲サザル)ヨリ控除シ、其ノ額ヲ(圓位未滿ノ切上ヲ爲シテ)普通恩給ノ年額トスルノデア  
ル。

以上ノ原則ニ對スル一ノ例外ガアツテ差月數一月ニ對シ一時恩給ノ基礎ト爲ツタ俸給月額ノ半額ヲ宛テタ金額(前項ノ例デ云ヘバ五百圓)ヲ勅令ノ定ムル時期即チ再就職ノ月ノ翌月ヨリ一年内ニ一時ニ又ハ分割シテ返還シタトキハ此ノ恩給額控除ヲ爲サナイ。併シ實際上大抵ノ場合ニ於テ普通恩給年額ヨリ控除ヲ受ケル方法ノ方ガ受給者ニハ利益デアルカラ一時ニ返還ヲ爲ス者ハナカラウ。返還ヲ受クベキ主體ハ一時恩給ノ給與者デアリ、年額ノ控除ヲ受クベキ普通恩給ノ給與主體トハ異ル場合ガアルケレドモ、其ノ場合デモ一時恩給ノ殘額ハ之レヲ一時恩給ノ給與者ニ返還スベキデアル。返還ノ手續ハ別ニ大藏省令(昭和八年九月二十七日大藏省令第二十五號「一時恩給受給者再就職ノ場合恩給法施行令第三十條ノ二ノ規定ニ依ル一時恩給返還等ニ關スル取扱規程」)デ之ヲ定メテオル。(詳細手續ハ附録トシテ添附スル同令ヲ參照セラレ度シ。)

返還ハ之ヲ完了シタトキニ返還トシテノ恩給法上ノ效力ヲ生ズルノデ之ヲ完了シナイトキハ部分的效力モ生ズル様ナコトハナイ。隨テ未完了ノ場合ニハ本條ノ規定ニ從ツテ其ノ恩給額ハ控除サレル。規定ニ從ツテ一時恩給ヲ全部又ハ一部返還シテ後ニ再在職ヲ失格原因ナシニ退職(又ハ死亡)シタトキニ在職年數ノ不足等ニ依ツテ普通恩給(死亡シタ場合ニハ扶助料)ヲ受クルノ權利ヲ生ジナイ場合ニハ、既ニ返還シタル一時恩給ノ還付ヲ請求スルコトガ出來ル。本人ガ死亡シタ場合ナラバ遺族ヨリ之ヲ爲シ得ルモノト解スベキデアル。還付申請ノ手續ハ前掲ノ大藏省令ガ之ヲ定メテ居ル。再在職退職



(又ハ死亡)ニ因リテ普通恩給(又ハ扶助料)ヲ受クルノ権利ヲ生ズル場合ナラバ、返還スベキ分タル一時恩給ノ一部ヲ返還シタニ過ギナイ者ハ其ノ返還額ノ還付ヲ請求スルコトハ出來ヌ。其レハ一時恩給殘部ノ未返還ガ本人ノ意思ニ基クト基カザルトヲ問ハナイ。例ヘバ再在職ニ依ツテ在職年ガ十七年以上ニ達シタルモ返還スベキ一時恩給ハ未ダ其ノ一部シカ返還シナイトイフ時ニ本人ガ休職満期デ退職シタトカ、廢廳ニ依ツテ退職シタトカ、又死亡シタトカ云フ場合デモ返還ハシナイ。而モ返還ハ完了シナイノデアアルカラ普通恩給額ハ控除ヲ受ケル。又一旦返還シタ一時恩給ノ還付ヲ受ケタトキハ返還ハ初ヨリ爲サナカツタコトト爲ルノデアアルカラ、三度目ノ在職ヲ爲シテ恩給年限ニ達スル様ノ場合ニモ最早返還ヲ爲シテ普通恩給年額ノ減額ヲ免ルルノ途ハナイノガ通常デアアル。

唯注意スベキハ再就職後一時恩給ノ返還ヲ始メ法定期間タル一年内ニ未ダ之ヲ完了セザルニ早クモ退職シ(又ハ死亡シ)、而モ普通恩給權(又ハ扶助料權)ヲ生ズル場合ニハ、退職ニ際シ(死亡ノトキハ遺族ヨリ死亡後直チニ)殘額ヲ拂込ミテ返還ヲ完了スルコトガ出來ルコトデアアル(前掲大藏省令四)。此ノ完了ノ爲ノ追完拂込ハ法律上強制セラルル所デハナイガ、之ヲ追完セネバ普通恩給額ガ減額セラルルコトハ勿論デアアル。

本人死亡ノ場合ニ於ケル返還ヲ追完シ又ハ返還金ノ還付ヲ請求シ得ル遺族ノ誰ナルベキカニ付テハ

恩給法施行令又ハ前掲大藏省令ニ直接ノ明文の規定ハナイケレドモ、追完ハ遺族全體ノ利益ノ爲ニ爲サルベキモノデアアルカラ、何レノ遺族モ之ヲ爲シ得ルモノト解スベク、又還付請求ハ一時恩給ノ代位物ノ請求ト見ルコトヲ得ルカラ、扶助料請求ノ順位ニ依ツテ遺族ガ之ヲ爲シ得ルモノト解サネバナラヌ(恩給法一〇、施行令一ノ五参照)。

本條ノ規定ハ本年十月一日以後ニ退職シテ一時恩給ヲ受ケタ場合ノミニ付テ之レヲ適用スル。其レ以前一時恩給ヲ受クベキ事由ヲ生ジタ者ガ改正法施行(十月一日)以後、再就職シテ退職シ普通恩給權ヲ生ジタ場合ニモ此ノ規定ハ適用セラレナイ(改正法附則一三)。

第六十五條 公務員ノ増加恩給ノ年額ハ退職當時ノ階等、傷病ノ原因及不具癡疾ノ程度ニ依リ定メタル別表第二號表ノ金額トス  
前項ノ規定ハ公務員ニ準スヘキ者ニ給スヘキ増加恩給ノ年額ニ付之ヲ準用ス

第六十五條ノ二 公務員ノ傷病年金ノ年額ハ退職當時ノ階等、傷病ノ

第六十五條ノ二 公務員ノ傷病年金ノ年額ハ退職當時ノ階等、傷病ノ原因



原因及傷病ノ程度ニ依リ定メタル別表第三號表ノ金額トス  
前項ノ規定ハ公務員ニ準スヘキ者ニ給スヘキ傷病年金ノ年額ニ付之ヲ準用ス

及傷病ノ程度ニ依リ定メタル別表第三號表ノ金額トス  
前項ノ規定ハ公務員ニ準スヘキ者ニ給スヘキ傷病年金ノ年額ニ付之ヲ準用ス

本條ハ傷病年金ノ金額ガ新別表第三號表ニ依リテ定メラルルコトヲ定メタルモノデアアル。別表第三號表ノ内容ニ付テハ同表ノ説明ニ讓ル。

第六十六條 下士以下ノ軍人公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ不具癱疾ノ程度ニ至ラサルモ之カ爲退職シ又ハ退職後一年内ニ之カ爲一種以上ノ兵役ヲ免セラレタルトキハ之ニ傷病賜金ヲ給ス

第六十六條中「下士」ヲ「下士官」ニ、「不具癱疾」ノ程度ニ至ラサルモ」ヲ「傷病年金ヲ給セラルル」ノ程度ニ至ラサルモ」ニ、「第三號表」ヲ「第四號表」ニ改ム

第六十六條 下士官以下ノ軍人公務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ傷病年金ヲ給セラルルノ程度ニ至ラサルモ之カ爲退職シ又ハ退職後一年内ニ之カ爲一種以上ノ兵役ヲ免セラレタルトキハ之ニ傷病賜金ヲ給ス

傷病賜金ハ之ヲ普通恩給又ハ一時恩給ト併給スルヲ妨ケス  
傷病賜金ノ額ハ退職當時ノ階等並傷病ノ原因及程度ニ依リ定メタル別表第三號表ノ金額トス

傷病賜金ハ之ヲ普通恩給又ハ一時恩給ト併給スルヲ妨ケス  
傷病賜金ノ額ハ退職當時ノ階等並傷病ノ原因及程度ニ依リ定メタル別表第四號表ノ金額トス

前項ノ傷病ノ程度ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

前項ノ傷病ノ程度ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

本條ノ改正中「下士」ヲ「下士官」ニ改メタノハ軍ニ於テ稱呼ヲ更ヘタルニ合セシムル爲デアリ、「不具癱疾」ノ程度」ヲ「傷病年金ヲ給セラルル程度」ニ改メタノハ從來不具癱疾程下ノ傷病ニ對シテ傷病賜金ヲ給與シタノヲ其ノ中ノ上位ノモノニ傷病年金ヲ給與スルコトトシ、傷病賜金ハ其レニ及バヌ傷病ニ對シテ給與スルコトニシタ爲デアアル。

又第三號表ヲ第四號表トシタノハ從來ノ第三號表ノ内容ヲ第四號表ニ移シタ結果デアアル。

傷病賜金ヲ給スベキ傷病ノ程度ハ從來ノ傷病賜金ニ付テ定メラレタル傷病ノ程度第五款乃至第十款ニ當ルモノデアツテ恩給法施行令第三十一條ニ第一目乃至第六目トシテ規定セラレテオル(附錄恩給法ノ施行令參照)

第六十七條 文官在職年一年以上十五年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス  
前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職當時ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年ノ年數ヲ乘シタル金額トス

第六十七條 文官、教育職員又ハ待遇職員在職年三年以上十七年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス  
前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職前ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年

第六十七條 文官、教育職員又ハ待遇職員在職年三年以上十七年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス  
前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職前ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年ノ年



本條ノ改正法文ハ文官、教育職員及待遇職員ニ付テ一時恩給ノ要件及金額ヲ定メタモノデアル。其ノ要件ハ在職年三年以上十七年未滿ニシテ退職シタルコトデアル。其ノ在職ハ繼續シタモノノミデアツテ繼續セザル三年未滿ノ在職ノ年月數ヲ通算スルコトハナイ(改正法)。

一時恩給ノ金額ハ退職前ノ俸給月額ノ十二分ノ一ニ在職年ノ年數ヲ乘ジタモノデアル。例ヘバ在職年五年ノ者ナラバ退職前ノ俸給月額ニ五ヲ乘ジタ金額デアル。此ノ場合ニ於テ五年ヨリ三年ヲ減ズル様ナコトハナイ。三年以上ノ在職トイフコトハ要件デハアルガ、三年迄ヲ無價値トスルトイフ意味デハナイ。

第六十八條 下士以上ノ軍人在職年十一年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス但シ下士以上トシテノ在職年一年未滿ナルトキハ此ノ限ニ在ラス  
前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職當時ノ階等及在職年ノ年數ニ依リ定メタル別表第四號表ノ金額トス

第六十八條第一項中「下士以上ノ軍人在職年十一年未滿」ヲ「准士官以上ノ軍人在職年三年以上十三年未滿」ニシテ又ハ下士官在職年三年以上十二年未滿ニシテ「下士以上トシテ」ヲ「下士官以上トシテ」ニ改ム  
同條第二項ヲ左ノ如ク改ム  
前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職前ノ

第六十八條 准士官以上ノ軍人在職年三年以上十三年未滿ニシテ又ハ下士官在職年三年以上十二年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス但シ下士官以上トシテノ在職年一年未滿ナルトキハ此ノ限ニ在ラス  
前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職前ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年ノ

俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年ノ年數ヲ乘シタル金額トス

數ヲ乘シタル金額トス

本條ハ判任官以上ノ軍人ニ付テ一時恩給ノ要件ト其ノ金額トヲ定メタモノデアル。即チ繼續在職年三年以上デアツテ、准士官以上ハ在職年十三年未滿、下士官ハ十二年未滿デ退職シタトキニ之ヲ給スルノデアル。准士官以上トシテ在職年十三年未滿デ退職シタトキニモ下士官トシテ在職年十二年ニ達シタ者ニハ准士官以上トシテ退職シタ時ニ普通恩給ヲ給與スルモノデアルコトハ前ニ(二六・二)述ベタ通りデアアルカラ此ノ場合ニハ一時恩給ハ給與シナイ。  
一時恩給ノ金額ハ退職前ノ俸給月額(假定俸給ニ依ル退職前ノ俸給年額ノ十二分ノ一)ニ在職年ノ年數ヲ乘ジタモノデアル。從來別表第四號表デ具體的金額ヲ示シテオツタノヲ改正法ニ於テハ計算ノ基準ヲ示スニ止メタノデアル。

第六十九條 教育職員在職年一年以上十五年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス  
前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職當時ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年ノ年數ヲ乘シタル金額トス

第六十九條 削除

第六十九條 削除



本條ヲ削除シタノハ其ノ内容ヲ文官等ト同一ニ改正シテ之ヲ第六十七條中ニ移シタカラデアル。

第七十條 警察監獄職員在職年一年以上十年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス

第七十條中「一年」ヲ「三年」ニ、「十年」ヲ「十二年」ニ、「退職當時」ヲ「退職前」ニ改ム

前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職當時ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年ノ年數ヲ乘シタル金額トス

第七十條 警察監獄職員在職年三年以上十二年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス  
前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職前ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年ノ年數ヲ乘シタル金額トス

本條ハ警察監獄職員ノ一時恩給ノ要件及其ノ金額ヲ定メテ居ルノデアアルガ、改正法ハ其ノ要件ヲ變更シテ、繼續在職年(加算年ヲ含ム)三年以上十二年未滿ニテ退職シタコトヲ要ストシタ。其ノ金額ハ退職當時ノ俸給月額(退職前ノ俸給年額ノ十二分ノ一)ニ在職年ノ年數ヲ乘ジタモノデアアル。

第七十一條 待遇職員在職年一年以上十五年未滿ニシテ退職シタルトキハ之ニ一時恩給ヲ給ス

第七十一條 削除

第七十一條 削除

前項ノ一時恩給ノ金額ハ退職當時ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ在職年ノ年數ヲ乘シタル金額トス

本條ヲ削除シタノハ第六十九條ヲ削除シタノト同ジク第六十七條中ニ移シ規定シタ爲デアアル。

第三章 遺族

第七十二條 本法ニ於テ遺族トハ公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ祖父、祖母、父、母、夫、妻、子及兄弟姉妹ニシテ公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ死亡ノ當時之ト同一戸籍内ニ在ルモノヲ謂フ

公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ死亡ノ當時胎兒タル子出生シタルトキハ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ死亡ノ當時其ノ戸籍内ニ在リタルモノト看做ス

第七十三條 公務員又ハ之ニ準スヘキ者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ遺族ニハ妻、未成年ノ子、夫、父、母、成年ノ子、祖父、祖母ノ順位ニ依リ之ニ扶助料ヲ給ス

一 在職中死亡シ其ノ死亡ヲ退職ト看做ストキハ之ニ普通恩給ヲ給ス  
ヘキトキ

第三章 遺族

第七十二條 本法ニ於テ遺族トハ公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ祖父、祖母、父、母、夫、妻、子及兄弟姉妹ニシテ公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ死亡ノ當時之ト同一戸籍内ニ在ルモノヲ謂フ

公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ死亡ノ當時胎兒タル子出生シタルトキハ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ公務員又ハ之ニ準スヘキ者ノ死亡ノ當時其ノ戸籍内ニ在リタルモノト看做ス

第七十三條 公務員又ハ之ニ準スヘキ者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ遺族ニハ妻、未成年ノ子、夫、父、母、成年ノ子、祖父、祖母ノ順位ニ依リ之ニ扶助料ヲ給ス

一 在職中死亡シ其ノ死亡ヲ退職ト看做ストキハ之ニ普通恩給ヲ給ス  
ヘキトキ



二 普通恩給ヲ給セララルル者死亡シタルトキ

前項ノ規定ニ依ル同順位ノ子數人アルトキハ公務員又ハ之ニ準スヘキ者ヲ被相續人トシタル家督相續ノ順位ニ準シ之ヲ定ム

父母ニ付テハ養父母ヲ先ニシ實父母ヲ後ニス祖父母ニ付テハ養父母ノ父母ヲ先ニシ實父母ノ父母ヲ後ニシ父母ノ養父母ヲ先ニシ實父母ヲ後ニス

先順位者タルヘキ者後順位者タル者ヨリ後ニ生スルニ至リタルトキハ前三項ノ規定ハ當該後順位者失權シタル後ニ限り之ヲ適用ス

第七十四條 未成年ノ子ハ未タ婚姻セサルトキニ限り之ニ扶助料ヲ給ス夫又ハ成年ノ子ハ不具癡疾ニシテ生活資料ヲ得ルノ途ナク且之ヲ扶養スル者ナキトキニ限り之ニ扶助料ヲ給

二 普通恩給ヲ給セララルル者死亡シタルトキ

前項ノ規定ニ依ル同順位ノ子數人アルトキハ公務員又ハ之ニ準スヘキ者ヲ被相續人トシタル家督相續ノ順位ニ準シ之ヲ定ム

父母ニ付テハ養父母ヲ先ニシ實父母ヲ後ニス祖父母ニ付テハ養父母ノ父母ヲ先ニシ實父母ノ父母ヲ後ニシ父母ノ養父母ヲ先ニシ實父母ヲ後ニス

先順位者タルヘキ者後順位者タル者ヨリ後ニ生スルニ至リタルトキハ前三項ノ規定ハ當該後順位者失權シタル後ニ限り之ヲ適用ス

第七十四條 未成年ノ子ハ未タ婚姻セサルトキニ限り之ニ扶助料ヲ給ス夫又ハ成年ノ子ハ不具癡疾ニシテ生活資料ヲ得ルノ途ナク且之ヲ扶養スル者ナキトキニ限り之ニ扶助料ヲ給

ス

養子ハ公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ家督相續人タルトキ又ハ公務員若ハ之ニ準スヘキ者カ家督相續人ニシテ之ヲ戸主ト看做ストキハ其ノ死亡ノ時ニ於テ其ノ家督相續人タルヘキ者ニ限り之ニ扶助料ヲ給ス前項ノ家督相續人ニハ之ニ準スヘキ者ヲ包含ス

第七十五條 扶助料ノ年額ハ左ノ各號ニ依ル

- 一 公務員又ハ之ニ準スヘキ者戰闘又ハ戰闘ニ準スヘキ公務員ニ因ル傷痍疾病ノ爲死亡シタルトキハ其ノ普通恩給年額ノ全額
- 二 公務員又ハ之ニ準スヘキ者普通公務員ニ因ル傷痍疾病ノ爲死亡シタルトキハ其ノ普通恩給年額ノ十分ノ八ニ相當スル金額
- 三 其ノ他ノ場合ニ於テハ公務員又

ス

養子ハ公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ家督相續人タルトキ又ハ公務員若ハ之ニ準スヘキ者カ家督相續人ニシテ之ヲ戸主ト看做ストキハ其ノ死亡ノ時ニ於テ其ノ家督相續人タルヘキ者ニ限り之ニ扶助料ヲ給ス前項ノ家督相續人ニハ之ニ準スヘキ者ヲ包含ス

第七十五條 扶助料ノ年額ハ左ノ各號ニ依ル

- 一 公務員又ハ之ニ準スヘキ者戰闘又ハ戰闘ニ準スヘキ公務員ニ因ル傷痍疾病ノ爲死亡シタルトキハ其ノ普通恩給年額ノ全額
- 二 公務員又ハ之ニ準スヘキ者普通公務員ニ因ル傷痍疾病ノ爲死亡シタルトキハ其ノ普通恩給年額ノ十分ノ八ニ相當スル金額
- 三 其ノ他ノ場合ニ於テハ公務員又



ハ之ニ準スヘキ者ニ給セラルル普通  
通恩給年額ノ十分ノ五ニ相當スル  
金額

ハ之ニ準スヘキ者ニ給セラルル普通  
通恩給年額ノ十分ノ五ニ相當スル  
金額

前項第一號又ハ第二號ニ規定スル場  
合及増加恩給ヲ併給セラルル者ノ死  
亡シタル場合ニハ其ノ死亡ノ月ノ翌  
月ヨリ五年間ハ前項ノ規定ニ依ル扶  
助料ノ年額ニ各其ノ十分ノ三ニ相當  
スル金額ヲ加給ス

本條中ノ改正ハ所謂特殊扶助料ノ増額ヲ目的トシタモノデアアル。即チ公務員ガ公務ニ起因シテ死亡シタル場合ノ扶助料トニハ、共ニ一般原則ニ依ツテ算出サレル扶助料額ニ各其ノ三割ヲ公務員死亡ノ時ヨリ五年間増給スルノデアアル。此ノ増給期間ハ公務員死亡ノ時、正確ニ謂ヘバ死亡ノ月ノ翌月ヨリ滿五年間デアツテ、其ノ期間ハ延長サレルコトハナイシ又其ノ期間内ニ扶助料權者ノ間ニ轉給關係ガ生ジテモ生ジナクテモ變リハナイ。此ノ増給ノ結果ハ戰鬪又ハ準戰鬪ニテ死亡シタル者ノ遺族ノ扶助料年額ハ普通恩給年額ノ十分ノ十三ニ該リ、普通公務ニ起因シテ死亡シタル者ノ遺族ノ扶助料年額ハ普通恩給年額ノ十分ノ一〇・〇四ニ該リ増加恩給受給者ニシテ平病ニテ死亡シタルモノノ遺族ノ扶助料年額ハ普通恩給年額ノ十分ノ

六・五ニ該ル。

右ノ加給ハ公務員ガ改正法施行(即本年十月一日)以後ニ死亡シタル場合ハ勿論、其ノ施行前ニ死亡シタル場合デモ本年十月一日迄ニ既ニ五年ヲ經過セザルモノニ付テハ之ヲ給與スル、此ノ二個ノ場合ノ中後ノ場合ニ於テハ五年間ヨリ本年十月一日迄ニ經過シタル期間(一個月計算ニ依ル)ヲ控除シ其ノ殘存年分ニ付テ丈加給ヲ爲スノデアアル(改正法附則一四)。例ヘバ昭和六年九月中ニ死亡シタルトキハ扶助料ノ給與ハ同年十月分ヨリ之ヲ開始シタルデアアルガ、本年十月一日迄(十月ヲ含マズ)ニハ二年ヲ經過シテオルノデアアルカラ改正法律施行後ノ殘存年月即チ三年間丈加給ヲ爲スノデアアル。

第七十六條 公務員又ハ之ニ準スヘキ

者ノ死亡後遺族左ノ各號ノ一ニ該當  
スルトキハ扶助料ヲ受クルノ資格ヲ  
失フ

- 一 子婚姻シ又ハ其ノ家ヲ去リタルトキ但シ父ノ屬シタル家ヨリ分家シ又ハ公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ妻若ハ子ニシテ分家スルモノニ伴ヒ其ノ家ニ入りタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第七十六條 公務員又ハ之ニ準スヘキ

者ノ死亡後遺族左ノ各號ノ一ニ該當  
スルトキハ扶助料ヲ受クルノ資格ヲ  
失フ

- 一 子婚姻シ又ハ其ノ家ヲ去リタルトキ但シ父ノ屬シタル家ヨリ分家シ又ハ公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ妻若ハ子ニシテ分家スルモノニ伴ヒ其ノ家ニ入りタルトキハ此ノ限ニ在ラス



二 公務員又ハ之ニ準スヘキ者女子ナル場合ニ於テ夫婚姻シ又ハ家ヲ去リタルトキ

三 父、母、祖父又ハ祖母其ノ家ヲ去リタルトキ

第七十七條 扶助料ヲ受クル者六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキハ其ノ月ノ翌月ヨリ其ノ刑ノ執行ヲ終リ又ハ其ノ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄扶助料ヲ停止ス但シ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタルトキハ扶助料ハ之ヲ停止セス其ノ言渡ヲ取消サレタルトキハ取消ノ月ノ翌月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄之ヲ停止ス  
前項ノ規定ハ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ刑ノ執行中又ハ其ノ執行前ニ在ル者ニ扶助料ヲ給スヘキ事由發生シタル場合ニ付之ヲ準用ス

第七十七條第一項中「六年未滿」ヲ「二年以下」ニ改ム

二 公務員又ハ之ニ準スヘキ者女子ナル場合ニ於テ夫婚姻シ又ハ家ヲ去リタルトキ

三 父、母、祖父又ハ祖母其ノ家ヲ去リタルトキ

第七十七條 扶助料ヲ受クル者二年以下ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキハ其ノ月ノ翌月ヨリ其ノ刑ノ執行ヲ終リ又ハ其ノ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄扶助料ヲ停止ス但シ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケタルトキハ扶助料ハ之ヲ停止セス其ノ言渡ヲ取消サレタルトキハ取消ノ月ノ翌月ヨリ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至リタル月迄之ヲ停止ス  
前項ノ規定ハ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ刑ノ執行中又ハ其ノ執行前ニ在ル者ニ扶助料ヲ給スヘキ事由發生シタル場合ニ付之ヲ準用ス

本條中ノ改正ハ、第九條ノ改正規定ニ於テ二年ヲ超ユル禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキハ全ク失權スルコトト爲シタルニ對應シ、從來六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキニハ失權セズニ刑期中給與ヲ停止スルトシテ居タノヲ二年以下ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキニ停止スルモノト爲シタルノデアアル。

第七十八條 扶助料ヲ給セラルヘキ者一年以上所在不明ナルトキハ次順位者ノ申請ニ依リ裁定官廳ハ所在不明中扶助料ノ停止ヲ命スルコトヲ得  
第七十九條 前二條ノ扶助料停止ノ事由アル場合ニ次順位者アルトキハ停止期間中扶助料ハ之ヲ當該次順位者ニ轉給ス

第八十條 遺族左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ扶助料ヲ受クル權利ヲ失フ  
一 其ノ家ヲ去リタルトキ但シ妻夫ノ屬シタル家ヨリ分家シ又ハ遺族タル子ニシテ分家スルモノニ伴ヒ

第八十條ニ左ノ二項ヲ加フ  
届出ヲ爲ササルモ事實上婚姻關係ト同様ノ事情ニ入りタリト認めラ  
ル遺族ニ付テハ裁定官廳ハ恩給審査會ニ諮問ノ上其ノ者ノ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ失ハシムルコト

第七十八條 扶助料ヲ給セラルヘキ者一年以上所在不明ナルトキハ次順位者ノ申請ニ依リ裁定官廳ハ所在不明中扶助料ノ停止ヲ命スルコトヲ得  
第七十九條 前二條ノ扶助料停止ノ事由アル場合ニ次順位者アルトキハ停止期間中扶助料ハ之ヲ當該次順位者ニ轉給ス

第八十條 遺族左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ失フ  
一 其ノ家ヲ去リタルトキ但シ妻夫ノ屬シタル家ヨリ分家シ又ハ遺族タル子ニシテ分家スルモノニ伴ヒ



其ノ家ニ入リタルトキ及子父ノ屬シタル家ヨリ分家シ又ハ公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ妻若ハ子ニシテ分家スルモノニ伴ヒ其ノ家ニ入リタルトキハ此ノ限ニ在ラス

二 妻、子又ハ夫婦婚姻シタルトキ

三 不具癡疾ニシテ生活資料ヲ得ルノ途ナク且之ヲ扶養スル者ナキ夫又ハ成年ノ子ニ付其ノ事情止ミタルトキ

ヲ得  
裁定官廳ハ前項ニ規定スル事情ヲ調査スル爲必要アルトキハ他ノ官廳又ハ公署ノ援助ヲ求ムルコトヲ得

其ノ家ニ入リタルトキ及子父ノ屬シタル家ヨリ分家シ又ハ公務員若ハ之ニ準スヘキ者ノ妻若ハ子ニシテ分家スルモノニ伴ヒ其ノ家ニ入リタルトキハ此ノ限ニ在ラス

二 妻、子又ハ夫婦婚姻シタルトキ

三 不具癡疾ニシテ生活資料ヲ得ルノ途ナク且之ヲ扶養スル者ナキ夫又ハ成年ノ子ニ付其ノ事情止ミタルトキ

届出ヲ爲ササルモ事實上婚姻關係ト同様ノ事情ニ入リタリト認メラル遺族ニ付テハ裁定官廳ハ恩給審査會ニ諮問ノ上其ノ者ノ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ失ハシムルコトヲ得

裁定官廳ハ前項ニ規定スル事情ヲ調査スル爲必要アルトキハ他ノ官廳又ハ公署ノ援助ヲ求ムルコトヲ得

遺族中ニハ婚姻ニ因ツテ扶助料權ヲ失フベキ者ガ少クナイ。然ルニ之レヲ免ル爲ニ戸籍上ノ手續ヲ

セズニ所謂内縁關係ヲ結ンデ居ル者ガ少クナイ。本條ハ斯ル遺族ニ付テハ裁定官廳ハ處分ニ依リ扶助料權ヲ失權セシムルコトヲ得ルコトヲ規定シタモノデアアル。此ノ失權ハ裁定官廳ノ處分ヲ俟ツテ初メテ生ズルノデアツテ、内縁關係アリトイフコト丈當然失權ヲ來スモノデハナイ。裁定官廳ハ其ノ裁量ヲ以テ失權セシムルヤ否ヤヲ決定スルノデアアル。併シ裁定官廳ガ此ノ失權處分ヲ爲サントスルトキハ必ず恩給審査會ニ諮問ノ上デ爲サネバナラヌ、之レヲ缺クトキハ處分ハ違法デアツテ無効ト謂ハネバナラヌ。

内縁關係ノ何デアアルカハ甚ダ表明シ難イ處デハアルガ其ノ實體ノ何デアアルカハ比較的容易ニ認識シ得ル所デアアル。此ノ失權處分ガ内縁關係ナキニ係ラズ爲サレタリトスル場合ニハ之ニ對シ恩給局長ニ具申シ更ニ行政裁判所ニ出訴スルコトモ出來ル(一三)。

法文ニ「入リタルトキ」トイフ中ニハ「入ツテオルトキ」ヲ含ム意味デアアル。故ニ改正法施行前ヨリ内縁關係ニ入ツテオル者デモ改正法施行後引續イテ同様ノ關係ニ在ルトキハ裁定官廳ハ失權處分ヲ爲スコトガ出來ル。併シ乍ラ處分前殊ニ改正法施行前ニ既ニ内縁關係ガ消滅シテ居ル様ナモノニ溯及シテ失權處分ヲ爲スベキデハナイ。

此レニ付テハ特別ノ經過の規定ハナイノデアアルカラ、改正法施行前ニ發生シタ扶助料權ニ付テモ若



シ失權セシムル事情ガ改正法施行後ニ於テ存スルトキハ此ノ處分ヲ爲シ得ルコトハ言フ迄モナイ處デア  
アル。

第八十一條 公務員又ハ之ニ準スヘキ者第七十三條第一項各號ノ一ニ該當シ兄弟姉妹以外ニ扶助料ヲ受クル者ナキトキハ其ノ兄弟姉妹未成年又ハ不具癡疾ニシテ生活資料ヲ得ルノ途ナク且之ヲ扶養スル者ナキ場合ニ限リ之ニ一時扶助料ヲ給ス  
前項ノ一時扶助料ノ金額ハ兄弟姉妹ノ人員ニ拘ラス扶助料年額ノ一年分乃至五年分ニ相當スル金額トス

第八十二條 文官、教育職員若ハ待遇職員在職年一年以上十五年未滿ニシテ在職中死亡シ又ハ警察監獄職員在職年一年以上十年未滿ニシテ在職中死亡シタル場合ニハ其ノ遺族ニ一時扶助料ヲ給ス  
前項ノ一時扶助料ノ金額ハ公務員ノ

第八十二條第一項ヲ左ノ如ク改ム

文官、教育職員又ハ待遇職員在職年三年以上十七年未滿、准士官以上ノ軍人在職年三年以上十三年未滿、下士官タル軍人又ハ警察監獄職員在職年三年以上十二年未滿ニシテ在職中死亡シタル場合ニハ其

第八十一條 公務員又ハ之ニ準スヘキ者第七十三條第一項各號ノ一ニ該當シ兄弟姉妹以外ニ扶助料ヲ受クル者ナキトキハ其ノ兄弟姉妹未成年又ハ不具癡疾ニシテ生活資料ヲ得ルノ途ナク且之ヲ扶養スル者ナキ場合ニ限リ之ニ一時扶助料ヲ給ス  
前項ノ一時扶助料ノ金額ハ兄弟姉妹ノ人員ニ拘ラス扶助料年額ノ一年分乃至五年分ニ相當スル金額トス

第八十二條 文官、教育職員又ハ待遇職員在職年三年以上十七年未滿、准士官以上ノ軍人在職年三年以上十三年未滿、下士官タル軍人又ハ警察監獄職員在職年三年以上十二年未滿ニシテ在職中死亡シタル場合ニハ其ノ遺族ニ一時扶助料ヲ給ス

死亡ノ當時ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ其ノ公務員ノ在職年ノ年數ヲ乗シタル金額トス  
下士以上ノ軍人在職年一年以上十一年未滿ニシテ在職中死亡シタル場合ニハ其ノ遺族ニ一時扶助料ヲ給ス  
前項ノ一時扶助料ノ金額ハ死亡者ノ階等及在職年ノ年數ニ依リ定メタル別表第四號表ノ金額トス

ノ遺族ニ一時扶助料ヲ給ス  
同條第二項中「死亡ノ當時」ヲ「死亡前」ニ改ム  
同條第三項及第四項ヲ削リ同條ニ左ノ二項ヲ加フ  
第五十九條ノ二第五項ノ規定ハ死亡前ノ俸給月額ニ付之ヲ準用ス  
第七十三條中遺族ノ順位ニ關スル規定及第七十四條ノ規定ハ第一項ノ扶助料ヲ給スル場合ニ付之ヲ準用ス

前項ノ一時扶助料ノ金額ハ公務員ノ死亡前ノ俸給月額ニ相當スル金額ニ其ノ公務員ノ在職年ノ年數ヲ乗シタル金額トス  
第五十九條ノ二第五項ノ規定ハ死亡前ノ俸給月額ニ付之ヲ準用ス  
第七十三條中遺族ノ順位ニ關スル規定及第七十四條ノ規定ハ第一項ノ扶助料ヲ給スル場合ニ付之ヲ準用ス

本條第一項ノ改正ハ一時扶助料ニ付テモ、死亡公務員ノ在職年ガ三年以上ナルコトヲ要件トシタルコトト又其ノ最長在職年ガ普通恩給ノ最短恩給年限ノ延長ニ伴ヒ伸長サレタコトトノ二ツデアアル。  
本條第二項ノ改正ハ一時扶助料ノ爲ノ基礎俸給ガ從來公務員「死亡當時ノ俸給月額」デアツタノヲ「死亡前ノ俸給月額」ニ改メタノデアアル。死亡前ノ俸給月額ハ退職前ノ俸給月額ニ對應スルモノデアツテ退職前ノ俸給年額ノ十二分ノ一ニ相當スルモノデアアル(改正第三項)。

第三項及第四項ヲ削ツタノハ第三項ノ内容ハ第一項中ニ規定セラレ、第四項ノ内容ハ第二項ノ規定



デ自然解決ガ付クコトト爲ツタカラデアアル。

新ニ加ヘタ第三項ハ「退職前ノ俸給月額トハ退職前一年内ノ俸給年額ノ十二分ノ一」ヲ謂フモノデア  
ルトイフ規定ヲ死亡前ノ俸給月額ニ準用シタモノデアツテ、其ノ結果死亡前ノ俸給月額トハ死亡ヲ退  
職ト看做シタ場合ニ於ケル俸給月額ニ相當スル金額ヲ謂フコトト爲ルノデアアル。

第四項ノ追加ハ從來解釋ヲ以テ解決シ居タル所ヲ明文ヲ以テ解決シタモノデアアル。即チ此ノ一時扶  
助料ハ扶助料ト同一ノ順位ニ依リ遺族ノ受クベキモノナルコトヲ明ニシ、又遺族ノ受給資格モ扶助料  
ト同一ナルコトヲ示シタモノデアアル。

附則

第八十三條 本法ハ大正十二年十月一  
日ヨリ之ヲ施行ス

第八十四條 左ノ法令ハ之ヲ廢止ス

- 一 官吏恩給法
- 一 官吏遺族扶助法
- 一 軍人恩給法
- 一 市町村立小學校教員退隱料及遺  
族扶助料法

附則

第八十三條 本法ハ大正十二年十月一  
日ヨリ之ヲ施行ス

第八十四條 左ノ法令ハ之ヲ廢止ス

- 一 官吏恩給法
- 一 官吏遺族扶助法
- 一 軍人恩給法
- 一 市町村立小學校教員退隱料及遺  
族扶助料法

府縣立師範學校長俸給並公立學  
校職員退隱料及遺族扶助料法

明治二十四年法律第四號

明治二十九年法律第十三號

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補  
則

明治二十九年法律第七十八號

明治三十三年法律第七十五號

明治三十三年法律第七十六號

明治三十三年法律第七十七號

巡查看守退隱料及遺族扶助料法

明治三十五年法律第二十九號

在外指定學校職員退隱料及遺族  
扶助料法

明治四十年法律第四十八號

明治四十年法律第四十九號

明治四十一年法律第三十五號

明治四十三年法律第三十號

明治四十四年法律第六十一號

明治四十四年法律第六十七號

恩給法 附則 第八十四條

府縣立師範學校長俸給並公立學  
校職員退隱料及遺族扶助料法

明治二十四年法律第四號

明治二十九年法律第十三號

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補  
則

明治二十九年法律第七十八號

明治三十三年法律第七十五號

明治三十三年法律第七十六號

明治三十三年法律第七十七號

巡查看守退隱料及遺族扶助料法

明治三十五年法律第二十九號

在外指定學校職員退隱料及遺族  
扶助料法

明治四十年法律第四十八號

明治四十年法律第四十九號

明治四十一年法律第三十五號

明治四十三年法律第三十號

明治四十四年法律第六十一號

明治四十四年法律第六十七號

一一九



- 一 明治四十五年法律第十一號
- 一 明治四十五年法律第十二號
- 一 大正七年法律第三十號
- 一 大正十年法律第三十五號
- 一 大正十年法律第九十四號
- 一 大正十一年法律第十八號
- 一 大正十一年法律第十九號
- 一 明治二十二年勅令第三百三十三號
- 一 明治二十三年勅令第九十八號
- 一 明治二十五年勅令第十八號
- 一 明治二十五年勅令第三十二號
- 一 明治三十二年勅令第九十六號
- 一 明治三十八年勅令第二百二十九號

號

- 一 明治四十年勅令第八十八號
- 一 明治四十年勅令第八十九號
- 一 明治四十一年勅令第七十一號
- 一 明治四十五年勅令第七十號
- 一 大正七年勅令第六十二號
- 一 大正十年勅令第二百六十八號

- 一 明治四十五年法律第十一號
- 一 明治四十五年法律第十二號
- 一 大正七年法律第三十號
- 一 大正十年法律第三十五號
- 一 大正十年法律第九十四號
- 一 大正十一年法律第十八號
- 一 大正十一年法律第十九號
- 一 明治二十二年勅令第三百三十三號
- 一 明治二十三年勅令第九十八號
- 一 明治二十五年勅令第十八號
- 一 明治二十五年勅令第三十二號
- 一 明治三十二年勅令第九十六號
- 一 明治三十八年勅令第二百二十九號

號

- 一 明治四十年勅令第八十八號
- 一 明治四十年勅令第八十九號
- 一 明治四十一年勅令第七十一號
- 一 明治四十五年勅令第七十號
- 一 大正七年勅令第六十二號
- 一 大正十年勅令第二百六十八號

- 一 大正十一年勅令第八十七號
- 一 大正十一年勅令第二百八十四號
- 一 明治九年第九十九號達陸軍恩給令

令

- 一 明治十五年第四十一號達巡查看守給助例

- 一 明治十六年第三十八號達海軍恩給令

給令

一 明治十七年第一號達官吏恩給令第八十五條 本法施行前給與事由ノ生シタル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノニ付テハ從前ノ規定ニ依ル

從前ノ規定ニ依ル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノハ之ヲ本法ニ依リ受ケ又ハ受クヘキ恩給ト看做ス

前項ノ場合ニ於テ從前ノ規定ニ依ル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノカ本法ニ依リ給與スル

- 一 大正十一年勅令第八十七號
- 一 大正十一年勅令第二百八十四號
- 一 明治九年第九十九號達陸軍恩給令

令

- 一 明治十五年第四十一號達巡查看守給助例

- 一 明治十六年第三十八號達海軍恩給令

給令

一 明治十七年第一號達官吏恩給令第八十五條 本法施行前給與事由ノ生シタル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノニ付テハ從前ノ規定ニ依ル

從前ノ規定ニ依ル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノハ之ヲ本法ニ依リ受ケ又ハ受クヘキ恩給ト看做ス

前項ノ場合ニ於テ從前ノ規定ニ依ル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノカ本法ニ依リ給與スル



恩給ノ何レノ種類ニ屬スヘキカハ公務員及其ノ遺族ノ種類並給與ノ事由ニ依リ之ヲ定ム  
從前ノ規定ニ依ル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノニシテ本法ニ依ル恩給ニ該當セサルモノアルトキハ本法ニ依ル恩給中最近キ性質ヲ有スルモノニ依ル

本條ノ直接改正デハナイガ本條第一項ノ規定ノ適用ノ一場合トシテ大正十二年恩給法施行前巡查又ハ警部補トシテ退隱料ヲ受ケタ者ガ引續キ警部ト爲ツタ場合ノ在職年通算關係ニ付テ改正法附則第十五條ガ新ニ設ケラレテオロ。同條ニ付テハ後述スルコトトスル。

第八十六條 第五條乃至第七條ノ規定ハ從前ノ規定ニ依リ生シタル恩給、退隱料、遺族扶助料、退官賜金、退職給與金、退職一時金、給助金、賑恤金、一時扶助金其ノ他之ニ準スヘキモノヲ受クヘキ權利ニシテ本法施行ノ日迄ニ從前ノ規定ニ依ル請求期間ヲ經

恩給ノ何レノ種類ニ屬スヘキカハ公務員及其ノ遺族ノ種類並給與ノ事由ニ依リ之ヲ定ム  
從前ノ規定ニ依ル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノニシテ本法ニ依ル恩給ニ該當セサルモノアルトキハ本法ニ依ル恩給中最近キ性質ヲ有スルモノニ依ル

第八十六條 第五條乃至第七條ノ規定ハ從前ノ規定ニ依リ生シタル恩給、退隱料、遺族扶助料、退官賜金、退職給與金、退職一時金、給助金、賑恤金、一時扶助金其ノ他之ニ準スヘキモノヲ受クヘキ權利ニシテ本法施行ノ日迄ニ從前ノ規定ニ依ル請求期間ヲ經

過セサルモノニ付之ヲ適用ス

第八十七條 第十條ノ規定ハ本法施行前給與ノ事由ヲ生シタル恩給、退隱料、遺族扶助料、退官賜金、退職給與金、退職一時金、給助金、賑恤金、一時扶助金其ノ他之ニ準スヘキモノニ付本法施行後其ノ給與ヲ爲ス場合ニ付之ヲ適用ス

第八十八條 從前ノ規定ニ依リ内閣總理大臣ノ爲シタル裁定ハ具申、訴願又ハ行政訴訟ニ付テハ之ヲ本法ニ依ル内閣恩給局長ノ裁定ト看做シ從前ノ規定ニ依ル具申ノ裁決ハ之ヲ本法ニ依ル具申ノ裁決ト看做ス  
本法施行ノ際現ニ具申中又ハ訴願中ノ事件ニ付テハ從前ノ手續規定ニ依リ之ヲ完結ス

第八十九條 府縣ニシテ本法施行ノ際市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十四條ノ規定ニ依リ小學校

過セサルモノニ付之ヲ適用ス

第八十七條 第十條ノ規定ハ本法施行前給與ノ事由ヲ生シタル恩給、退隱料、遺族扶助料、退官賜金、退職給與金、退職一時金、給助金、賑恤金、一時扶助金其ノ他之ニ準スヘキモノニ付本法施行後其ノ給與ヲ爲ス場合ニ付之ヲ適用ス

第八十八條 從前ノ規定ニ依リ内閣總理大臣ノ爲シタル裁定ハ具申、訴願又ハ行政訴訟ニ付テハ之ヲ本法ニ依ル内閣恩給局長ノ裁定ト看做シ從前ノ規定ニ依ル具申ノ裁決ハ之ヲ本法ニ依ル具申ノ裁決ト看做ス  
本法施行ノ際現ニ具申中又ハ訴願中ノ事件ニ付テハ從前ノ手續規定ニ依リ之ヲ完結ス

第八十九條 府縣ニシテ本法施行ノ際市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十四條ノ規定ニ依リ小學校



教員恩給基金ヲ備フルモノハ本法施行後引續キ其ノ恩給基金ヲ備フルコトヲ得

前項ノ恩給基金ヲ備フル府縣ニ於テハ第十八條第二項ノ規定ニ依ル納金ハ之ヲ其ノ恩給基金ト爲スヘシ

恩給基金ハ其ノ利子ヲ以テ府縣カ給與スヘキ教育職員若ハ準教育職員又ハ其ノ遺族ノ恩給ニ充ツルノ外之ヲ支消スルコトヲ得ス

府縣ニ於テ給與スヘキ教育職員若ハ準教育職員並其ノ遺族ノ恩給ハ恩給基金ノ利子及第十八條第三項ノ規定ニ依リ國庫ヨリ交付スル給與金其ノ他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨シ不足アルトキハ府縣費ヲ以テ之ヲ補充スヘシ

恩給基金ノ管理ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第九十條 本法施行前ノ在職ニ付在職

教員恩給基金ヲ備フルモノハ本法施行後引續キ其ノ恩給基金ヲ備フルコトヲ得

前項ノ恩給基金ヲ備フル府縣ニ於テハ第十八條第二項ノ規定ニ依ル納金ハ之ヲ其ノ恩給基金ト爲スヘシ

恩給基金ハ其ノ利子ヲ以テ府縣カ給與スヘキ教育職員若ハ準教育職員又ハ其ノ遺族ノ恩給ニ充ツルノ外之ヲ支消スルコトヲ得ス

府縣ニ於テ給與スヘキ教育職員若ハ準教育職員並其ノ遺族ノ恩給ハ恩給基金ノ利子及第十八條第三項ノ規定ニ依リ國庫ヨリ交付スル給與金其ノ他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨シ不足アルトキハ府縣費ヲ以テ之ヲ補充スヘシ

恩給基金ノ管理ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第九十條 本法施行前ノ在職ニ付在職

年ヲ計算スル場合ハ從前ノ規定ニ依ル但シ本法施行ノ際現ニ在職スル者ニ付テハ其ノ在職ニ繼續スル在職ニ限リ本法施行前ノ在職ト雖加算年ニ關スル規定ヲ除クノ外本法ニ依リ其ノ在職年ヲ計算ス

前項但書ノ場合ニ於テ從前ノ規定ニ依リ特ニ通算シ得ヘキコトヲ定メラレタル年月數アルトキハ前項但書ノ規定ニ拘ラス之ヲ在職年ニ通算ス

第九十一條 内地人タル公務員其ノ職務ヲ以テ臺灣、朝鮮、關東州(關東廳及其ノ所屬官署職員ニ付テハ南滿洲鐵道附屬地ヲ含ム)、樺太又ハ南洋群島ニ一定ノ期間引續キ在勤シタルトキハ當分ノ内在勤期間ノ一月ニ付半月ヲ加算ス

前項ノ引續キ在勤スヘキ期間ハ軍人ニ在リテハ六月、警察監獄職員ニ在リテハ二年、其ノ他ノ公務員ニ在リ

第九十一條第二項中「六月」ヲ「一年」ニ、「二年」ヲ「三年」ニ、「三年」ヲ「四年」ニ改ム

年ヲ計算スル場合ハ從前ノ規定ニ依ル但シ本法施行ノ際現ニ在職スル者ニ付テハ其ノ在職ニ繼續スル在職ニ限リ本法施行前ノ在職ト雖加算年ニ關スル規定ヲ除クノ外本法ニ依リ其ノ在職年ヲ計算ス

前項但書ノ場合ニ於テ從前ノ規定ニ依リ特ニ通算シ得ヘキコトヲ定メラレタル年月數アルトキハ前項但書ノ規定ニ拘ラス之ヲ在職年ニ通算ス

第九十一條 内地人タル公務員其ノ職務ヲ以テ臺灣、朝鮮、關東州(關東廳及其ノ所屬官署職員ニ付テハ南滿洲鐵道附屬地ヲ含ム)、樺太又ハ南洋群島ニ一定ノ期間引續キ在勤シタルトキハ當分ノ内在勤期間ノ一月ニ付半月ヲ加算ス

前項ノ引續キ在勤スヘキ期間ハ軍人ニ在リテハ一年、警察監獄職員ニ在リテハ三年、其ノ他ノ公務員ニ在リ



テハ三年トス

第四十條ノ規定ハ第一項ノ場合ニ付之ヲ準用ス

本條ノ改正ハ所謂植民地加算ノ加算要件ヲ變更シ、從來軍人六月、警察監獄職員二年、其ノ他ノ公務員三年ノ在職ヲ以テ此ノ加算ノ要件トシタモノヲ、軍人一年、警察監獄職員三年、其ノ他ノ公務員四年ニ延長シタノデアアル。

尙改正法施行期日タル本年十月一日現ニ在勤スル者デアツテ、改正法施行ノ日ノ前日迄ニ其ノ者ノ植民地在勤年月數ガ軍人ニ在ツテ六月以上、警察監獄職員ニ在ツテ二年以上、其ノ他ノ公務員ニ在ツテ三年以上デアルトキハ本年十月一日以後ニ退職スル様ナ場合ニ改正法ノ定ムル在勤年月數ニ達シナクトモ之ニ植民地加算ヲ爲スノデアアル(改正法附則一六)。

第九十二條 公務員其ノ職務ヲ以テ國

境警備又ハ理蕃ノ爲危險地域内ニ勤務シタルトキハ當分ノ内在勤期間ノ

一月ニ付一月半ヲ加算ス

前項ノ危險地域及期間ハ勅裁ヲ以テ之ヲ定ム

第四十條ノ規定ハ第一項ノ場合ニ付

テハ四年トス

第四十條ノ規定ハ第一項ノ場合ニ付之ヲ準用ス

本條ノ改正ハ所謂植民地加算ノ加算要件ヲ變更シ、從來軍人六月、警察監獄職員二年、其ノ他ノ公務員三年ノ在職ヲ以テ此ノ加算ノ要件トシタモノヲ、軍人一年、警察監獄職員三年、其ノ他ノ公務員四年ニ延長シタノデアアル。

第九十二條 公務員其ノ職務ヲ以テ國

境警備又ハ理蕃ノ爲危險地域内ニ勤務シタルトキハ當分ノ内在勤期間ノ

一月ニ付一月半ヲ加算ス

前項ノ危險地域及期間ハ勅裁ヲ以テ之ヲ定ム

第四十條ノ規定ハ第一項ノ場合ニ付

之ヲ準用ス

第九十三條 海軍警吏補ヨリ海軍巡查

ト爲リシ者ニシテ本法施行ノ際迄引續キ現ニ南洋廳巡查ノ職ニ在ルモノ

ニ付テハ其ノ海軍警吏補トシテノ在職年月數ハ本法ノ適用ニ關シテハ之ヲ巡查トシテ在職シタルモノト看做ス

第九十四條 朝鮮總督府巡查補ヨリ朝

鮮總督府巡查ト爲リシ者ニシテ本法施行ノ際迄引續キ在職スルモノニ付

テハ其ノ統監府巡查補及朝鮮總督府巡查補トシテノ在職年月數ハ本法ノ適用ニ關シテハ之ヲ巡查トシテ在職シタルモノト看做ス

第九十五條 臺灣總督府巡查補ヨリ臺

灣總督府巡查ト爲リシ者ニシテ本法施行ノ際迄引續キ在職スルモノニ付

テハ其ノ臺灣總督府巡查補トシテノ在職年月數ハ本法ノ適用ニ關シテハ

之ヲ準用ス

第九十三條 海軍警吏補ヨリ海軍巡查

ト爲リシ者ニシテ本法施行ノ際迄引續キ現ニ南洋廳巡查ノ職ニ在ルモノ

ニ付テハ其ノ海軍警吏補トシテノ在職年月數ハ本法ノ適用ニ關シテハ之ヲ巡查トシテ在職シタルモノト看做ス

第九十四條 朝鮮總督府巡查補ヨリ朝

鮮總督府巡查ト爲リシ者ニシテ本法施行ノ際迄引續キ在職スルモノニ付

テハ其ノ統監府巡查補及朝鮮總督府巡查補トシテノ在職年月數ハ本法ノ適用ニ關シテハ之ヲ巡查トシテ在職シタルモノト看做ス

第九十五條 臺灣總督府巡查補ヨリ臺

灣總督府巡查ト爲リシ者ニシテ本法施行ノ際迄引續キ在職スルモノニ付

テハ其ノ臺灣總督府巡查補トシテノ在職年月數ハ本法ノ適用ニ關シテハ



之ヲ巡查トシテ在職シタルモノト看  
做ス

第九十六條 大正九年七月三十一日以前ニ休職若ハ待命ト爲リタル者ニシテ本法施行ノ際迄引續キ休職若ハ待命ノモノ又ハ其ノ遺族同日以前ノ俸給ニ基キ年金タル恩給ヲ受クヘキ場合ニ於テハ其ノ金額算出ノ基礎タル俸給年額ハ其ノ額ニ勅令ノ定ムル金額ヲ加ヘタル額トス

第九十七條 第四十六條第二項第三項及第五十四條第一項第三號第二項ノ規定ハ本法施行前退職シタル公務員ニ付之ヲ適用ス  
前項ノ規定ハ公務員ニ準スヘキ者ニ付之ヲ準用ス  
前二項ノ規定ニ依リ給スル恩給ノ金額ハ本法施行前ノ分ニ付テハ從前ノ規定ニ依ル

第九十八條 第四十八條ノ規定ハ本法

之ヲ巡查トシテ在職シタルモノト看  
做ス

第九十六條 大正九年七月三十一日以前ニ休職若ハ待命ト爲リタル者ニシテ本法施行ノ際迄引續キ休職若ハ待命ノモノ又ハ其ノ遺族同日以前ノ俸給ニ基キ年金タル恩給ヲ受クヘキ場合ニ於テハ其ノ金額算出ノ基礎タル俸給年額ハ其ノ額ニ勅令ノ定ムル金額ヲ加ヘタル額トス

第九十七條 第四十六條第二項第三項及第五十四條第一項第三號第二項ノ規定ハ本法施行前退職シタル公務員ニ付之ヲ適用ス  
前項ノ規定ハ公務員ニ準スヘキ者ニ付之ヲ準用ス  
前二項ノ規定ニ依リ給スル恩給ノ金額ハ本法施行前ノ分ニ付テハ從前ノ規定ニ依ル

第九十八條 第四十八條ノ規定ハ本法

施行前傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ本法施行後退職シ本法施行後不具癡疾ト爲リタル者ニハ之ヲ適用セス仍從前ノ例ニ依ル

第九十九條 第五十八條ノ規定ハ教育

職員及教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官ニ付テハ當分ノ内之ヲ適用セス其ノ退職料又ハ恩給ノ停止ハ仍從前ノ例ニ依ル但シ教育職員及教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官學習院ノ職員ト爲リタルトキハ此ノ限ニ在ラス  
前項ノ規定ノ施行セラルル期間内ニ屬スル教育職員ノ在職年ト教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官以外ノ公務員ノ在職年トハ五ニ之ヲ通算セス仍從前ノ例ニ依ル教育職員ノ在職年ト第四十二條第一項各號ニ掲グル在職年トノ間ニ付亦同シ但シ學習院ノ職員トシテノ在職年ニ付テハ此ノ限

第九十九條 削除

施行前傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ本法施行後退職シ本法施行後不具癡疾ト爲リタル者ニハ之ヲ適用セス仍從前ノ例ニ依ル

第九十九條 削除



ニ在ラス  
第一項ノ規定ノ施行セラルル期間内  
ニ文官ヨリ教育職員又ハ教官其ノ他  
教育事務ニ従事スル文官ニ轉任シタ  
ル者失格原因ナクシテ退職シ年金タ  
ル恩給ヲ受ケサル場合ニ於テハ文官  
ノ在職年數ニ應シ之ニ一時恩給ヲ給  
ス  
教育教員ヨリ文官ニ轉シタル者教官  
其ノ他教育事務ニ従事スル文官以外  
ノ文官トシテ失格原因ナクシテ退職  
シタルトキハ教官其ノ他教育事務ニ  
従事スル文官トシテノ在職最終ノ俸  
給額ニ基キ之ニ恩給ヲ給ス

本條ハ大正十二年現行恩給法ノ制定セラルル當時當分規定トシテ其レ前ノ舊法ノ趣旨ヲ一部變更ヲ  
加ヘテ留保シタモノデアアル。其ノ趣旨ハ教育職員ニ付テハ再任ニ依ツテ他ノ一般ノ公務員ノ如ク普通  
恩給ノ全額停止ヲ爲サザルト共ニ、大正十二年ノ恩給法ニ依ツテ他ノ公務員ハ其ノ在職年ガ互ニ通算  
セラレルノニ拘ラズ教育職員ノ在職年ハ舊法ニテ通算ガ認メラレタ種類ノ公務員ノ在職年ト丈通算ヲ

認メラレルニ止メルトイフノデアアル。當時斯ル規定ヲ存置シタノハ一般經濟界ノ好況ガ教員ヲ奪ヒ去  
ツタ爲ニ、受恩給者タル教員ノ再任ヲ必要トスルコトガ多カッタノニ起因スル。其ノ後事情ノ變更ハ  
之ヲ必要トセザルニ至ツタノミナラズ、寧ロ逆ノ現象ヲ呈スルニ至ツタノデ此ノ規定ノ存置モ其ノ必  
要ナキノミナラズ、教育職員ト他ノ公務員トノ交互轉職ヲモ妨グルモノデアアルカラ今回之ヲ削除シテ  
一般公務員ト同様ノ法則ニ從ハシムルコトト爲シタノデアアル。

本條ヲ削除シタ結果教育職員ト他ノ公務員トノ在職年ノ通算關係及恩給ノ停止關係ガドウナルカハ  
明瞭ヲ缺クモノガ少クナイ。其レデ改正法ハ其ノ主ナルモノニ付附則ニ於テ特別ノ規定ヲ爲シテオ  
ル(附則一七)  
以下。

(一) 先ヅ普通恩給ノ停止ニ付テ見レバ、改正法施行ノ際即チ本年十月一日ニ於テ現ニ教育職員又  
ハ教育事務ニ従事スル文官等ニ在職シ、第九十九條ノ規定アルニ依ツテ第五十八條ノ規定ノ適用即チ  
再就職ニ因ル普通恩給ノ全部停止ヲ受ケズニ所謂差額停止ヲ受ケテ居ル者ハ、其ノ者ガ引續キ其ノ官  
職ニ在職スル期間ニ限り(教育職員トシテノ轉任ハ引續キタル在職トス)其ノ普通恩給ノ停止ハ舊法ノ  
規定ニ依ツテ所謂差額停止ノ方法ニ依ルノデアアル。詳言スレバ、普通恩給算出ノ基礎ト爲ツタ退職當  
時ノ俸給(改正法施行前ノモノニ限ルガ故ニ退職前一年間ノ俸給ニアラス)ト再任後ノ俸給トヲ比較シ



前俸給が再任後ノ俸給ヨリモ多額ナルトキハ其ノ差額ニ充ツル迄ハ再就職後モ普通恩給ヲ給與スルノ  
 デアル。此レハ改正法施行後即チ本年十月一日以後ニ於テモ變リナキ所デアルガ若シ其ノ者ガ一旦退  
 職シテ更ニ就職スルカ又ハ他ノ官職例ヘバ文官(一般又ハ教育事務ニ従事スルモノ)ニ轉官シタ様ノ場  
 合ニハ其レデ差額停止ノ利益ハ中斷サレ其ノ後更ニ教育職員ニ再任シ又ハ之ニ再轉職シテ來テモ差額  
 停止ノ利益ヲ回復スルノデハナイ。此ノ場合ニハ一般ノ公務員ノ場合ト同ジク恩給全部ノ停止ヲ受ク  
 ルコトト爲ルモノデアアル(改正法附則一七)。

(二) 教育職員ノ在職年ト他ノ公務員ノ在職年トノ通算關係ニ付テハ之ヲ二ツニ別チテ考フルコト  
 ガ出來ル。(イ)其ノ一ツハ改正法施行前即チ本年十月一日前ニ第九十九條第一項ノ規定ノ現實的適用  
 ヲ受ケテ差額停止ノ利益ヲ享受シタ在職期間ト、又改正法ノ附則第十七條(一)ニ於テ説明シタモノノ  
 規定ノ適用ニ依ツテ本年十月一日以後ニ於テ現實ニ差額停止ノ利益ヲ續行シタ在職期間トハ共ニ第九  
 十九條ノ規定ニ依ツテ通算關係ガ認メラレナカツタ官職ノ在職期間トハ其ノ在職年ハ互ニ通算サレル  
 コトハナイ。(ロ)他ハ第九十九條ノ規定ノ現實的利益ヲ受ケナカツタ教育職員ノ在職年ト他ノ種類ノ  
 公務員ノ在職年トノ通算デアアル。現行第九十九條ノ規定ニ於テハ同條ガ適用サレル間即チ大正十二年  
 十月ヨリ本年九月迄ノ十年間ニ屬スル教育職員ノ在職年ハ他ノ公務員ノ在職年トハ互ニ通算セヌコト

ニ爲ツテオツタノデアアルガ、今回ノ改正法ハ特ニ附則ニ於テ、第九十九條ニ依ツテ現實ノ利益ヲ受ケ  
 タ者ノミハ別論トシ、其ノ他ノ者即チ制度的ニハ此ノ利益ヲ受クベカリシ者デアツテ而モ現實ニハ其  
 ノ利益ヲ受ケナカツタモノノ在職年ハ、大正十二年十月一日以後改正法施行前ノ部分デモ、之ヲ他  
 ノ公務員ノ在職年ト相互通算スルコトニシタノデアアル(附則一九)。唯茲ニ注意スベキハ改正法施行前ニ既ニ  
 退職シテ了ツテ普通恩給ニナルカナラヌカノ確定シタ者ヲ改正法施行後ニ其ノ儘デ在職年ヲ新規定ニ  
 依ツテ改算シテ恩給權ヲ付與スルコトハナイコトデアアル(改正法附則二)。例ヘバ改正法施行前ニ退職シテ普通  
 恩給最短期限ニ達セズ恩給權ノ發生シナカツタ者ガ、若シ他ノ公務員トシテノ在職年ヲ通算サレタリ  
 トスレバ其ノ年限ニ達シテ居ツタトイフ場合ニモ改正法施行ニ依ツテ當然普通恩給權ガ生ズル譯デハ  
 ナイ。若シ此ノ者ガ再ビ就職シテ其ノ在職年ガ計算サレル様ノ場合ニハ通算サレ得ルトイフコトタル  
 ニ過ギナイ。尙此ノ外ニ注意スベキハ第九十九條ノ廢止ハ在職年通算關係ニ於テハ之ニ依ツテ他ノ公  
 務員以上ニ利益ヲ與フル趣旨ノモノデナイトイフコトデアアル。換言スレバ大正十二年恩給法制定當時  
 第九十九條ノ制限ガナカツタト同様ノ程度迄利益ヲ認メタノデアアルガ、其ノ程度ヲ超エテ他ノ公務員  
 以上ニ通算ガ有利ニ爲ツタモノト解スベキデハナイ。從テ解釋上疑義アル場合ニ於テモ此ノ趣旨ニ立  
 脚シテ其ノ解釋ヲ定ムベキモノデアアル。



通算ノ關係ヲ場合ヲ別ツテ説明スレバ、(a)大正十二年十月一日即チ現行恩給法施行ノ日以後ノ教育職員トシテノ在職年ハ同日以後ノ他ノ一般ノ公務員ノ在職年ト互ニ通算スル。此ノ點ニ於テハ大正十二年ヨリ此ノ規定ガ存在シナカッタノト同ジデアアル。(b)又大正十二年九月三十日以前ノ教育職員ノ在職年ト同日以前ノ他ノ公務員ノ在職年トノ通算關係ハ凡テ現行恩給法制定前ノ舊恩給諸法ニ依ツテ定メラレタ所ニ依ル(改正法附則一九九II)。其ノ結果教育職員ハ教育職員相互ト教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官トノ間ニノミ其ノ在職年ガ通算セラルルコトト爲ルノデアアル。此ノ點ハ現行恩給法制定當時ニ於ケル他ノ公務員ノ地位ト全ク同ジデアアル。(c)現行恩給法施行ノ日ノ前ト後トニ於ケル在職年ノ通算關係ハ恩給法第九十條第一項ノ規定ニ依ツテ定マル(改正法附則一九九III)。即チ大正十二年十月一日前ニ一旦切レタ在職年ト其ノ施行後ノ在職年トハ現行恩給法制定前ノ舊法ニ依ツテ通算關係ノ認メラレタモノ丈ヲ通算スル、從テ教育職員ノ在職年ニハ、異種ノ公務員トシテハ、教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官ノ在職年丈ガ通算サレルノデアアル。但シ大正十二年十月一日前ヨリ同日以後ニ互ツテ繼續シテ在職シタトキハ其ノ一連ノ在職中ニ他ノ公務員トシテノ在職ヲ包含スル場合ト雖モ新恩給法ノ原則ニ從ツテ互ノ在職年ヲ通算スル。例ヘバ大正十二年十月一日前ニ普通ノ文官トシテ在職シタル者ガ教育事務ニ従事スル文官ニ轉任シ、十月一日以後ニ教育職員ニ轉ジテ改正法施行後タル本年十月一日以後ニ退職

シタル場合ニハ、此ノ教育職員ノ在職年ニハ教育事務ニ従事スル文官トシテノ在職年ハ固ヨリ、其レ前ノ普通ノ文官トシテノ在職年モ亦通算セラレテ教育職員ノ恩給ノ基礎ト爲ルモノデアアル。又其ノ逆ニ、教育職員トシテ大正十二年前ヨリ在職シ來リタル者ガ教育事務ニ従事スル文官ニ轉任シ(明三二勅四五六)大正十二年十月一日以後普通ノ文官ニ轉任シ本年十月一日以後ニ退職シタトキモ亦普通ノ文官トシテノ在職年ニ教育職員トシテノ在職年ガ通算セラレル。大正十二年十月一日ヲ境目ニシテ、其レ前ニ切レタ部分ト同日後ノ在職年トハ其レ前ノ舊法デ通算ガ認メラレタモノニ限ツテ通算サレル。

此ノ第九十九條ノ削除ノ結果準教育職員ノ在職年モ、半減セラレテ教育職員ノ在職年ニ通算セラレ得ルコトト爲ツタ(四二・四)。從ツテ第四十二條第四號ニ定ムル要件ヲ具フル限り其ノ在職年ハ教育職員ノ在職年ニモ他ノ公務員ノ在職年ニモ通算サレル。而シテ其ノ通算サレル在職年ハ大正十二年十月一日以後ノ在職ニ係ルモノハ勿論同日前ノ在職ニ係ルモノト雖モ、大正十二年十月一日ノ在職ニ繼續スル部分ニ限ツテハ其ノ後ノ他ノ公務員ノ在職年ニ通算サレルノデアアル。

尙本條廢止ノ結果生ズベキ一二ノ疑問ニ付テ左ニ其ノ解説ヲ試ミルコトトスル。

其ノ一ハ本條ノ第三項及第四項ノ廢止セラルル結果、改正法施行後ニ退職スル者ニ付同項ノ規定ハ全然適用ナキニ至ルヤ否ヤノ點デアアルガ、之レハ改正法ノ施行セラルル前即チ本年九月三十日迄ニ普



通ノ文官ヨリ教育職員又ハ教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官ニ轉ジタル者ニハ其ノ者ガ改正法施行後ニ退職シタ場合ニ右第三項ノ規定ガ適用セラレ、又同日迄ニ教育職員ヨリ教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官ニ轉ジ更ニ普通ノ文官ニ轉ジタル者ガ改正法施行後退職シタ場合ニハ右第四項ノ規定ガ適用セララルモノト解スベキデアル。此ノ轉官職ノコトハ嚴格ニ言ヘバ改正法附則第二條ニ所謂給與事由ノ發生トハ見得ラレヌカモ知レナイケレドモ第九十九條デハ給與事由ニ準ズルモノト看做シテオルカラ、右ノ如ク解スルノ外ハナイ。

其ノ二ハ改正法施行前ニ教育職員トシテ既ニ普通恩給ヲ受ケタル者ガ改正法施行後即チ本年十月一日以後ニ普通ノ文官(教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官等ニアラザル)、待遇職員等ニ再就職シタキハ其ノ教育職員トシテノ恩給ハ全部停止セラレルコトデアル(五八)。其ノ代リ第五十四條ニ依ツテ、其ノ再在職ノ在職年ニ前ノ普通恩給ノ基礎ト爲ツタ教育職員ノ在職年ヲ通算シテ普通恩給ノ改定ガ爲サルルノデアル。是レハ恩給法ニ於テハ恩給停止ト在職年通算トガ常ニ相伴フコトノ結果デアル。此ノ逆ニ文官トシテノ恩給ヲ有スル者ガ教育職員ニ再就職シタ場合ニ於テモ同様デアル。

本條削除ノ結果種々ノ難問ヲ生ズルコトト思フガ其ノ各場合ノコトハ更ニ後ノ機會ニ述ブルコトトスル。

第百條 本法施行前死亡シタル者ノ遺族ノ扶助料ニシテ本法施行後轉給セラルヘキモノニ付テハ從前ノ規定ニ依ル恩給額ヲ標準トスルノ外本法ニ依リ之ヲ給ス

前項ノ規定ハ本法施行ノ際現ニ從前ノ規定ニ依リ扶助料ヲ受クル事ヲ得ル者ノ權利ヲ妨クルコトナシ  
本法施行前ニ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有シ且其ノ權利ヲ有セサルニ至リタル者ハ之ヲ受クルノ權利ヲ本法ニ依リ取得スルコトナシ  
第一項ノ場合ニ於テ本法ニ依リ扶助料ヲ受クルニ付先順位ニ在ルヘキ者ト雖本法ニ依リ後順位ニ在ル者先ニ扶助料ヲ受ケタル場合ニハ本法ニ依リ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有スルコトナシ

大正六年法律第六號附則ノ規定ニ依リ恩給ノ増額ヲ受ケサリシ軍人ノ遺

第百條 本法施行前死亡シタル者ノ遺族ノ扶助料ニシテ本法施行後轉給セラルヘキモノニ付テハ從前ノ規定ニ依ル恩給額ヲ標準トスルノ外本法ニ依リ之ヲ給ス

前項ノ規定ハ本法施行ノ際現ニ從前ノ規定ニ依リ扶助料ヲ受クル事ヲ得ル者ノ權利ヲ妨クルコトナシ  
本法施行前ニ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有シ且其ノ權利ヲ有セサルニ至リタル者ハ之ヲ受クルノ權利ヲ本法ニ依リ取得スルコトナシ  
第一項ノ場合ニ於テ本法ニ依リ扶助料ヲ受クルニ付先順位ニ在ルヘキ者ト雖本法ニ依リ後順位ニ在ル者先ニ扶助料ヲ受ケタル場合ニハ本法ニ依リ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有スルコトナシ

大正六年法律第六號附則ノ規定ニ依リ恩給ノ増額ヲ受ケサリシ軍人ノ遺



族本法施行後扶助料ヲ轉給セラルヘキ場合ニ於テ第一項ノ規定ノ適用ニ付テハ軍人ノ恩給ハ之ヲ請求ヲ竣タスシテ同法附則ノ規定ニ依リ増額セラレタルモノト看做ス

第一百一條 本法施行ノ際現ニ從前ノ規定ニ依リ年金タル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノヲ受ケ又ハ受クヘキ者ニシテ本法所定ノ恩給又ハ扶助料ノ金額ヲ受ケサルモノニハ當該金額ニ其ノ金額ト本法所定ノ各相當恩給又ハ扶助料ノ金額トノ差額ヲ勅令ノ定ムル所ニ依リ増給ス

第一百二條 明治二十四年八月十六日以降明治四十三年三月三十一日迄ニ退官退職シ又ハ死亡シタル文官、看守、陸軍監獄看守、海軍監獄看守、陸軍警査、海軍警査、貴族院守衛若ハ衆議院守衛又ハ其ノ遺族ニシテ明治四十三

族本法施行後扶助料ヲ轉給セラルヘキ場合ニ於テ第一項ノ規定ノ適用ニ付テハ軍人ノ恩給ハ之ヲ請求ヲ竣タスシテ同法附則ノ規定ニ依リ増額セラレタルモノト看做ス

第一百一條 本法施行ノ際現ニ從前ノ規定ニ依リ年金タル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノヲ受ケ又ハ受クヘキ者ニシテ本法所定ノ恩給又ハ扶助料ノ金額ヲ受ケサルモノニハ當該金額ニ其ノ金額ト本法所定ノ各相當恩給又ハ扶助料ノ金額トノ差額ヲ勅令ノ定ムル所ニ依リ増給ス

第一百二條 明治二十四年八月十六日以降明治四十三年三月三十一日迄ニ退官退職シ又ハ死亡シタル文官、看守、陸軍監獄看守、海軍監獄看守、陸軍警査、海軍警査、貴族院守衛若ハ衆議院守衛又ハ其ノ遺族ニシテ明治四十三

年四月改正前ノ俸給令ニ依ル俸給ヲ基礎トシ恩給又ハ扶助料ヲ受ケ本法施行ノ際迄其ノ權利ヲ有スル者ニハ勅令ノ定ムル所ニ依リ其ノ恩給又ハ扶助料ヲ本法施行ノ日ヨリ増額給與ス

前項ノ規定ハ明治四十四年三月三十一日以前ニ退職シタル小學校、實業補習學校、幼稚園及盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員若ハ巡查又ハ其ノ遺族ニシテ本法施行ノ際迄其ノ權利ヲ有スルモノニ付之ヲ準用ス

第一百三條 北海道屯田兵ノ現役ニ服シタル年月日數ハ之ヲ公務員ノ在職年ニ通算シ本法施行ノ日ヨリ其ノ者ノ受クル年金タル恩給ヲ改定シ又ハ新ニ之ニ普通恩給ヲ給ス  
前項ノ規定ハ前項ニ規定スル者ノ遺族ノ年金タル扶助料ニ付之ヲ準用

年四月改正前ノ俸給令ニ依ル俸給ヲ基礎トシ恩給又ハ扶助料ヲ受ケ本法施行ノ際迄其ノ權利ヲ有スル者ニハ勅令ノ定ムル所ニ依リ其ノ恩給又ハ扶助料ヲ本法施行ノ日ヨリ増額給與ス

前項ノ規定ハ明治四十四年三月三十一日以前ニ退職シタル小學校、實業補習學校、幼稚園及盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員若ハ巡查又ハ其ノ遺族ニシテ本法施行ノ際迄其ノ權利ヲ有スルモノニ付之ヲ準用ス

第一百三條 北海道屯田兵ノ現役ニ服シタル年月日數ハ之ヲ公務員ノ在職年ニ通算シ本法施行ノ日ヨリ其ノ者ノ受クル年金タル恩給ヲ改定シ又ハ新ニ之ニ普通恩給ヲ給ス  
前項ノ規定ハ前項ニ規定スル者ノ遺族ノ年金タル扶助料ニ付之ヲ準用



ス

前二項ノ場合ニ於テハ第五條ニ規定  
スル請求期間ハ本法施行ノ日ヨリ之  
ヲ起算ス

第四百四條 第八十五條乃至前條ニ規定

スルモノヲ除クノ外本法ノ施行ニ關  
シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定

ム

ス

前二項ノ場合ニ於テハ第五條ニ規定  
スル請求期間ハ本法施行ノ日ヨリ之  
ヲ起算ス

第四百四條 第八十五條乃至前條ニ規定

スルモノヲ除クノ外本法ノ施行ニ關  
シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定

ム

別表ノ改正ハ改正ヲ加ヘラレタル各表ニ付テ言ヘバ其ノ全部改正デア  
ルカラ、印刷ノ便宜上、現行表ト改正法律ノ文言トハ之ヲ省略シ、改  
正ノ結果別表トシテ殘ルベキモノヲ表出スルコトトシ、現行表ノ内容  
ハ各改正表ヲ説明スルニ當ツテ明ニスルコトトシテオル。



(別表)

第一號表

(甲)

階等	將官及相當官		佐尉官及相當官					
	親任	高等官	同上	同上	同上	同上	同上	
假定俸給年額	七、五〇〇圓	六、五〇〇圓	五、六〇〇圓	四、六〇〇圓	三、九〇〇圓	三、二〇〇圓	二、三〇〇圓	一、〇〇〇圓

(乙)

階等	准士官		下士官				兵				
	判任官	同上	同上	同上	海軍一等兵	陸軍上等兵	陸軍一等兵	陸軍二等兵	海軍二等兵	海軍三等兵	海軍四等兵
假定俸給年額	一、二〇〇圓	八五〇圓	七六五圓	六七五圓	六〇〇圓	五〇〇圓	四九五圓	四〇〇圓			

現行ノ第一號表ハ直接ニ軍人ノ普通恩給金額ヲ掲ゲテ居ルガ其ノ金額ハ改正後ノ本表ト同ジノ假定

俸給ヲ想定シ之ヲ基礎トシテ准士官以上ニ在ツテハ最短普通恩給年限タル十一年ニ於テ退職當時ノ假定俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額ヲ割當テ爾後在職年一年ヲ増ス毎ニ之ニ假定基礎俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額ヲ割當テタルモノデアリ、下士官以下ニ在ツテハ最短普通恩給年限タル十一年ニ於テハ將校ト同ジク退職當時ノ假定俸給年額ノ百五十分ノ五十二相當スル金額ヲ割當テ爾後在職年一年ヲ増ス毎ニ之ニ定額(下士官八圓、兵七圓)ヲ加ヘタル金額ヲ割當テタルモノデアツタ。換言スレバ現行第一表ハ改正第一表ヲ基礎トシ一般原則ヲ適用シテ算出シタ結果ノ數字ヲ表示シタモノデアアル。改正第一表ハ右ノ算出ノ基礎ト爲ツタモノヲ假定俸給ノ名ノ下ニ表出シタモノデアアル(五九ノ二)。從ツテ各階等共ニ現行ノ普通恩給年額十一年額ノ三倍ガ改正第一表ノ假定俸給年額ニ相當スルノデアアル。例ヘバ准士官ノ最短普通恩給年限ニ於ケル普通恩給年額ハ四百圓デアツタ其ノ改正第一號表ニ於ケル假定俸給年額ハ千二百圓デアアルガ如キ之レデアアル。

改正法ガ從前ノ第一號表ニ於ケルガ如ク普通恩給金額ヲ表示スルノ主義ヲ捨テテ基礎ノ假定俸給年額ヲ表示スルノ主義ヲ採ツタノハ、一般ニ基礎俸給ヲ退職當時ノモノヨリ退職前一年内ノモノニ更ヘタ結果、軍人ニ付テモ之ニ順應セネバナラヌコトト爲ツタ爲デアアル。是レハ軍人ノ退職前一年内ノ階等ヲ基礎トシテ恩給金額ヲ算出スルトイフ觀念ハ意味ヲ爲サナイカラデアアル(六一ノ二)。



此ノ假定俸給年額ハ中佐以上ハ昭和六年ノ減俸前ノ俸給實額ニ相當シ少佐以下ハ俸給實額ヨリモ多額デアル。大正十二年恩給法制定當時第一號表ノ算出ニ當リ准士官、下士等ニ付テハ陸軍及海軍ノ准士官下士ヲ通ジ其ノ何レカノ内最モ多額ノ俸給ヲ受クル者ヲ標準トシ之ニ尙幾分ノ斟酌ヲ加ヘテ假定俸給ヲ想定シ、之ヨリ普通恩給年額ヲ算出シ、之ト中佐以上ノ者ノ普通恩給年額トノ間ヲ相當ノ金額ヲ以テ補間シテ尉官ノ普通恩給年額ヲ作り、更ニ類似ノ方法ニ依ツテ兵卒ノ恩給額ヲ決定シタモノデアッタ。今回ノ改正ニ當ツテ此ノ普通恩給年額ヲ假定俸給年額ニ還元スレバ少佐以下ガ實俸給額(減俸後ノモノニハ勿論、減俸前ノモノニモ)ニ合致セヌノハ當然デアル。

第二號表

甲	傷病原因		階等	親任	奏任	判任	下任	兵卒
	戰闘	又ハ						
第一	特別	特別	特別	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第二	第一	第一	第一	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第三	第二	第二	第二	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第四	第三	第三	第三	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第五	第四	第四	第四	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第六	第五	第五	第五	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第七	第六	第六	第六	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第八	第七	第七	第七	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第九	第八	第八	第八	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十	第九	第九	第九	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十一	第十	第十	第十	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十二	第十一	第十一	第十一	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十三	第十二	第十二	第十二	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十四	第十三	第十三	第十三	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十五	第十四	第十四	第十四	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十六	第十五	第十五	第十五	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十七	第十六	第十六	第十六	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十八	第十七	第十七	第十七	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第十九	第十八	第十八	第十八	親任	奏任	判任	下任	兵卒
第二十	第十九	第十九	第十九	親任	奏任	判任	下任	兵卒

號	乙	號
第一	特別	スヘ
第二	特別	スヘ
第三	特別	スヘ
第四	特別	スヘ
第五	特別	スヘ
第六	特別	スヘ
第七	特別	スヘ
第八	特別	スヘ
第九	特別	スヘ
第十	特別	スヘ
第十一	特別	スヘ
第十二	特別	スヘ
第十三	特別	スヘ
第十四	特別	スヘ
第十五	特別	スヘ
第十六	特別	スヘ
第十七	特別	スヘ
第十八	特別	スヘ
第十九	特別	スヘ
第二十	特別	スヘ
第二十一	特別	スヘ
第二十二	特別	スヘ
第二十三	特別	スヘ
第二十四	特別	スヘ
第二十五	特別	スヘ
第二十六	特別	スヘ
第二十七	特別	スヘ
第二十八	特別	スヘ
第二十九	特別	スヘ
第三十	特別	スヘ
第三十一	特別	スヘ
第三十二	特別	スヘ
第三十三	特別	スヘ
第三十四	特別	スヘ
第三十五	特別	スヘ
第三十六	特別	スヘ
第三十七	特別	スヘ
第三十八	特別	スヘ
第三十九	特別	スヘ
第四十	特別	スヘ
第四十一	特別	スヘ
第四十二	特別	スヘ
第四十三	特別	スヘ
第四十四	特別	スヘ
第四十五	特別	スヘ
第四十六	特別	スヘ
第四十七	特別	スヘ
第四十八	特別	スヘ
第四十九	特別	スヘ
第五十	特別	スヘ
第五十一	特別	スヘ
第五十二	特別	スヘ
第五十三	特別	スヘ
第五十四	特別	スヘ
第五十五	特別	スヘ
第五十六	特別	スヘ
第五十七	特別	スヘ
第五十八	特別	スヘ
第五十九	特別	スヘ
第六十	特別	スヘ
第六十一	特別	スヘ
第六十二	特別	スヘ
第六十三	特別	スヘ
第六十四	特別	スヘ
第六十五	特別	スヘ
第六十六	特別	スヘ
第六十七	特別	スヘ
第六十八	特別	スヘ
第六十九	特別	スヘ
第七十	特別	スヘ
第七十一	特別	スヘ
第七十二	特別	スヘ
第七十三	特別	スヘ
第七十四	特別	スヘ
第七十五	特別	スヘ
第七十六	特別	スヘ
第七十七	特別	スヘ
第七十八	特別	スヘ
第七十九	特別	スヘ
第八十	特別	スヘ
第八十一	特別	スヘ
第八十二	特別	スヘ
第八十三	特別	スヘ
第八十四	特別	スヘ
第八十五	特別	スヘ
第八十六	特別	スヘ
第八十七	特別	スヘ
第八十八	特別	スヘ
第八十九	特別	スヘ
第九十	特別	スヘ
第九十一	特別	スヘ
第九十二	特別	スヘ
第九十三	特別	スヘ
第九十四	特別	スヘ
第九十五	特別	スヘ
第九十六	特別	スヘ
第九十七	特別	スヘ
第九十八	特別	スヘ
第九十九	特別	スヘ
第一百	特別	スヘ

備考 特別項ハ各號第一項ノ金額ニ其ノ十分ノ五以内ヲ加ヘタルモノトス

本表ハ増加恩給ノ年額表デアルガ、之ニハ何等ノ改正ガ加ヘテナイ(四六)。

第三號表

甲	傷病原因		階等	准判	下士	兵
	第一	第二				
第一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第十九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第二十九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第三十九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第四十九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第五十九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第六十九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第七十九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第八十九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十一	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十二	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十三	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十四	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十五	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十六	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十七	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十八	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第九十九	特別	特別	特別	准判	下士	兵
第一百	特別	特別	特別	准判	下士	兵

恩給法 別表 第三號表



高等官及同待遇者ニ給スヘキ金額ハ判任一等ノ者ニ給スヘキ金額ニ其ノ十分ノ一二相當スル金額ヲ加ヘタルモノトス	乙				號			
	普	通	公	務	戰	戰	戰	號
	第一	第二	第三	第四	第一	第二	第三	第四
	款	款	款	款	款	款	款	款
	二五〇	一九二	一五六	二二〇	二四〇	一九二	一五六	二二〇
	二二〇	一七六	一四三	二二〇	二四〇	一九二	一五六	二二〇
	二〇〇	一六〇	一三〇	二〇〇	二四〇	一九二	一五六	二二〇

本表ハ新設ノ傷病年金ノ金額ヲ定メタモノデアツテ、改正前ノ傷病賜金第一款乃至第四款ノ一時金ニ代フルニ年金ヲ以テシタル内容ヲ有シテオル。此ノ金額ハ増加恩給ニ比例シテ定メラレタモノデア。而シテ増加恩給ニ於テハ第三項症以下ハ直前ノ項症ノ金額ノ八割ノ金額ヲ以テ其ノ金額トシテオ。ルカラ傷病年金モ此ノ割合ニ基イテ定メラレテオ。併シ増加恩給ニハ必然ニ普通恩給ヲ伴フモ傷病年金ニハ必然ニハ之ヲ伴ハナイカラ其ノ點ヲ考慮シテ幾分ノ割増ヲ爲シタ。即チ第一款症ハ右ノ原則カラスレバ兵ノ甲號ニ於テ「二四〇」圓トスベキヲ「二六〇」圓トシテ「二〇」圓ヲ増シ、又第二款症ハ「二

四〇」圓ノ八割「一九二」圓トスベキヲ「二〇〇」圓トシタルノ類デア。尙高等官及高等官待遇者ニ給スベキ傷病年金ノ額ヲ一樣ニ判任一等ノ者ニ給スベキ金額ノ一割増ノモノトシタノハ、高等官級ニ於テハ輕イ傷病デハ其ノ儘在職シ得ル職務ニ在ルコトガ多ク、殊ニ上階級ニ至ルニ從ツテ然ルノデア。ルカラ増加恩給ノ場合ノ如ク嚴格ニ各階等ニ應ズル金額ヲ定メ置クノ要ヲ見ナイ、ノミナラズ傷病年金ガ傷病賜金ノ一部ノ變形ナル沿革的理由モアツテ、傍々一樣ニ判任一等ノ者ノ一割増ノ金額ト爲シタノデア。ル。

改正前ノ傷病賜金(下士官兵ノミニ限ル一時金)ノ第一款乃至第四款ノ金額ハ次ノ如クデア。ル。

原傷 因病	甲				原傷 因病	乙			
	戰	戰	戰	戰		普	通	公	務
症狀等差	第一	第二	第三	第四	第一	第二	第三	第四	
	款	款	款	款	款	款	款	款	
下	一、五〇〇	一、四八五	一、三三〇	一、一五五	一、三〇〇	一、一八八	一、〇六六	九三四	
士									
兵	一、五〇〇	一、三〇〇	一、一〇〇	一、〇五〇	一、三〇〇	一、〇八〇	九六〇	八四〇	
卒									
下									
士									
兵									
卒									

第四號表



甲						傷病原因
號	務	公	通	普	號	
第一目	九〇〇 <sub>四</sub>	九〇〇 <sub>四</sub>	七九二 <sub>四</sub>	七〇〇	第一目	七〇〇
第二目	八三五	七〇〇	六六〇	六〇〇	第二目	六〇〇
第三目	六六〇	六〇〇	五三八	四八〇	第三目	四八〇
第四目	四九五	四五〇	三九六	三六〇	第四目	三六〇
第五目	三三〇	三〇〇	二六四	二四〇	第五目	二四〇
第六目	一六五	一五〇	一三三	一一〇	第六目	一一〇
乙						傷病原因
號	務	公	通	普	號	
第一目	九〇〇 <sub>四</sub>	九〇〇 <sub>四</sub>	七九二 <sub>四</sub>	七〇〇	第一目	七〇〇
第二目	八三五	七〇〇	六六〇	六〇〇	第二目	六〇〇
第三目	六六〇	六〇〇	五三八	四八〇	第三目	四八〇
第四目	四九五	四五〇	三九六	三六〇	第四目	三六〇
第五目	三三〇	三〇〇	二六四	二四〇	第五目	二四〇
第六目	一六五	一五〇	一三三	一一〇	第六目	一一〇

本表ハ改正前ノ傷病賜金表タル第三號表ノ第五款以下ヲ此處ニ移シタルモノデアアル。之ヲ給スベキ人ノ範圍ニ於テモ、金額ニ於テモ全然異ル所ハナイ。即チ本表ノ第一目ハ舊第三號表ノ第五款ニ當リ第二目乃至第六目ハ夫々舊第三號表ノ第六款乃至第十款ニ當ツテオル。

舊第四號表ハ軍人ノ一時恩給ノ金額ヲ表示シタモノデアツテ、其ノ内容ハ基礎俸給(假定)月額ニ在職年ノ年數ヲ乗ジタモノデアツタガ、改正法ニ於テハ第一號表ニ於テ軍人ノ爲ニ假定俸給額ヲ掲ゲ、算則ハ恩給法本文ニ於テ之ヲ規定シテオルカラ(六八II)其ノ必要ガナクナツテ削除サレ、其ノ空所ニ新第四號表ガ置カレタノデアアル。

昭和八年法律第五十號(恩給法中改正法律)附則



第一條 本法ハ昭和八年十月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第四十六條ノ二、第五十八條第一項第四號及第五十九條ノ改正規定ハ昭和九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本條ハ改正法律ノ施行期日ヲ定メタモノデアル。本年十月一日ハ現行恩給法施行ヨリ滿十年デア  
ル。但書ニ於テ例外的ニ施行期日ヲ昭和九年四月一日ニ延シタ事項ガ三ツアルガ其ノ理由ハ事項ニ依  
ツテ異ツテオル。其ノ中第四十六條ノ二(傷病年金)ノ規定ヲ遅レシメタノハ傷病年金ニ相當スル特別  
扶助金(昭和七年度臨時豫算ヲ以テ所謂一時金療兵ニ給與シタルモノ)ヲ昭和八年度ニ於テモ豫算ニ計  
上シアルガ爲ニ、其ノ年度ノ終了スル明年四月一日ヨリ傷病年金ヲ給與スルコトトシタノデアリ、第  
五十八條第一項第四號(多額所得者ノ停止)ノ規定ヲ遅レシメタノハ恩給外所得ノ調査及停止ノ實行上  
之ヨリ早クハ施行不可能デアルカラデアアル。第五十九條(個人納金)ノ規定ヲ但書中ニ加ヘタノハ議  
會(貴族院)ノ修正ノ結果デアリ且之ハ政府案ニ對スル唯一ノ議會修正デアアル。其ノ理由ハ其ノ施行期  
日ヲ昭和八年十月一日トスレバ、昭和八年度ニ於テハ陸軍軍人ト海軍軍人トノ間ニ不公平ヲ生ズルト  
イフニアル。陸軍ノ定期進級ハ毎年八月ヲ主トシ海軍ノ其レハ十二月ヲ主トスル、個人納金ハ具級ノ  
時ヨリ之ヲ爲スコトト爲ツテオルカラ(改正法附則九)、施行期日ヲ昭和八年十月一日トスレバ昭和八年度ニ於  
テハ軍人ノ中デハ海軍ノ者ノミガ納金ヲ始メルコトト爲ツテ不公平デアルトイフノデアアル。



第二條 本法施行前給與事由ノ生ジタル恩給ニ付テハ仍從前ノ規定ニ依ル但シ第五十八條第一項第四號ノ改正規定ハ本法施行前給與事由ノ生ジタル恩給ニ付テモ之ヲ適用ス

本條ハ不溯及原則ヲ聲明シタルモノデアツテ、改正法施行前ニ退職シタ者ニ付テハ改正法施行後其ノ權利ヲ裁定スル場合ニモ尙從前ノ規定ニ依ツテ其ノ權利ノ有無及範圍ヲ定メルノデアアル。例ヘバ本年十月三十日迄ニ在職年十五年ニテ退職シタ文官ニ對シテハ普通恩給ヲ給シ而モ其ノ率ハ退職當時ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十デアアルガ如キデアツテ、附則ニ特別ノ經過の規定ナキ限り皆此ノ原則ニ支配サレルノデアアル。然シ乍ラ今回ノ改正ノ點ニ付テハ殆ド凡テニ付テ特別ノ經過規定ヲ置イテ居ルカラ此ノ原則デ支配スル場合ハ比較的少イト謂ハネバナラヌ。本條但書ハ明文ナクトモ同様ノ解釋ニ歸スルコトデハアルガ疑問ヲ生ズル恐ガアルカラ特ニ之ヲ明ニシタモノデアアル。

第三條 第十三條第二項但書ノ改正規定ハ本法施行前ヨリ行政裁判所ニ繫屬スル事件ニ付テハ之ヲ適用セス

本條ニ付テハ特ニ説明スルヲ要シナイ位ノモノデアアル。傷病ノ程度ニ付テハ行政裁判所ニ出訴ヲ許サヌコトトシタ所ノ改正規定ハ改正法施行ノ當時即チ本年十月一日現ニ同裁判所ニ其ノ點デ繫屬シテオル事件アラバ其ノ事件ニハ其レガ完結スル迄適用シナイノデアアル。從テ此ノ理由ヲ以テ不適法却下ト爲ルコトハナイ。

第四條 第十八條第一項ノ改正規定ニ依ル納付金額ハ同項ニ規定スル公務員ニ付テ附則第九條ノ規定ノ必要ナキニ至ル迄ハ第十八條第一項ノ改正規定ニ拘ラス同項ニ規定スル公務員ガ第五十九條(改正前又ハ改正後)及附則第九條ノ規定ニ依リ納付スル金額ノ合計額ト同額トス

本條ニ付テハ既ニ第十八條第一項ノ規定ノ説明ヲ爲スニ當ツテ觸レテ置イタノデアアルガ、本條ハ第十八條第一項ノ團體納金ガ同項ニ規定スル公務員ノ個人納金ノ順次的ニ増加サレテ行クニ應ジテ同ジ總額デ増加サレテ行クベキコトヲ規定シタモノデアアル。此ノ種公務員ノ個人納金(五九)ハ百分ノ一ヨリ百分ノ二ニ増加サレテ行クガ其ノ増加ハ一齊ニ爲サルノデナクシテ個人個人ニ其ノ新任、昇級、増俸ノアツタ月ノ翌月カラ爲サレルノデアアル。團體納金モ凡テノ個人ノ納金ノ合計額ト同額丈ヅツ増加シ行クベキデアアル。

第五條 本法施行前ノ在職ニ付在職年ヲ計算スル場合ニ於テハ加算年又ハ休職等ノ減算ニ關スル改正規定ニ拘ラス仍從前ノ規定ニ依ル

第六條 第四十條ノ二ノ改正規定ハ本法施行ノ際現ニ進行中ニ屬スル休職、待命、歸休、停職其ノ他同條ニ規定スル在職期間ニ付テハ其ノ期間ノ終了ニ至ル迄本法施行後ト雖モ同條ノ規定ヲ適用セス

改正法ニ於テハ航海加算ノ加算率ヲ減ジ、艦隊加算ヲ新設シ(三九I)又休職待命等ノ期間ヲ半減計算スルコトノ規定(四〇ノ二)ヲ置イタガ之レハ改正法施行後ノ在職年ニ付テノミ適用スル。從ツテ艦隊加



算ノ如キモ本年十月以後一年以上編隊艦船ニ乗組ンダ場合ノミニ附加セラルルノデアル。  
而シテ休職待命等ノ期間ノ半減計算ノ規定ハ、其ノ期間ガ改正法施行後ニ屬スルモノデアツテモ改正法施行前カラ引續イテオルモノデアルトキハ期間滿了迄ハ之レヲ半減計算シナイ。之レハ其ノ期間滿了ニ因ツテ普通恩給年限ニ達スルコトヲ豫想シテ休職處分ヲ爲スガ如キ場合アルヲ考慮シテノコトデアアル。

第七條 傷病年金ハ本法施行後公務ノ爲傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル者ニ之ヲ給ス但シ本法施行前賑恤金(之ニ準ズルモノヲ含ム)又ハ傷病賜金ヲ受クベキ事由ヲ生ジタル者ニハ本法施行前其ノ事由ヲ生ジタルトキト雖モ勅令ノ定ムル所ニ依リ傷病ノ程度ヲ査定シ將來ニ向ツテ之ヲ給ス

本條ハ傷病年金ハ改正法施行後傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹ツタ者ニ給スルノヲ原則トスル旨ヲ定メタモノデアアル。本法施行ノ日トハ傷病年金ニ付テハ昭和九年四月一日デアアル(附則一)。右原則ニ對スル例外トシテ下士以下ノ軍人ガ舊法ノ規定ニ依ツテ賑恤金(舊軍人恩給法ニ規定スルモノ)、之ニ準ズベキモノ(明治九年陸軍恩給令ニ依ル一時)、傷病賜金(改正前ノ恩給法第一條及至第四條)ヲ受ケタルトキ又ハ之ヲ受クベキ事由ノ存シタルトキ(爾後重症ニ趨キタル所謂無償廢兵ヲモ含ミ得ルモノト解ス)ハ其ノ軍人ニ對シテハ改正法施行前ニ事由ノ生ジタルモノデモ之ニハ勅令ノ定ムル所ニ依リ、傷病ノ程度ヲ新ニ査定シ、將來ニ向ツテ即チ昭和九年四月一日

以後傷病年金ヲ給與スルノデアアル。右ノ勅令トイフノハ昭和八年九月十一日勅令第二百三十六號恩給法施行令中改正ノ件附則(以下施行令改正勅令附則ト稱ス)第三條ノ規定ヲ指スノデアアルガ、之ニ依レバ昭和九年三月三十一日以前ニ給與事由ヲ生ジタ者デアツテ既ニ傷病賜金ヲ受クル權利ヲ生ジタモノニ傷病年金ヲ給スル場合ニ於テハ傷病賜金ヲ受クル權利ヲ生ジタ月ヨリ起算シ、新タニ受クベキ傷病年金ノ年額ヲ以テ其ノ者ガ現ニ受ケタル傷病賜金額ヲ除シテ得タル數丈ケノ年數ヲ經過シタル後カラ傷病年金ノ給與ヲ始メルノデアアル。デアアルカラ、九年三月三十一日迄ニ既ニ其ノ年數ヲ經過シ去ツタ者ニハ九年四月一日分カラ給與ヲ始メルシ、其ノ年數ガ未ダ餘ツテオル者ニハ九年四月以後其ノ年數ガ經過シテ後カラ傷病年金ノ給與ヲ始メルノデアアル。  
右ノ年數トイフノハ一年未滿ノ分ハ一年ヲ十二ヶ月トシテ月ニ換算シ、一月ニモ滿タザル分ハ之ヲ切捨テ、例ヘバ三年四月半ニ當ルトキハ三年四月トシテ、其ノ三年四月ヲ經過シタ五月目カラノ分ヲ給與スルノデアアル。

第八條 第五十八條第一項第三號ノ改正規定ハ本法施行前普通恩給ヲ受クルノ權利ヲ生ジタル者及本法施行ノ際現ニ在職シ本法施行後退職シテ普通恩給ヲ受クルノ權利ヲ生ズル者ニハ之ヲ適用セス  
前項ニ規定スル者本法施行後再就職シ其ノ普通恩給ヲ改定セラルル場合ニハ其ノ改定ニ因ル増額分ニ付第五十



八條第一項第三號ノ改正規定ヲ適用ス

本條ハ若年者ノ恩給停止ノ規定ハ改正法施行前即チ本年九月三十日迄ニ生ジタ普通恩給權ト、本年十月一日ニ於テ在職シ尙引續キ在職シテ改正法施行後退職シテ生ズル普通恩給權トニハ之ヲ適用シナイコトヲ定メタノデアル。其ノ後再任シテ再任改定ヲスル場合ニハ改定分ニ付テノミ停止規定ヲ適用スルノデアル。之ハ此ノ規定ノ適用ヲ受クル者ニ下級者ガ多イカラ此レヲ考慮シタ結果デアル。

第九條 第五十九條ノ改正規定ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本法施行後就職シ又ハ俸給(又ハ給料)ガ昇給若ハ増額セラレタル月ノ翌月ヨリ之ヲ適用ス

個人納金ノ新設及増額ハ公務員ノ個人別ニ始ムルモノデアル。即チ昭和九年四月一日以後ニ新任シ、昇給シ、又ハ一般増給ガ爲サレタトキカラ新ニ俸給百分ノ一ノ徵收ヲ始メルカ又ハ俸給ノ百分ノ二ニ増額スルカスルノデアル。四月一日ニ一齊ニ凡テノ公務員ヨリ新ニ徵收シ又ハ増徴スルモノデハナイ。右ノ勅令ヘノ委任ヲ受ケテ施行令改正勅令附則第四條デハ疑問ヲ生ズベキ場合ニ付次ノ如クニ規定シテオル。

(一) 轉官職ヲ爲シテ、新官職デハ前官職ヨリ多額ノ俸給ヲ給セララルルニ至ルトキハ其ノ額ノ如何ヲ問ハズ之ヲ昇給ト看做ス

(二) 本俸ト準本俸トヲ併セ受クル場合、例ヘバ本俸ト年功加俸、本俸ト大學教授ノ職務俸トヲ併セ受クルガ如キ場合ニ於テ其ノ一ニ付テ昇給又ハ増額ガアツタトキハ其ノ昇給又ハ増額セラレヌ分ノ俸給ニ付テモ改正率デ納金ガ課セラレル。

(三) 俸給ニ關スル法令デ一般ノ増額ガ施サレタ場合ニ於テモ其ノ増額分ガ僅少デアツテ、其ノ増額アツタコトヲ理由トシテ新タニ百分ノ一ノ納金ヲ増サレルトキハ返ツテ實質的ニハ減額ヲ來ス結果ニナルトキハ増額ナカリシモノトシ從テ納金ヲ百分ノ一新ニ課シ又ハ増額セヌコトトスル。

第十條 第五十九條ノ二第一項但書ノ場合ニ於テ其ノ公務員ガ同一種類ノ公務員トシテ實在職年二十年以上勤績シタル者ニシテ特殊ノ事情アルモノニ付テハ當分ノ内同但書各號ニ於ケル制限ノ一級ヲ二級、百分ノ十五ヲ百分ノ三十トス

本條ニ付テハ第五十九條ノ二ノ規定ニ於テ既ニ詳細ヲ説明シテオルカラ重ネテ茲ニ説カナイガ、唯一點注意スベキハ此處ニ謂フ所ノ同一種類ノ公務員トハ恩給法上ノ同一種ノ公務員タルコトヲ意味スルコトデアル。同一種ナリトハ文官、軍人、教育職員、待遇職員、警察監獄職員ノ一種ニ屬スルコトヲ以テ足り、其ノ中ニ於ケル細分ノ同一種ニ屬スルコトヲ要スルモノデハナイ。故ニ同ジ教育職員デアアル限リハ中等學校ノ教諭デモ小學校ノ訓導デモ區別ナシニ同一種類ノ公務員ニ屬スルモノデアル。



右ノ二級トイフノハ恩給法施行令第二十四條ノ十二於テ一級昇給ノ意味ヲ規定シテ居ルガ其ノ原則ニ從ツテ二級ヲ計算スレバ宜シイノデアアル。本條ノ場合ニ付テ施行令ガ特別ノ規定ヲ爲サナイノハ、本條ガ第五十九條ノ二第一項但書ノ場合ニ於テト規定シ施行令第二十四條ノ十ガ其ノ場合ノ一級ヲ規定シテ居ルカラ當然ノコトトシテ規定ヲシナカツタノデアアル。

第十一條

本法施行ノ際従前ノ規定ニ依ル普通恩給ニ付テノ最短恩給年限ニ達シタル者ニハ其ノ者ガ本法施行後

改正規定ニ依ル最短恩給年限ニ達セスシテ退職シタル場合ト雖モ退職前ノ俸給ニ依リ之ニ普通恩給ヲ給ス但シ其ノ年額ハ在職年ノ不足一年ニ付退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一二相當スル金額ヲ控除シタルモノトス

普通恩給ニ付テノ最短恩給年限ガ改正法ニ依ツテ平均二年延長セラレタ結果、改正法施行ノ期日タル本年十月一日迄ニ改正前ノ恩給年限ニハ達シテハオルガ改正法施行後ニナレバ恩給年限ニ達シナイトイフ者が存シ得ル。例ヘバ本年十月一日ニ於テ在職年十五年ヲ超エ十七年未滿ノ文官、在職年十一年ヲ超エ十三年(下士官兵十二年)未滿ノ軍人ノ如キ、此レ等ガ本年十月一日以後在職年ガ未ダ改正法ノ最短恩給年限ニ達シナイデ退職シタトキハ、改正法ニ依レバ普通恩給ヲ給セラレナイコトト爲ルベキデアアル。併シ其レハ甚ダ酷デアアルトイフノデ此ノ經過的規定ガ置カレ、此ノ場合ニハ改正法ノ年限ニ依ラズ舊年限ニ依ツテ普通恩給ヲ給スルトシタノデアアル。但シ其ノ恩給額ハ將來ノ凡テノ者ガ減ゼ

シメラルルガ如ク、改正法ノ最短年限ニ不足スル在職年一年ニ付退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一二相當スル金額ヲ控除スルノデアアル。具體的ニ言ヘバ、文官、教育職員及待遇職員ハ在職年十五年餘ナラバ百五十分ノ四十八、十六年餘ナラバ百五十分ノ四十九ノ率ニ依リ(教育職員ノ勤績加給ハ改正法ニ依ル)、準軍人以上ノ軍人ハ在職年十一年餘ナラバ(高等官八等ノ額ヲ給セラルベキ准士官ニ付テモ准士官トシテ二年以上在官ノ要ナシ)百五十分ノ四十八、十二年餘ナラバ百五十分ノ四十九ノ率ニヨリ、下士官兵ハ在職年十一年餘ナラバ百五十分ノ四十九ノ率ニ依リ、警察監獄職員ハ在職年十年餘ナラバ百五十分ノ四十八、十一年餘ナラバ百五十分ノ四十九ノ率ニ依ルノデアアル。

右ノ場合ニ於テ基礎俸給年額ハ何レモ改正後ノ「退職前一年内ノ俸給總額」ニ依ルノデアツテ退職當時ノ瞬間の名目俸給ニ依ルモノデハナイ。

本條ノ適用ニ關シ二三ノ例ヲ示スコトトスル。

(イ) 本法施行前普通恩給ヲ受クルノ權利ヲ得タル者が其ノ後再就職シ、前後在職年ヲ通算シテ改正法律所定ノ恩給年限ニ達セスシテ退職シタトキハ、再度ノ退職ガ公務傷病ニ因ル不具廢疾ヲ理由トスルモノナラザル限り改定ヲ行ハナイ。

(ロ) 改正法律ニヨリテ恩給法第九十九條ガ廢止セラレタ結果、準教育職員ノ在職年ガ通算セラル



ルコトト爲ツタノデアルガ、其ノ通算ノ結果教育職員ノ在職年ガ十五年以上ニ爲ツテモ、其レガ十七年未滿デアル場合ニハ本條ノ規定ハ適用サレナイ。何トナレバ本條ハ改正法律施行前ニ退職シタリトスレバ普通恩給ヲ生ジタルベシトスル場合ノミヲ救済シタノデアルカラ、改正法律ニ依ツテ初メテ舊所定年限ニ達スル様ナモノハ本條ノ特別保護ヲ受クルモノト謂ヒ得ナイカラデアアル。

(ハ) 次ニ圖解スルガ如キ場合ハ本條ノ規定ノ適用ヲ受クル場合デハナイ。其ノ率ハ百五十分ノ五十トシテ退職當時ノ俸給金額デ普通恩給ヲ給スル。

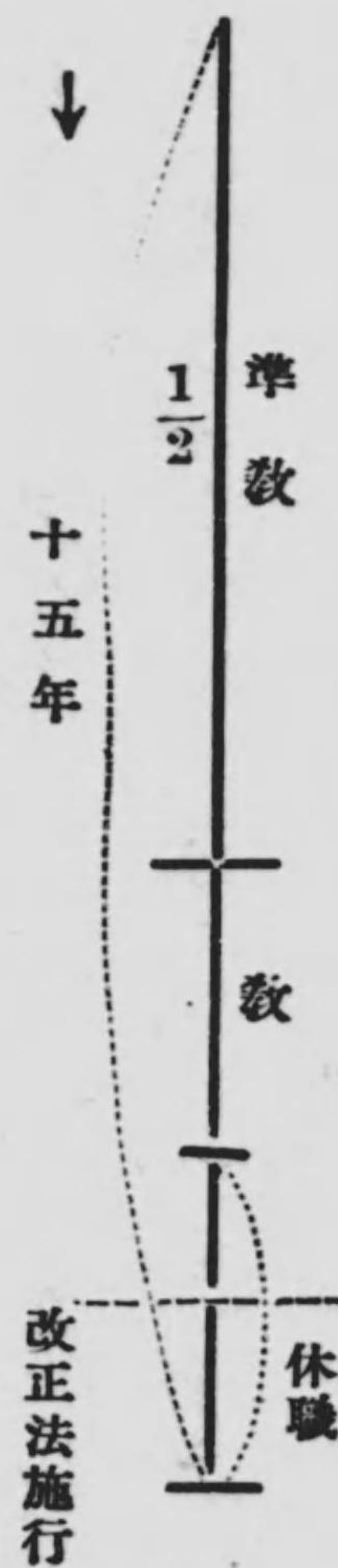


**第十二條** 前條ノ規定ハ本法施行ノ際現ニ休職、再服役其ノ他法令上ノ在職期限ノ定アル地位ニ在ル者ニシテ本法施行後其ノ期間ノ終了ニ因リ従前ノ規定ニ依ル普通恩給ニ付テノ最短恩給年限ニ達スルモノニ付之ヲ準用ス

改正法施行ノ期日タル本年十月一日ニ於テ舊規定ニ依ル普通恩給最短年限ニ達シナイ者デモ、當時休職待命等在職期限ノ定アル地位ニ在ツテ自己ノ意思ニ依ツテ在職期間ヲ如何トモスルコトヲ得ナイ者ニ付テハ最短年限ノ改正ヲ嚴格ニ適用スレバ、之ヲ休職ニ置イタ官廳モ置カレタ本人モ豫期セザル

結果ヲ味フコトナキヲ保シナイカラ此ノ場合ニモ當該休職等ノ滿期ニ依ツテ舊規定ニ依ル恩給年限ニ達スル場合ニハ改正規定ニ拘ラズ之ニ普通恩給ヲ給與スル。尤モ其ノ額ハ新規定ニ依ル最短恩給年限ニ不足スル年數一年毎ニ退職前ノ俸給年額(休職給ハ本給ニ引直シタルモノ)ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ控除スルコト及恩給金額算出ノ基礎俸給年額ガ退職前一年内ノ俸給總額デアルコトハ前條ノ場合ト同様デアアル。

右ノ趣旨デアアルカラ前條ノ規定ノ適用サレナイ所ノ、次ニ圖解スルガ如キ場合ニハ本條ノ規定モ亦適用サレナイ。



**第十三條** **第六十四條**ノニ改正規定ハ本法施行前受ケタル一時恩給ニ付テハ之ヲ適用セス

一時恩給ヲ受ケタ者ガ再就職シタトキニハ其ノ一時恩給ヲ返還セシムルカ又ハ普通恩給額ヲ減ズルカデアアルガ、改正法施行前即チ本年九月三十日以前ニ退職シテ一時恩給ヲ受クルコトト爲ツタ者ニ付テハ其ノ一時恩給ハ返還セシメナイ。



第十四條 第七十五條第二項ノ改正規定ハ公務員ガ本法施行前死亡シタル場合ニ付テモ之ヲ適用ス但シ此ノ場合ニ於ケル加給ハ本法施行後ニ屬スル殘存期間ニ付テノミ之ヲ爲ス

特殊扶助料ニ對スル五年間三割ノ加給ハ公務員ノ死亡ガ本年九月三十日以前デ在テモ將來ニ向ツテ之ヲ爲スノデアル。併シ其ノ五年間トイフノハ常ニ公務員ノ現實死亡ノ時カラ起算スルノデアルカラ例ヘバ昭和六年九月ニ死亡シタ公務員ノ遺族ニ爲ス加給ハ本年十月以後三年間繼續スルノデアル。此ノ加給ヲ受ケントスル者ノ中既ニ扶助料ノ裁定ヲ受ケタモノハ「昭和八年法律第五十號附則ニ依ル恩給更正及請求手續」第一條ノ規定ニ從ツテ其ノ證書ヲ提出シテ加給金額ト加給期間ノ記入ヲ受クベキデアル。

第十五條 恩給法施行前同法第二十三條ニ掲グル公務員トシテ普通恩給(退職料)ヲ受ケ引續キ文官ニ任ジ同法施行後迄在職シタル後本法施行前退職シ同法第八十五條第一項ノ規定ニ依リ其ノ普通恩給(退職料)ヲ文官ノ普通恩給ニ改定セラレザリシ者ニ付テハ同項ノ規定ニ拘ラス特ニ恩給法第九十條第一項ノ規定ヲ適用シ本法施行ノ日ヨリ本法施行前ノ規定ニ依リ其ノ普通恩給(退職料)ヲ文官ノ普通恩給ニ改定ス但シ恩給法施行後文官退職ニ因リ一時恩給ヲ受ケタル者ニ付テハ勅令ノ定ムル所ニ依リ其ノ一時恩給ノ金額ヲ改定ニ因リ増額セラル普通恩給額中ヨリ支給ニ際シ控除ス  
前項ノ規定ハ恩給法施行後本法施行前ニ文官トシテ普通恩給ヲ受ケタル者ニ付テハ之ヲ適用セズ

第一項ニ規定スル者引續キ本法施行後迄在職スルトキハ恩給法第八十五條第一項ノ規定ニ拘ラス恩給法第九十條第一項ノ規定ヲ適用シ同法第二十三條ニ掲グル公務員トシテノ普通恩給(退職料)ヲ文官トシテノ普通恩給ニ改定ス

本條ハ所謂警部巡查通算ノ規定デアル。大正十二年十月一日即チ現行恩給法制定前ニ現在ノ警察監獄職員ニ當ル職員(巡查、警部補等)トシテ退職シ退職料ヲ受ケタ者ガ即日判任官(警部)ニ任ジ恩給法施行後(大正十二年十月一日以後)退職スル場合ハ數種ニ別ツテ考察スルコトガ出來ル。

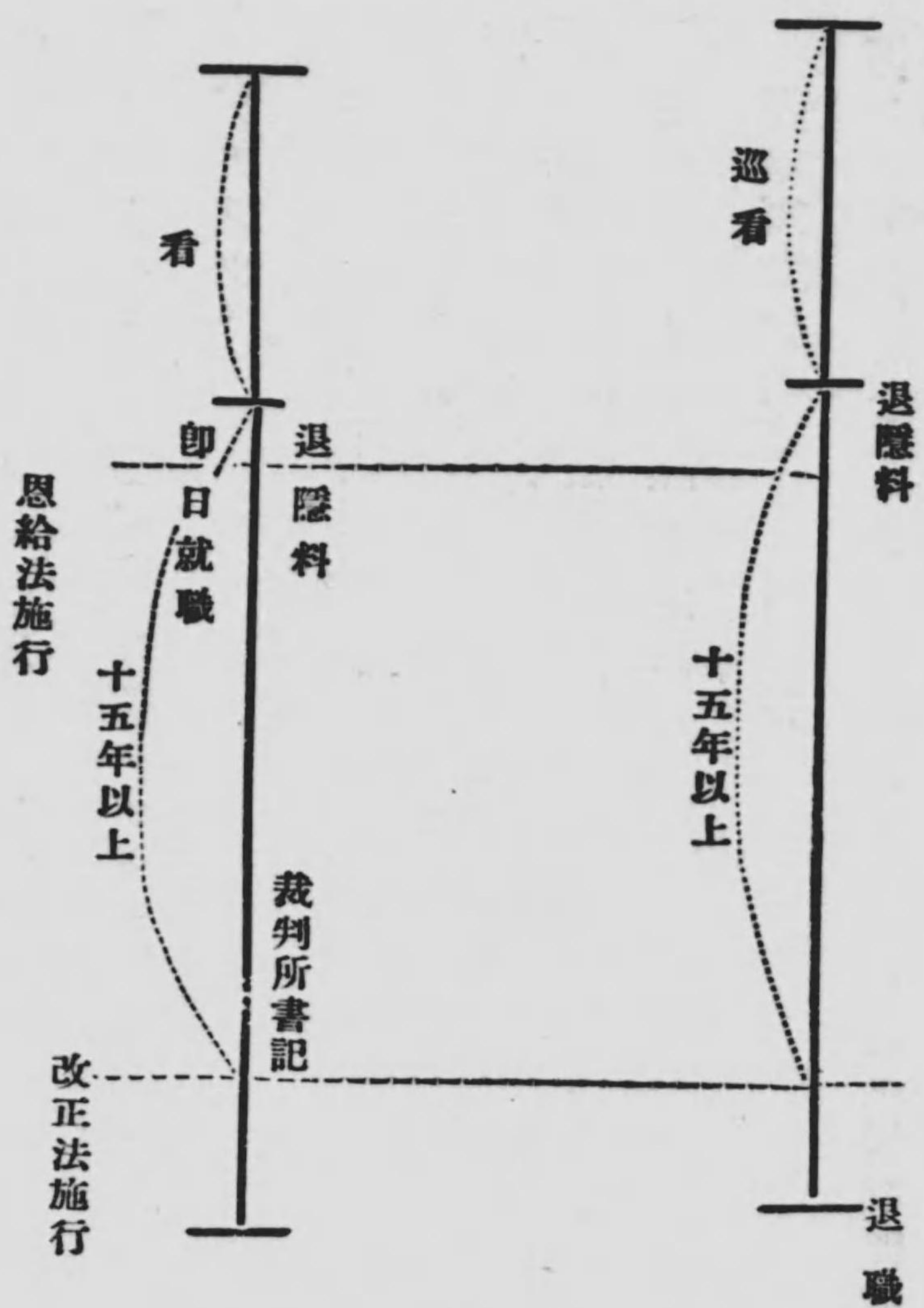
(一)ハ其ノ者ガ本年十月一日前ニ退職シタ場合デアル。此ノ場合ハ更ニ二ツニ別レ(イ)之ニ依ツテ文官トシテ獨立ニ普通恩給權ヲ生ジタ場合ト、(ロ)在職年十五年未滿ナル爲ニ普通恩給權ノ生ジナカッタ場合トニナル。前場合ニ於テハ其ノ者ハ警察監獄職員トシテノ普通恩給ト文官トシテノ普通恩給トノ二個ヲ併セ給セラレテ居ルノデアツテ、斯ル者ハ其ノ儘ニ二個ノ恩給ヲ給セラレテ行クノデアル。(本條I)(尤モ此ノ者ガ改正法施行後公務員ニ再任シテ其ノ恩給ヲ改定セラルル場合ハ別デアル)。後ノ場合ニ於テハ警察監獄職員トシテノ普通恩給ヲ給セラルル外ニ文官(警部)トシテノ一時恩給ヲ受ケルノデアアルガ、兩在職年ヲ通算シテ文官トシテノ普通恩給ニ改定スルコトハシナカッタノデアアル。其レヲ本條第一項ニ依ツテ在職年ヲ通算シ其ノ在職年數ガ十五年以上ニ爲ルナラバ之ヲ文官トシテノ普



通恩給ニ改定シ改正法施行ノ日タル本年十月一日以後給與スルコトトシタ。但シ既ニ受ケタ所ノ一時恩給ハ勅令即チ恩給法施行令中改正勅令附則第五條ニヨリテ之ヲ改定ノ普通恩給ヨリ控除スルコトト爲ツテオルガ、其ノ控除スル額ハ警察監獄職員トシテノ恩給(退隱料)ヲ文官トシテノ恩給ニ改定シタコトニ依ツテ増ス額デアル。換言スレバ改定ニ依ツテ増ス額ヲ以テ一時恩給ヲ償却シ、償却シ了リタルトキハ初メテ増額分ヲ支給シ始メルノデアル。此ノ控除ハ法律ニモアル通り普通恩給カラノミ控除スルノデアリ、受給者が死亡シタトキハ控除ハ其レデ止ムノデアツテ扶助料カラ控除スルモノデハナイ。又此ノ控除ハ普通恩給金額ヲ減額スルモノデハナイカラ扶助料額ハ控除ヲ受ケナイ普通恩給額ヲ基礎トシテ算出サルモノデアル。又此ノ改定ハ改正法施行ニヨツテ將來ニ向ツテ爲サルモノデアラカラ其ノ公務員ガ改正法施行前ニ死亡シタトキハ扶助料改定ヲ行フモノデモナイ。

右ノ(ロ)ノ場合ニ於テ其ノ者が大正十二年十月以後改メテ公務員ニ再就職シタ場合ニハ警察監獄職員トシテノ恩給ハ在職中全部停止セラレ、其ノ代リニ退職後兩在職年ト中間ニ挿マレタル文官(警部)ノ在職年トノ三者ガ通算セラレテ最後ノ公務員ノ普通恩給ニ改定セラレル。此ノ場合ニ付テハ本條ハ規定ヲ爲サナイ。其レハ停止通算相表裏スルノ原則ニ依ツテ大正十二年以來現行法ノ解釋トシテ確定シテオル所ダカラデアル。

(二)ハ大正十二年十月以來未ダ一度モ文官トシテ退官シタコトガナク改正法施行後退官スル場合デアル。此ノ場合ニハ其ノ文官トシテノ在職ガ前ノ警察監獄職員トシテノ在職ニ繼續シテオル限り兩者ヲ通算シテ文官ノ普通恩給ニ改定スルノデアル(本條)。此ノ場合ヲ實例ニ依ツテ二三示スコトトスル。



本條第三項ニヨリ改定シ文官恩給ヲ給セス

本條ヲ適用セズ文官恩給ヲ給ス

右第一項ニ規定スル「引續キ文官ニ任ジ」トイフノハ法律上ノ轉任ノ場合ハ勿論ナルモ、タトヒ法律上ハ轉任ニナリ得ナクトモ(イ)職務ガ同系統デアツテ後官任命ニ依ツテ前職ヲ失フ場合(ロ)前職退職



ノ當日又ハ翌日之ト同系統ノ後官ニ任命セラレ、而モ其ノ退職ト任命トノ間ニ聯絡アル場合ヲモ含ムモノト解スルヲ妨グナイ。何トナレバ此ノ規定ハ警察監獄職員ヨリ昇進シテ文官ト爲ツタ人々ヲ救フ爲ニ規定セラレタモノデアルカラ、タトヒ法律上轉任關係ヲ生ジナクトモ昇進ヲ認メネバナラヌト共ニ系統ノ異ツタモノノ間ニ此ノ關係ノナキコトモ明デアル。同一系統ニ屬スト認メラルル官職ハ左ノ如キモノデアラウ。

(イ) 巡查——警部補——警部

(ロ) 看守——看守長

(ハ) 消防手——消防士  
消防機關士

(ニ) 貴衆院守衛——守衛副長

(ホ) 陸海軍監獄看守——看守長

以上何レノ場合ニ於テモ大正十二年十月一日前ニ警察監獄職員トシテ退職シ即日又ハ翌日文官ニ任ゼラレタ場合デナケレバ本條ノ恩典ニ浴シナイ。其ノ間ニ時日ヲ置イタトキハ恩給法第九十條第一項本文ノ規定ニ依ツテ通算ヲ拒マレルカラデアル(本條I、II)。之レハ獨リ此ノ種ノ公務員ニ付テ爾ウデアル許リデナク各種ノ公務員ニ付テ一様ノ原則デアル(恩給法九〇)。此ノ種ノ受恩給者ハ大正十二年十月一日

以後公務員トシテ再就職スルコトニ依ツテ其ノ普通恩給ノ全部停止ヲ受クルト共ニ又其ノ普通恩給ヲ再任ノ官職ノ普通恩給ニ改定サルル利益ヲモ有スルノデアル。唯本條ニヨツテ當然ニ後ノ官職ノ普通恩給ニ改定サルルコトハナイ。

第十六條 第九十一條第二項ノ改正規定ハ本法施行ノ際現ニ在職シ従前ノ同項ニ規定スル期間ヲ經過シタル者ニ付テハ之ヲ適用セス

恩給法第九十一條第二項ハ所謂植民地加算ノ要件タル在勤年數ニ付テ規定シタルモノデアアルガ、今回ノ改正法ニ於テ夫々其ノ要件期間ヲ延長シタ結果、軍人ハ一年、警察監獄職員ハ三年、其ノ他ノ公務員ハ四年ノ在勤ヲ要スルコトト爲ツタ。然ルニ本年十月一日ニ現ニ在職スル者デアツテ、九月三十日迄ニ改正前ノ年數デアル所ノ軍人六ヶ月、警察監獄職員二年、其ノ他ノ公務員三年ニ達シテ居ルモノデアアルナラバ改正法ノ定ムル在勤年數ニ達セザルトキニモ之ニ植民地在勤加算ヲ爲スノデアアル。

第十七條 本法施行ノ際現ニ在職シ恩給法第九十九條第一項ノ規定ノ適用ニ依リ同法第五十八條ノ規定ノ適用ヲ受ケサル者ノ恩給ノ停止ニ付テハ其ノ者ガ引續キ其ノ官職ニ在職スル期間ニ限り仍同法第九十九條第一項ノ規定ニ依ル

本條以下第十九條迄ハ恩給法第九十九條廢止ノ結末ヲ付クル爲ニ設ケラレタ規定デアアル。恩給法第九十九條第一項ノ規定ニ依レバ再就職ノ場合ニ恩給ヲ全額停止スルトイフ第五十八條ノ規定ハ教育職